

I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。その中で、地元協力者が10年前の三重大会で報告した時の取組の軸としていた子どもについての話があった。「その子は自分や家族を見つめたり、友だちとかかわったりする中で見つけた自分の夢を実現したが、その後、さらに新たな仕事を自ら見つけ、歩みだすこととなる。『本気でしたいことが見つかった』『今まで人権の学習を重ねてきたが、そのことも活かせる仕事だと思う』という言葉から、その子の原動力には、これまでの人権・同和教育の取組を通して培った力があっていないかと思った。」

最後に、討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

一報告1-①

あたしも話せるで～ともに育つ仲間づくり～

(高知県人教)

一主な質疑と意見一

三重 外国にルーツのある子どもがどれくらいの割合で通っているのか。様々なことを伝える上で、配慮・工夫していることは。地域のお祭りはどんな内容・方法で取組まれているのか。また、子どもたちが感じていることなどがあれば。

報告者 現在は6家庭が在籍。日常会話については、おおむね理解できるが、保育所の行事となると経験がないことが多いため、具体的なイメージを持つことができるように写真や映像を通して話をしている。文字による連絡だけではなく直接会って話すことを、気になることがあれば積極的に働きかけることを、忙しい時期には家庭支援保育士をはじめ、他の職員との連携を密にし、みんなで支えていくことを大切にしている。地域のお祭りを通して、子どもたちからは「自分たちが大

きくなったら、小さな子どもたちを喜ばせる立場で参加したい。」という声が聞かれたり、楽しかった催しを園での遊びにつないだりしている。また、地域の方が自分のことを知ってくれることに対する喜びを感じている。これは、保護者についても同様である。

香川 Aさん、Bさんの母国語やその子たち自身のことをもっと知っていくなど、周りの子どもたちのかかわりやそのことに関する取組などはあるか。

報告者 保護者懇談の中では話題にする機会を設けることはできているが、子どもたちの中で、特別に取り上げてということは行っていない。

高知 報告のあった園、そして、同じ地域の小学校では、異文化理解をベースに互いを理解し合える人間関係づくりを大切にしながら取り組んでいる。外国や日本の文化を特別に取り上げて行うのではなく、子どもたちどうしが、日常の遊びやかかわりの中で、言葉をはじめとする様々な文化を獲得していくものだとすることを先生方が理解して取り組んでおられる。地域のお祭りに関しては、とりわけ保育活動の中に太鼓を取り入れ、解放太鼓につながる取組を進めてもらっている。

愛媛 報告の中に、宗教や文化を尊重できるように給食や休みを配慮しているとあるが、具体的にはどういうことか。また、保護者懇談会はどれくらいの割合で計画されているのか。

報告者 宗教の関係で断食の期間があったり、除去が必要な食べ物があったりということがあるため、そのことについての配慮を園として行っている。当初は、断食の期間中、登園が遅れることが続いた時に、担任としては生活リズムを整えるという点で気になっていた。しかし、家庭訪問を行うことで、その期間の生活の様子などについて詳しく知ることができ、遅れる理由を理解することができた。そして、そのことを職員で共有することによって、園として配慮すべきことにつないでいる。また、家庭訪問を通して「日本で楽しく過ごすために日本語を勉強した」というAさんの母親の思いを知り、私たちもその思いをしっかりと支えていきたいと思った。保護者懇談会は、学期に1回を基本として行っているが、気になるこ

とがあれば、家庭支援保育士と連携しながら、積極的に家庭訪問を行っている。そこで聞き取った母親や父親の思いを支えながら、ともに生活できる園であり、地域でありたいと思う。

兵庫 外国にルーツのある子が日本語の習得に向けて、意欲が高まったというような取組はあるか。

報告者 共通の経験をしたときに話をする、その子がわかる絵本を取り出して1対1で読む、遊びに新しく入れる道具の名前を写真と文字で示す（話し言葉と実物と文字の一致）などの取組を行ってきた。保護者の方には、絵本を勧めたり、「子どもと一緒にひらがなの学習をしてみませんか」「好きなアニメと一緒に見てみませんか」などと働きかけたりしてきた。

三重 言葉の伝わりにくさから、子ども間でのトラブルはなかったか。またその場合の対応は。

報告者 気持ちの部分で伝わっていない場合が多いため、そこは、ていねいに、繰り返し、間に立ちながら話している。AさんやBさんと一緒に遊ぶ時間が多い子どもほど、トラブルが多くなってしまい、保護者に対してマイナス的なイメージを持たせてしまう可能性がある。そうならないようにするために、日頃から楽しく遊んだり、かかわったりしている子どもの姿もたくさん伝えるようにしている。また、そのことは、帰りの会において、子どもたちみんなで共有する時間をつくっている。

一報告2一④

自分を問う、観る眼・聴く力を問いつける

(奈良県人教)

一主な質疑と意見一

高知 Aさんにかかわる引き継ぎの言葉をどう受けとめたのか。また、4月当初、どんな学級にしていきたいかということについて子どもたちと話し合いを行った際、Aさんが当然発言するだろうと思った根拠は。

三重 Aさんの就学前の様子は。保・幼、小の連携でAさんに関することをどのように共有していたのか。

高知 「楽しい学級にしたい」と書いたAさんの思いを、その後の学級づくりにどのようにつないでいったのか。

報告者 引き継ぎの内容については、報告レポートの文字数の関係上、詳しくは書けなかった。実際には「なぜ?」「具体的には?」といった細かい部分について話を聞かせてもらった。その子が困っている、どうしようもできなかったことがあると受けとめたので、詳しく話を聞かせてもらった。ただ、引き継ぎの内容にあった立ち歩きや発言が止まらなくなるといった姿は見られなかったため、環境に左右されやすい面があるのかなと感じた。「楽しい学級」と書いたのは、自分の思いを伝えてもいいんだという「安心」を求めているからではないかということが、Aさんとともに過ごす中でわかってきた。保育所・幼稚園との引き継ぎはていねいに行っている。どちらかといえば、周りの子から被害を受けることが多かったようである。そのことも含めて、自分が見とった事実を保護者に返していきながら、ともに取組を進めていった。

奈良 屠場に行って話を聞かれたという話があったが、子どもたちも一緒に行ったのか。

徳島 140回の研究授業に取り組んできたと言われたが、それらは、部落問題学習とかかわったものであるのか、先生方がそのことに対してどのようにかかわったのか、Aさんの生活と結びついたものだったのか。また、数多くの研究授業が子どもたちや先生方にどのように生かされていったのか、そして、それはトップダウン、ボトムアップどちらの教育の中から生まれた取組だったのか。

奈良 (報告校の職員) 報告者の取組に先行して食肉についての学習をした。取組をつくろうと考えた複数の職員で大和郡山の食肉センターに見学に行った。その時は3頭の牛が解かれていく様子を見せてもらった。

奈良 (報告校の職員) 授業研究は、3年間で140本。今年は現時点で25本。負担になる授業研究はやらない。やりたくなる授業研究をしたいという願いをこめて始めた。授業者は指名しない。やりたい時に、やりたい教科を、やりたいだけやる。できる時にできるだけやる。何回でもいいから、全職員で公開していこうという方向で進めている。当然、参観も行ける時に行く。そして、ふり

かえり研究協議というものを授業者と参観者が集まって行う。学びに課題がある子どもがどんな姿で学んでくれたのかということを検証軸にしている。「ひとりも一人にしない」をスローガンとして。

協力者 授業研究を通しての子どもたちの変容があれば、その具体を。

奈良 (報告校の職員) 本校には、いわゆる「荒れ」が、学校存続の危機と思われるような時期があった。学校をつくりかえる(生み直す)取組を始めた。これまでの教育推進計画を全て捨て、最初からつくりかえた。学校全体で取り組むものをたくさん取り入れた。靴の置き方や聴く姿勢など、ルールは自分たちの心をきれいにするためだということ、子どもたちにどれだけ伝えられるかということも含めて取り組んできた。全職員で取り組むことによって、子どもたちは穏やかになっていった。また、表現力といえば、書くことやしゃべることだと思いがちだが、本校の表現力は「聴くこと」である。そうすることで思考力が高まり、他者とつながるということが芽生えてくる。そして、それらがペア学習やグループ学習に活かされていく。

香川 仔牛の皮を一人だけ触れなかった子どもがいたことに対する思いは。

報告者 まずはその子に聴くことから始めようと思った。「殺しているから怖くなった」ということだったので、その気持ちに寄り添うことが必要だと思った。それこそが、学習を通して子どもたちに伝えたいところだと思った。

—総括討論—

高知 大事にしなければいけないのは、子どもたちの声を聴くこと(傾聴)、そして、その声を受け止めながら、子どもの主体を引き出していくことだと考えている。保護者も含めた地域の教育力を高めながら、学校と協働して子どもたちを育てていかなければならないと思う。

和歌山 人権教育を基盤とした授業研究の発表における子どもたちの姿や今回の報告を通して、一人の子どもにこだわった授業づくりの大切さを改めて実感させられた。

奈良 よく思い出す、克明に思い出すということ、キーワードにすえて作文指導を行ってほしい

と願っている。若い教師たちのがんばりが展望となっている。

京都 保護者同士をつなぐということはとても大切だと感じている。保護者がつながることで、子どももつながる。そこが、子どもの背景を見とるとのことだと思う。

奈良 自分の人生の中で宝だと思っていることは、同和教育、生活つづり方、そして解放保育である。子どもの現実から実践がスタートしている保育の取組にもっと学ぶべきだと思っている。

高知 これからは同和教育で学びながら地域でつくってきたことを人権教育の中に入れていかなければならないと考えている。外国にルーツのある親や子どもたちを大事にした地域、保育、学校づくりをどのように進めていくかということが重要になってくる。

奈良 外国にルーツをもつ子どもの就学を機に、「世界の国と豊かに出会おう」をテーマとして、その保護者を巻き込んだ取組を行っている。様々な国の文化について学ぶことを通して、保護者と子ども、子ども同士のつながりをつくることに結びついている。

高知 子どももおとなも生きていく中で、必要と感じ、いろいろなことを知りたい、自分の思いを伝えたい、知ってほしいと思うから学ぶのだということ、これをこれまでの同和・人権保育の実践を通して学ばせてもらった。

大阪 全体を見ると平和な雰囲気を感じても、そこに埋もれてきつい思いをしている子どもがいるはずである。そこをていねいに見とり、かかわる中で必要な取組を生み出していくことが大切だと思う。

—報告3—②

先生、この子な 悪い子なんよ～その一言から始まった～
(徳島県人教)

—主な質疑と意見—

福岡 「先生見よってよ。」「これってどんなん。」などと聞いてくる子どもたちの姿から、自尊感情が育っていないと考えられた根拠は。

報告者 主体的に取り組む、かかわるということに対して、自己主張ができる、自己発揮ができるなどプラスの面だけを評価し、おもしろくない、やりたくないなどのマイナス面に対しては十分

に寄り添うことができていなかった。保育者が願うことに向けて子どもたちを導いたり、促したり、禁止や制止をしたり、注意をしたりしていた。子どもたちの姿から、保育者が考える好ましい望ましいことを肯定的に評価していたことに気づかされた。

兵庫 保育所における取組を小学校にどのようにつないでいるか。

愛媛 園内での子どもにかかわるつなぎをどのようにしているか。

報告者 小学校へのつなぎは、とても大切にしている。入学前から小学校の養護教諭をはじめ、様々な先生方との引き継ぎを行っている。また、小学校における行事等に参加することで、子どもたちとの出会いの場をつくってもらっている。保育所の勤務状況の関係で、様々な職員が子どもたちとかわることになる。そこで、連絡ボードを活用して、子どもの様子や保護者の様子で気になったことなどを各職員につなぎ、声かけや働きかけを行っている。

鳥取 とらえ直しをする上で、職員の中ではどんな議論があったのか。

愛媛 職員の意識統一を図るために、また、職員が尊重し合える職場づくりに向けてどのような研修や話し合いを重ねてこられたのか。

徳島 思いを共有するための時間をどのように生み出しているのか。とらえ直しのきっかけは。

報告者 全職員がそろうことは難しい。それを補うために小規模なリーダー会等を随時行い、そこで論議・確認されたことは、全職員に伝わるようになっていく。休憩時にお茶を飲みながら、子どものこと、自分のこと、家庭のことなどを出し合える場や雰囲気や大事にしている。その積み重ねが職場づくりにつながっている。とらえ直しのきっかけは、Sさんの「ぼく、また…って言われるのはいやだ」という言葉。その言葉によって、子どもたちへのかかわり方が問われた。ある子どもの姿のとらえ方について、これまで各自の価値観で判断していたことを職員の中にひろげ、そのことに対してそれぞれの考えを出し合うことによって、職員による学び合い、とらえ直しの場が生まれていった。

－報告4－③

なんかイライラすんねん～アキタカとかかわってわかった、子どもに寄り添うということ～
(大阪市人教)

－主な質疑と意見－

佐賀 アキタカさんのどのような言動から周りの子どもたちは理解を示したと見とられたのか。また、先生自身はアキタカさんにはどのような思いがあると見とられたのか。

報告者 イライラしているアキタカさんにはきっと理由がある。イライラの原因をていねいに聞きとり、子どもたちにも返していくことによって、理解を示す子が増えていった。中には、アキタカさんに寄り添い、話を聞こうとする子どももいた。私自身はどのような状況の中で学校に来ているのかということを知り、理解することで、アキタカさんに対するとらえ方、かかわり方が変わっていった。

三重 現在の父、母、アキタカさんの関係は。

報告者 石を投げた出来事にかかわる相手側との確執によって、母親の心労が続いている。その影響がアキタカさんの姿として表れていることがある。父親とは、直接会って話をすることはできていない。

大阪(報告校の職員) アキタカさんが示す様々な姿の理由を常に考え、さぐりながら前担任とともに学校と家庭における支援を進めている。アキタカさんについては、少しずつではあるが自分の状況を客観的に見ることができている。

三重 家庭の深いところに踏み込むことは大変難しいことだと思う。しかし、それを行うことで報告にあるような取組につながっていると思う。面談を行うにあたり、どのような話をしたのか。

報告者 電話連絡や家庭訪問を繰り返しながら、アキタカさんの頑張りや課題について話し込みを行っていった。気持ちか落ち込んでいる母親に寄り添いながら、学校、そして父親とも一緒にアキタカさんのこれからについて考えていきたいという思いを伝えていくことで理解を得ることができた。

奈良 個をつないでいく中、学級全体で共有したことや取り組んだことなどはあるか。

報告者 アキタカさんに限ったことではないが、

学校で起こったことに関する不確かな情報が、子どもを通して学級の保護者に伝わることはないように、正確な情報を学級で共有するようにしている。様々な出来事を自分事として考える時間をつくっている。

鳥取 アキタカさんとのかかわりを通しての先生自身の変容は。

報告者 これまでは現象のみをとらえて、子どもに対する声かけをしたり、指導をしたりしていた自分がいた。子どもの気になる姿には、きっと何か理由があるのだろうというとらえ方で、その子の気持ちをくみとったり、理由をさぐったりしながらかかわりを進めていけるようになった。

—報告5—⑤

自信をもって、前をむいて進んでほしい～「向き合う」ことでみえたこと～ (三重県人教)

—主な質疑と意見—

三重 伊賀市では保育園・小学校・中学校と地域、それぞれが子どもたちの様子を出し合いながら、協働して子どもの育ちや学びを支えていく取組を行っている。また、地域の親の会にも先生方に参加してもらって学習を進めている。

三重 (Aさんが在学している小学校の職員) Aさんの保育園からの課題であった「自分の思いを伝える」という部分については、周りの子どもたちとのかかわりを通して、また、見守りながら、促しながら取組を進めることで、少しずつ気持ちや考えを伝えられるようになってきている。生活習慣については、親子でゲームの時間を決めたり、父親の自作のゲームを家族で楽しんだり、意識した取組が進められている。生活科においては、Aさんは父親の仕事を絵にかいて、聞き取ってきたことをみんなに伝えていた。家族について伝え合うことで、自分は家族に大切にされていること、また、友だちも同じだということ、さらに、家族にはちがいがあるということに気づき、感じ合えることをめざしている。学童への迎えの際に父親と話ができている。父親の話やAさんの姿から自己肯定感が育まれていっていることがわかる。将来に向けて必要な力をつけていきたい。地区学では、母親や父親にも様々な形がかかわってもらっている。

佐賀 差別を許さないという思いを職員間で共

有するとあるが、その具体を。

報告者 月に一度の職員会議と園内研修がある。その中で、部落差別はある、父親がAの将来を心配しなければならない差別の現実があるということを確認した。そのためには子どもたちにどんな力をつけていかなければならないのかということについて論議を重ねた。先を見据えた土台づくりが大切だということを全職員で確認した。乳児期からしっかりと取り組んでいくこと、また、保護者への啓発についても見直す必要があることなどについても共有できた。

佐賀 自分の子どもには闘える人になってほしいという思いが「バーンと言えるように」という言葉になったのではと考えているが、そのあたりの父親とのやりとりについてももう少し詳しく教えてほしい。また、60を過ぎて、そこにたどり着かれたことについて補足があれば。

報告者 そんなに心配していないと言っていた父親であったが、小学校入学前になると、差別にあった時には…「それおかしいやないか。」と言える力をつけてほしいという願いをもっておられた。「何かあった時に見過ごさない、反差別の気持ちを持てることを保育園では大事に取り組んでいるが、どう思われますか」という問いかけに対して、父親から「おれもそう思う」という答えが返ってきたことで、同じ方向を向いていることが確認できた。

Ⅲ 総括討論およびまとめ

三重 自分はどうかのと、自分に指を向けて問うことを忘れてはいけないという言葉が心に響いた。保育園から高校までの連絡会をもちながら、子どもたちのより良い成長や進路保障につなぐ取組を行っているが、より一層、何をすべきなのかということをも自分に問い返していきたいと思った。本校では、語り合うということテーマとし、子どもたちが感じていることや考えていること、自分の生い立ちのこと、家族のことなどを友だちに話ができるように、そして、差別をなくす仲間を増やすということを最終6年生の出口として取り組んでいる。保護者や子どもの思いにもっとしっかりと向き合っ、さらに取組を進めていきたい。

京都 徳島の報告の中にある「この子な、悪い子

なんよ」と言われた子どもの背景を見とっていくことはもちろん大事だが、それを言った子どもの背景もしっかりと見とっていかなければならないと思った。そして、発言した子どもの家庭にどのように返していくかを考えていかなければならないと思う。個人を責めるのではなく、そうさせてしまっている周り（社会）の責任を問う（変えていく）ことが必要である。

大阪 しんどい保護者、しんどい家庭があって、問題はどこにあるのかと考えた時に、職員室の中では、ついついあの保護者はとか、あの家庭はといった見方をする場面がある。しかし、そうではなく社会の責任であるにとらえ直し、自分たちにできることを考えていかなければならないと思う。

三重 自分の子どもを目の前にした時に、この子に差別を受けさせたくない、いろんな力を先生方につけてほしいという思いから、その時々親として自分の思いを語っていったのだと思う。自分の子どもにしっかりとかかわってくれる先生には、自分の思いを伝えられると考えたのだと思う。自分一人では弱いかもしれないが、自分の子どもや地域の子どもの目の前にすると、頑張らないといけないと思う。先生方とつながって差別をなくしていかなければいけないというのが、地域の親の思いであるということを知ってほしい。

三重 子どもの良くない行動ばかりに目が向いてしまうことで、また…という言葉が次々と出てしまっている状況がある。子どもとのかかわり方や向き合い方について全職員でしっかりと論議し、全職員がつながって新たな取組づくりを進めていきたい。

三重 Aさんのことを報告するにあたって、「先生方は、Aさんが将来、差別にあった時のことを想像して、胸が苦しくなったり、つらくなったりしたことがありますか」と問われた。その言葉がずっと私の胸に残っている。保育園だけでは補えない部分を地域の方をはじめ、小、中、高校の先生方が見守り、支えてくださっていることを今回の報告を通してとても強く感じた。

奈良 保育士としての自分であったり、親としての自分であったりいろいろと考えさせられた。親

としての立場としては、わが子が他の子を決めつけた発言をした時に、どう答えてあげればいいのか考えさせられる。わが子も嫌な思いをしているが、その子もきっとしんどい思いをしているはずである。保育としての立場としては、全職員の意識を変えていく上で大きな課題があることを感じた。

奈良 子どもが変わるのが先か、自分たちが変わることが先か、いや、変わってほしいと望むなら、自分が変わること。だから全人教大会に来ている。差別は社会問題。しかし、社会を構成しているのは、あなたであり、私である。変わっていく主体が変わらないとこの社会は変わらない。まず、自分たちから変わることが、私たちの仕事だと思っている。漠然とした抽象論で責任転嫁をしない。それが、よく言われる自分事として考えるということだと思う。同和教育の中で自己変革を問われ続けていると思っている。

奈良 報告や意見を聞きながら、子どもや保護者とつながる力がまだまだ足りないと感じた。自分を変えていく一歩をふみ出すために、明日から頑張っていきたい。

滋賀 四日市の朝鮮学校を卒業して保育士をしている。在日朝鮮人の学校だが、親のルーツは様々である。本校では月に3回、土曜日のお昼に在校生や卒業生の親が集まって、給食を作っている。給食を作りながら、親同士がたくさん話をする中でつながりができているように思う。日本には、朝鮮学校以外にも、様々な外国人学校があると思うので、その現場の先生方が全人教大会のような場に参加できるようになると、互いの学びにつながると思う。

奈良 まずは、教師が子どもの思いを聞けるようになる、そして、まわりの子どもたちも聞き合える状態になった上で優れた教材があれば、子どもたちは自分のことを語り、つながっていくことができると思う。その具体は部落問題学習でも自分のルーツについての話でもいい。そういうことが出てくる素地が、子どもたちの関係の中でつくられていくのだと思う。

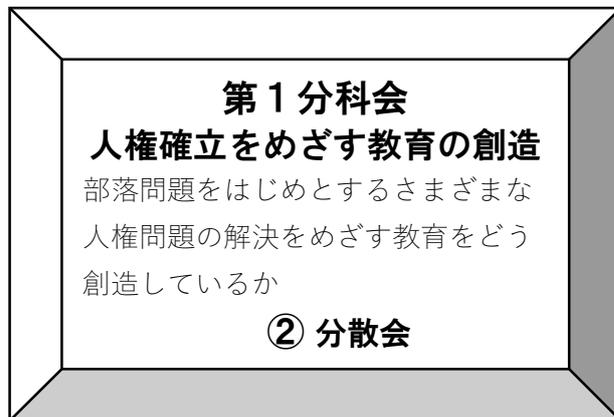
三重 日々の保育の中で、様々な「ちがい」について考え合い、認め合う取組を積み上げていくこ

とが大切だと思う。

大阪 その子を何とかしようという考え方はなく、その子を取り巻く周りの状況をしっかりと見とり、その上で必要な取組を必要な人たちとともに考え、つくっていくことが大切だと思う。

まとめ

協力者より、それぞれの報告について、意味づけと価値づけ、さらには方向づけがなされた後、次のような話でまとめられた。今年の7月、法務省に関するニュースが取り上げられた。2月と5月にインターネットのオークションで壬申戸籍と思われる書物が売買されるということが起きている。法務省の立場としては、回収という形で対応している。しかし、3件のうち2件については回収できたが、1件は回収できていない。回収には、法的根拠がないため、任意で提出してもらえない。くり返しお願いはするに限界があるというようなコメントが法務省から出されている。このニュースを見たときに愕然とした。いわゆる新平民などという記述があるものなので、悪用される可能性が非常に高い。そのようなものが売買されていることに対して、国は傍観者としての立場をとるのだと捉えた。こうした国の状況に抗っていくためには、差別をなくすということ子どもたちとしっかり考えていくような取組を積み上げていくしかない。差別をしないということではなく、差別をなくしていくところを見通していくべきだと思う。「それっておかしい」というアンテナがしっかりと立った状態で、差別の不合理性を見抜き、どうすれば解消していけるかということを考えて行動していく力というものが求められているのではないかと考えている。全ての学校・園・所でそういった取組が求められている。乱暴に言えば、部落問題学習に取り組まないということは、差別を拡大させるとも言えるのではないかと考えている。取組の先に差別の解消というものが見通せているかどうかというのは、その取組が部落問題学習になりえるかどうかの大きな分岐点だと思っている。



I はじめに

分科会基調は、どのように差別の現実をとらえ、子どもや保護者に寄り添い、地域や関係機関との連携を図りながら、その子やその子をとるまわすすべての子どもたちの「自分らしく生きる力」を育もうとしてきたか、報告者自身が今ある人権課題にどう向き合おうとしているのか第1分科会の討議課題をもとに提案された。

また、ここにいる私たちが差別を許さないという思いを確かめ合うことで、差別をなくしていくなかまとしてつながっていかうと呼びかけられた。

その後、討議の柱を確認し、報告・質疑応答・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

一 報告1—⑨

俺らだって、かわいそうなんやで！先生。

(滋賀県人教)

一 主な質疑と意見一

滋賀 交流学級での周りの子とのつながりはどういうふうになっているのか。また、教職員間での広がり方をどうしているのか。どう広げようと思っているのか。

報告者 交流学級でできないことは多い。しかし、社会で生活するためには交流学級、集団の中でがんばらなければならないと思っている。Aさんは教師からよりも友だちからの支援がうれしいので、Aさんには交流学級の子の良さを伝え、交流学級の子にはAさんの良さやがんばりを伝えている。自分が両者のつなぎ役になろうと思っている。教職員間でも同じで、Aさんの良さやがんばりをいっぱい伝えることで、先生方の見方が変わってきたように思う。

三重 支援学級の他の子どもたちはAさんをど

う見ているのか。また、家庭の中でAさんはどう見られているのか。

京都 Aさんが変容していく中で、家庭とのつながりをどのようにしていったか。

報告者 支援学級の子どもたち5人はそれぞれ違う。Aさんは1番交流学級に行けていない。実際、周りの子がそれを「ずるい」、「なぜ僕らだけ」と言うことはある。その時、「そうやな」と共感したり、それぞれやれること、がんばる目標は違うと伝えたりすることで先生はAさんに楽をさせているのではないことが理解できるようになってきた。家庭は父、母、A、妹の4大家族。母親ははじめ先生に言われてしょうがなく支援学級に入ったと言った。今までやれると思っていたこと、やってほしいことができなくてかっとなったこともある。しかし、今ではAのがんばりを見ながら、いい意味で期待はしないでおこうと思えるようになった。少しずつAのがんばりを認められるようになってきた。

大阪 周りの子どもたちとAさんの日常の中で、学級の1人として丸々理解することをどのように進めていったのか。

奈良 自分は主が交流学級と思っている。交流学級の先生とどのような話をしながら進めていったのか。

報告者 どちらがメインか難しいが、「支援学級へ行ってきます。」と言ってほしいと思っている。私は交流学級の先生も経験し、どちらの気持ちや悩みも感じている。困ったことがあったら必ず自分も行って、自分が周りの子どもたちとなかよくなり、児童理解に努力している。やはり集団の中で過ごすことで、集団の中で困ることがわかる。そこをどう支援していくか考えていきたい。

—報告2—⑧

Aの心の成長～心のつぶやきアンケートを通して～

(京都府人教)

—主な質疑と意見—

愛知 Aさんが自分のいけなかったことを見つめ直すことができるようになった手立てや、アンケートで本音を語るようになったとあるが、本音を引き出す具体的な手立てはどのようなものがあったのか。

京都 「変わっていく」というフレーズがあるが、

「変わる」ということをどうとらえているのか。また、今後、これはしたい、これからも大切にしたいと思うことは何か。

報告者 数多くのトラブルがあったが、その一つひとつで相手からされていやだったこと、自分のいけなかったことなどをしっかり話してきた。養護教諭との関わりが大きく、Aさんのいいところを見つめつつ、こうしたらいいねとアドバイスしてくれ信頼関係を築いていった。アンケート実施で大切にしていることは、必ずはじめに、みんなが安心して気持ちよく過ごすためにしていると話すようにしている。また、テストのように席を広げ、他にはわからないように配慮している。「変わる」ということは、友だちがいやだと思う言動が減ってきたこと、友だちに対する気遣いや言葉かけが優しくなってきたことに見られるようになった。これからもクラス遊びに必ず参加し、そういう場の姿もしっかり見つめていくことを続けたい。

三重 Aさんが変わってきたのはわかるが、今までのことを考えると簡単に周りの気持ちが変わるのは難しいと思う。やっぱりAさんのここはいやだというドロドロした部分はなかったのか。

三重 社会的に厳しい状況とはどういうことか。乱暴だったり、言うことを聞かなかったりするのはAさんの自己表現だったかもしれないが、先生はどうとらえていたのか。また、盗難の件にはどのような原因や背景があったと思うか。

報告者 自分がAさんがんばりを話すことがきっかけとなって、周りの子どもたちも少しずつAさんへの思いを語るようになった。トラブルごとにしっかり話を聞き、その中で自分自身も見つけるよう話してきた。言動の原因や背景として、家を出迎えてくれていた母親が仕事でなかなか家にいられなくなったことや、いろいろな要因がモヤモヤ感を生み、言動に至ったと思う。

三重 思っても言わないというのは、学級の課題だと思うのだが、周りの子どもたちへの取組はどのようにしていったのか。

報告者 Aさんだけでなく、心のつぶやきアンケートの中でAさんについて書いている子にしっかり話を聞くようにした。

福岡 校内でどんな先生と連携をとったのか、また、それはAさんにどんな効果があったのか。

報告者 支援員の先生からは休み時間の姿もよく見て様子を伝えてもらった。登校班の先生からは班長としてがんばっている姿を伝えてもらった。それらいろんな場面でのがんばりを家庭に伝えることができた。

京都 (発表校の教頭) 補足として、社会的に厳しいという点では、かつて部落・地域というところがあり、以前は祖父が積極的に活動していた。今はやっていない。校内の連携としては、養護教諭との連携がAさんの支えとなっている。養護教諭と担任がしっかり話し合っている姿をよく見ている。

滋賀 「母さんに早く帰ってきてほしい」という、Aさんにはどうしようもない部分を養護教諭に言えたことがターニングポイントになったのではないか。しかし、実際は誰にも言えない子が多くいる。まず、教師が本音や弱い部分を語ることから始めることで、子どもたちも語っていいんだという意識になるのではないだろうか。

奈良 家庭訪問や連絡帳を大切にしている。見えない部分を伝え、共有することが大事だと考えている。また、パーソナルポートフォリオという取組をしている。行事ごとに自分を見つめ、付箋を通して友だちどうし交流する時間を続けている。報告者が日々これは大切にしているということは何ですか。

報告者 いっしょに床掃除をすることに取り組んだ。1番しんどい仕事をいっしょにすることで、いろんな話ができるようになってきた。

－総括討議－

京都 島根大会での「子どもを分けたいかんやろ」という発言を思い出した。自分ならどう答えるだろうとずっと考えてきた。そして、私たちは分けるのではなく、自立に向けて環境を作ると考えた。やはり、こういう議論をし続けることが大切だと思う。本音を語るのは究極の目標。自分も自身のことを語るのに、すごく時間がかかった。なぜ語れるようになったのか。それは自己肯定感で、自分という人間が自信をもって生きるということに尽きる。Aさんに「がんばれ」ではなく、「あなたは精一杯がんばっている」、「あなたには

こんな良さがある」と自覚させるのが私たちの仕事だと思う。

報告者 (滋賀) ラグビーの「ONE TEAM」はみんな同じで1つではなく、それぞれのポジションをがんばって1つの目標に向かうことなので、私も周りの教職員もそれぞれがその子の自立に向けてがんばっていききたい。

報告者 (京都) 本音が語れないのは何か理由があるんだと気づかせていただいた。私はAさんに「がんばろう」と言っていたと思う。もっとAさんやみんなにいいところを伝えていきたいと思う。

報告者 (滋賀) Aさんが学校のことをいっぱい話してくれるようになったと母親が言ってくれた。自分で目標を理解して、それに取り組むことができるようになったことで、自己肯定感が高まったと感じた。

滋賀 大人の常識を子どもたちに知らず知らず押しつけていないか、教師の価値観を振りかざしていないかと考える。そういう人権感覚を見つめ直す必要があるのではないか。

大阪 大変だった児童と悪いところを言いに来る周りの子どもたちをどうにかしたいと部落問題学習や人権学習を続けてきた。ある時、問題を起こした児童を叱っていると、1人の女子が「先生、この子の話も聞いて」と言った。自分が一方的な指導になっていたと気付かせてもらった。やはり差別をしない、差別を許さない子どもたちを育てていく取組を続けていこうと思った。

滋賀 大人が知らず知らず価値観を押しつけていないかという意見について、教師自身が差別すること、差別されることをずっと考え続け、自分を解放しなければならない。自分が常識にとらわれていたり、いろいろなことに縛られていたりすると自覚して、どう自分を解放していくか考えなければならない。

三重 滋賀の質疑の中で交流学級に行かないAさんを「ずるい」と言っているが、支援学級も交流学級も楽しく受け入れられていれば、「かわいそう」になるのではないか。運動会の種目の場面では、出ないことをよしとするのはどうだろうか。できないからという配慮が大人にあるのではな

いか。また、京都の発表では、これができれば受け入れるとなると、管理教育にならないだろうか。教師にとって都合がいいものを求めているのだろうか。その子が劇的に変わるのではなく、周りの子や大人の見目が変わっていくことで、結果としてその子も変わるというのが順番ではないだろうか。人権教育で大事なものは、自分のものさし、価値観を変えることで、物事が変わって見えることではないか。ありのままを受け止めるというのは、本人が変わらなくても受け止めるということ。がんばっても変えられないことを変えようとするのではなく、それを見る目を変えていくことが大切だと感じた。

報告者（滋賀） 交流学級から帰ってきたときに「楽しかった」と言えるように支援学級でも力をつけていきたい。支援学級でのがんばりを周りにアピールすることで、周りからの声かけが多くなってきた。運動会の種目への取組はもっともっとAさんの気持ちを読み取りながら、交流学級の先生としっかり話し合う必要があったと思う。

－報告3－⑥

後悔だけはしたくない（愛媛県人教）
－主な質疑と意見－

愛媛 園から出したアンケート等が返ってこない、こちらからのアプローチに対して反応しない家庭に対して、どんな手立てを行っているのか。

三重 先生方は基本的な生活習慣をどのようにとらえているのか。また、アンケートはどのような過程で作られたのか。

報告者 保育園は必ず朝夕家の方が送り迎えされる。その短い時間を大切に、話をするようにしている。また、アンケートを返すときに担任がメッセージを書くようにし、園と家庭がつながるようにしている。基本的な生活習慣は、小学校に上がるまでに、これは生きる力として身に付けておいてほしいことと考える。一人ひとりの生活背景を理解した上で、保護者と連携をとるようにしている。また、生活習慣が不十分なことで偏見の目で見られないようしっかり関わっている。

三重 生活習慣をつくっているのは子どもではなく、親である。アンケートから見えてきたことを園ではどうとらえているのか。

愛媛 就学前の生活習慣は0歳から始まってお

り、少しずつ自立してくる。周りの大人が、子どもがやろうとしていること、成長を保障することが生活習慣ととらえている。それを家庭といっしょに取り組んでいくために、家庭の状況を知ったり、園のめざす内容を知らせたりしているのではないか。

愛知 どれぐらいの規模でアンケートを行っているのか。アンケートの内容をどのような話し合いで決めていったのか。アンケート後、どのような取組をしようと決めていたのか。

奈良 地域の反応はどうだったのか。

三重 アンケート項目の決め方と、生活習慣を付けるための園の具体的な取組はどのようなものがあるのか。

奈良 アンケート結果を小中にどのようにつないでいくのか。また、つなぐことでどのような成果があったのか。

報告者 規模については、自園からスタートし、地域の実態を把握しようとなった。その後、他の地域の実態も知るため市全体でアンケートを行った。これから見えてきた課題に対して取り組んでいくところである。つなぐという面では、アンケートについて各小学校の校長に話している。中にはアンケートを行った小学校もあり、これから連携を図っていこうと思う。アンケートで出てきた「寝た子を正しく起こしてほしい」という意見は、園と保護者が人権・同和教育学習に真剣に向き合ってきた結果だと思う。その思いを小学校にもつなげていきたい。アンケートの項目については、市の掲げる5つの目標から考え、親子をつなぐために何を投げかければいいのか話し合い、決定していった。アンケートは実施2年目、これからの地道な継続が大切だと思うので、項目を改善し、個人との関わりを深めながら続けていきたい。

三重 お仕着せの生活習慣からは子どもたちの実態や課題は見えてこない。アンケートをもとに子どもたちとしっかり話すことで、家庭の課題やそうせざる終えない現実を知り、それを否定するのではなく、応援していく。また、保護者の悩みや生活改善には、学校・園だけでなく、行政との連携も大切である。

愛媛（発表園の職員） アンケートを出さない保

護者に対してどうするか、園で話し合っている。まず、園での子どもの様子や成長をしっかりと伝え、それから園の取組を理解してもらおうようにしている。また、保護者の様子を職員で共有し、保護者理解に努めている。

一報告4-⑦

そのままではええねん～自分をみつめ、語りはじめた子どもたち～
(大阪府人連)

一主な質疑と意見一

奈良 総合的な学習以外で学級で取り組んでいるなかまづくりには、どのようなものがあるか。他の学年でのタウンワークス(総合的な学習の時間)の取組はどのようなものか。

福岡 タウンワークスをどのような気持ちで継承しているのか。

三重 Aの国籍はどこか。白人系か黒人系か教えてほしい。

報告者 国籍は日本で、白人系である。人種というより、人と違うという意識で悩んでいる。布忍小は自分の気持ちを言える子が多いと感じる。それは入学時からめ事があると、気持ちをしっかり出させ、解決している。気持ちを伝えることで、よい結果となる経験を重ねている。その上にタウンワークスの取組がある。タウンワークスでは、学年の実態と、このような子どもになってほしいという願いをゲストに伝え、話し合いを行っている。授業では、お互いが自分事として語り合うことで理解を深めている。生活科も含めて、1～6年までタウンワークスに取り組んでいる。学年に合わせた切り口で内容は考えているが、すべて自分に戻ってくる学習を考えている。

滋賀 BはAに向き、AはCに向いている。BとAの2人の関係はどういうものか。また、Bや周りの子どもたちが変わったら、もっとAも変わるのではないか。

報告者 BとAは保育園の頃からつながりがあり、何度もくっついたり離れたりしている。やはり根っこの部分でつながり、深い関係だと理解している。周りの子は変容というより価値観が広がっていると感じている。

滋賀 BはなぜAとの2人だけの関係にこだわるのか。価値観が広がったのであれば、Bもいろいろな子に意識が向くようになるのでは？

大阪(発表校職員) BにとってAは小さい頃からいっしょにいて、特別な存在だとBから聞いている。Bは3年になり、Aとは違うクラスになったが、他の友だちともうまく学校生活を送っている。

奈良 母親はAに部落問題、結婚、アメリカでのことなどをどう伝えているのか。

報告者 この夏休みの学習会で、仕事の誇りについて学ぶ場があった。そこで、母親はAを含めた子どもたちに、差別はダメだ、みんなで協力していこうと話された。しかし、直接部落についてAには話していない。少しずつ感じる中で知ってほしいと言われた。結婚についてはわからない。

三重 布忍小では部落問題学習をどう定義されているのか。また、そこから見えてきたものは？

福岡 若い教職員への研修はどのように行っているのか。部落の子が学んでいることや自分のことを語る場面があれば教えてほしい。部落問題をテーマとする学習が6年間の中であるのか。

報告者 はじめは知識を教えるのが部落問題学習だと思っていた。先生方にタウンワークスは部落問題学習だと言われたが、なかなか結びつかなかった。しかし、ゲストの話や取組を自分事として考えている。話を聞き、思いを返すことで、自分のふつうが広がっている。カテゴリーで判断するのではなく、その人自身を見ていこうと思うようになった。1番言いにくいことをみんなに語り、みんなに共感してもらえることで、誇りになっている。それが差別に負けない、差別を作らない子どもたちを育てることになる。それが部落問題学習だと信じて行っている。

一報告5-⑩

「こんな…自分は…嫌です…」～Aの存在が学級にもたらすもの～
(三重県人教)

一主な質疑と意見一

三重 通級指導教室に行くときのAの姿に変化はあるのか。「私らみたいな家族は」と言った母親は家族をどう見ていたのか。

報告者 Aは手を振って友だちのことばに応える姿が見られた。また、友だちは通級指導教室を理解した上で、応援のことばかけができています。母親の生い立ちやAを育てる中での悩みや葛藤を含めて、社会の中での立ち位置を感じられた発

を用いて、コミュニケーションの手段をつかんでいくというものである。

滋賀 教師は関わる子と関わられる子という目で見ていないか。子どもの中ではもっと対等じゃないかと思う。自分の持っている価値観や感覚を問い直すことが大切ではないか。

高知 うまく表現できない子に表現力を身につけるといのが、共通の話題のように思う。かつてから人権・同和教育では言語表現力が重要視されてきた。

大阪 うまく気持ちを表現できず、暴力的な行為を行ってしまう子を排除したくないが、まじめにやりたいという子の気持ちもわかる。その両者がうまく過ごせる居場所づくりに悩んでいる。

三重 特別支援教育は学校教育だけではなく、社会の受け入れ体制が大切である。だからこそ、すべての人権課題を地域に啓発していかなければならないと感じた。

滋賀 周りの空気づくりが大切である。しんどい子を支えられる子を育てていきたい。そして、しんどい子がいきいきと生活する姿を親に見せていけるよう、明日からがんばりたい。

三重 小学校から中学校への引き継ぎは、こんな課題があるで終わらせることなく、ここまで取り組んで今こういう状態である、中学校ではどういう目標を持とうか、という教育課題の継承を行うことが大切だ。

三重 保育士さん、先生方は日々がんばっている。是非、その人たちの人権も守られ、これからもがんばれるようにしていただきたい。

福岡 世代交代の中、脈々と続けられてきた努力を次の世代につなげていきたい。当たり前だと思っている学校文化や空気を見直し、10年度の空気が変わっているよう、次の世代と共にがんばりたい。

大阪 なぜその子が苦しんでいるのかを教師は絶対に忘れないで見ていきたい。どこか教師の見方を押しつけていないか、できないのは子どものせい、家のせいとっていないか。もう一度、誰の顔を上げるために取り組んでいるのか考えたい。そして、メンバーが代わっても、目の前の差別を忘れず継承していきたいと思う。

三重 71回もやって、なぜ差別はなくならないのかという心の叫びを聞いた。高校や社会に出たら守られないという不安がある。だからこそ地域、学校がつながった人権・同和教育を行っていかなければならない。

愛媛 就学前の子どもには、まず大人が反応し、ぎゅっと抱きしめるスキンシップを大切にしたい。安心できる大人がすぐそばに居ると感じる事が大切だ。

滋賀 みんなと同じことができないことがいけない空気がある。教師が周りの目を気にして、その空気を作っていないか考える必要がある。

三重 自分を変えてくれた人権・同和教育、特別支援教育を若い世代に伝えていきたいと強く感じた。

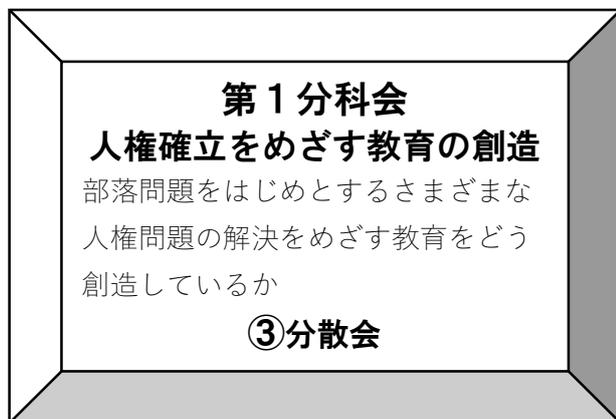
奈良 先生、ちょっと話聞いてくれるかなと言われる先生になってほしい。また、いろんな子どもや親の話聞いて、視野の広い教師になってほしい。

まとめ

冊子 47 ページに力強いメッセージが書かれている。是非目を通してほしい。また、5本の内容とも変わるべきはまず自分と述べられていることに感謝したい。

5本の発表それぞれから学んだことを述べる。なぜ交流学級へ行けないのか、運動会の種目に参加できないのかという理由の背景にこそ、差別の現実がある。がんばれば受け入れる、変われば受け入れるという考え方は管理教育ではないか。変わるべきは教師のものさしであり、周りの見方ではないか。ありのままを受け入れるとは本人が変わらなくても受け入れるということである。自分の差別性を見つめ直すことこそ、自ら変わるということではないだろうか。しんどい家庭を支援していくには、保・園だけでなく、学校・地域・関係機関・行政の連携が必要である。人をカテゴリーで見るのではなく、その人を見る。1番言いにくいことを語り、周りがそれに返していくことがお互いの誇りになっていく。そういうことが部落問題学習だと考える。一人ひとりしっかり話し込むことで、それぞれの自己開示へとつながった。報告を通して確認したいのは、何が差別の現実かということ。それをしっかり見つめることが実践

のスタートではないか。しっかり語れば、真剣に聞いてくれるなかまがいることこそ、本音が語れる集団となっていく。そして、語り、返し合う中で自分に自信を持ち、自己受容感が育ち、反差別の集団が作られていくのではないだろうか。2日間、多くの真摯なご意見を出していただき、心より感謝申し上げたいと思う。



I はじめに

協力者の出身地と関わって、「竹田の子守歌」を継承する機会となっていた学習会が、高齢化等の諸事情により休止された事例が紹介された。そして、大会基調を踏まえ、部落問題をはじめ様々な人権問題を若い世代の方々にも継承し、共に解決をめざしていくという課題意識を共有した。その後、討議の柱を確認した。特に、②、③、⑥を中心に議論を進めていきたいとの思いを伝え、報告に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—⑬

ともに歩む今を～いのちの輝きを感じながら、仲間として、チームとして～ (鳥取県人教)

—主な質疑と意見—

三重 Aさんとの関わりの中で保護者とのやりとりを重ねてきたと思うが、保護者がAさんを育てる中での願いは聞いてきたか。

報告者 始業式の日連絡して、担任になったこと、これからの関わりについて相談した。保護者は、「とにかく何でもチャレンジさせてください」とおっしゃった。「うまくいかないことがあっても、成長のチャンスだと思うので、そこで一緒に考えてほしい」と4月に言われた。

三重 6年1組の中でどのようないじめ問題があったか。学校としての取組は。

福岡 男女間の隔たりはクラス全部でのことか？Aさんに関してのことか？

報告者 LINEの中での仲間外し、SNSでの誹謗中傷があった。情報モラル教育への取組は行っているが、なかなか無くならない。学校だけでなく、保護者、地域の皆さんと考えていく時間を設けている。男女の隔たりに関しては、学年にまたがった課題だ。運動会、学習発表会等、みんなで一つのものを作り上げる機会を通して集団の力をつけようとしてきた。

三重 いまだにいじめがあることについてなぜだと思える？どのような課題があるのか？

報告者 自分たちが経験しなかったようないじめの形態もある。知らないこと、勉強不足などところもある。先手をうって取り組んでいこうと、毎学期、一对一の面談をしたり、生活アンケートを月に2回行ったりしているところだ。

長崎 障害があって「かわいそう」と思うのは、なぜかというところを問い直すことが大切ではないか。それが、いじめでいえば傍観者にあたる自分に気づかせることにもつながる。さらに、いじめられている人の思いに気づく。それが、自分たちで気づく力を伸ばすことになるのではないか。

大阪 前向きになることは大切だが、当事者だけでなく、周りの受けとめについてどうなのか？

報告者 車いすバスケットの方を学校に招いたときには、正直に言うと、最初は障害者ががんばっている姿を伝えたいという思いがあった。しかし、話をするうちに、一人ひとりが自分らしく成長していける社会をめざしていくことが大切だと気づいた。子どもたちが書いた作文を共有しながら、ありのままの自分を大切にしていこうと話してきた。

三重 半袖でも大丈夫だったAさんが、途中から長袖で隠すようになった。自分のことを否定的に捉えることになった。Aさんがそんな思いになってしまうくらいに、周りに障害に対する差別的な見方があったということではないのか。そのうえで、保護者に対して、解決していくべき課題とか、社会や周りの子どもの課題について、どう話し合いされたのか。

報告者 Aさんは、教室移動の際、道具をもってもらうことも自分を嫌いになる原因だったと話

していた。中学2年生になった今も、倒立やピアノ等、チャレンジをしている。ちょっと、答えになっていないと思うが…。

奈良 管理職が子どもに話をされた場面があるが、どういうお話をされたのか。報告者は、どういう願いを伝えたのか。子どもはどう受け取ったのか。

報告者 歌の歌詞やオリンピックを題材にした話。校長は、自分の教職30年間を通して、生きると面白くということ伝えてくれた。テーマだけを伝えて45分間まかせた。子どもたちの中には、6年間の授業の中で、一番心に響いたという感想があった。

—報告2—⑪

「とにかく子どもらに学力をつけてやってなあ」
(香川県同教)

—主な質疑と意見—

福岡 さきさんは、子ども会か。地区子ども会には、職員全員参加しているか。「いかんのはわかるとるけど」という発言は、どんな背景からか。

報告者 子ども会の中心的な子ども。地区子ども会には、全員参加している。その中で懇談会も行われている。さきさんの発言については、もともと持っている性格もある。中心的な子どもとして、周りの子どもについ乱暴になる。

三重 小規模校では、きめつけ、悪い人間関係が引き継がれてしまうことあるが、どうか。

報告者 転校生あったが、小さいころから育ちあがる。その中でも中心的な子ども。乱暴な言動も仕方ないかと思われるとらえ方だった。

三重 学力をつけてあげたいが、そのものさしは、全国学力調査、日々のクラスのテストになりがちだ。どんな尺度で学力を測っているか。また、地区懇談会が再び必要になった背景には何があるのか。どの子も楽しく通うことができる学校に向けた取組は、仲間づくりの他にもあれば知りたい。

報告者 端的には、テストの得点の他、日々のドリル、定期的なテストや授業中の取組の様子も尺度だと思う。地区にある「タンポポ会」では、基礎学力だけでなく、理不尽に屈さない心、差別を許さない心、力をつけないといけないと言われた。どうやって図るかは難しいが…。日々の生活の中で、友 たちへの態度や言葉を見逃さずにいたい。

そのために、助け合い支えあう仲間が必要だと思う。以前は、地区懇談会で子どもへの愛情の伝え方等が話題になることもあった。当時の地区の会長さんが、そうしたことを地区だけでなく、保護者全体に聞いてほしいと言われた。それで、全体のものとしてSSW等も含めて行った。しかし、昨年秋、新しい会長さんからは、学校と地区の保護者が地区のことについて話す機会が必要ではないかと申し出があり、今年2月から再開した。どの子も通うことができるために、職員は同一歩調で進んでいこうというスタンスでいる。こうでなければと通しつけるのではなく、受け止め、気持ちを語ることを促す対応だ。全校一丸となって取り組めることも取り入れようとしている。

福岡 子育ての話等が語られたが、部落問題についてはどうか。

報告者 解放教育について、本校では、小学校では社会的立場を伝えない方針を取っている。家庭ごとに伝えるようにしている。

大阪 学力について、中学校では進路の問題出てくる。進路保障に関して、小中連携していくことが課題だと思う。どうしているか。また、教員と子どもの関係は語られたが、子ども集団のつながりはどうか。

報告者 12月に中学校に子どもと担任が訪問し、体験する。担当として、子どもの様子を中学校に伝えることも。英語の先生が週2回小学校に教えに来る。それ以外には特にない。今後の課題だ。子ども同士のトラブルもあるが、得意なことだけでなく、苦手なところも受け入れていこうと見守っている。

奈良 基礎学力だけで卒業させていいのか。学力をつける、いわゆる教科指導は、進路の選択肢を増やす。それだけでなく、社会の差別に出会ったときに、差別を見抜くにも学力が必要。学力のとらえ方を考えるべきではないか。

総括討論

協力者 「子どもを取り巻く差別の現実から深く学ぶことが基本だが、『現実』を明らかにしているか」「今日の報告、参加者の発言はそのこととつながっているか」「なぜ保護者や子どもの思いに寄り添うことが必要なのか」「いじめ等に関連して、まわりの子どもたちとの関係が明らかになった

のか」「つづる活動の取組がどうつながったか」「『学力』がなぜ必要なのか。学力保障とは何なのか」を柱として提案した。

鳥取 Aさんの元担任だ。担任は1年間の勝負ではなく、次につなぐことが大事だ。子どもたちには一回担任したら、一生担任と話している。子どもに学ぶことがある。ある時、指欠損の子がいる学級で、野口英世について学んだ。その子は、「僕は手術したら、野球できなくなる」と言ってきた。その言葉に気づかされた。また、一番最初に掛け算を覚えた子が、算数に自信がないと言った。100点が取れないからと、その子は漢字を一所懸命がんばっていた。

福岡 さきさんの背景について、部落差別とのつながりがあるのかを考えている。学力をどう捉えるのか。地区の人と話すことで見えてくるものがあるのではないかと。全体会で、実は友 たちが地区出身だと知り、学習会に参加した話があった。話すことで見えてくるものがある。それが人権社会につながる。子どもには、つながる力をつけてやりたいと思う。今日参加した人たちで共有したい。

協力者 学校が逃げずに、地区と向き合い、話し合う。その中で見えてくるものがある。部落問題やつながり作り、学力保障について意見はないか。
香川 さきさんの担任だ。6年生担任として、子どもたちとつながることができず、苦しかった。同僚にも、隣保館の職員に相談し、保護者にも相談した。隣保館の方は、さきさんを小さいころから知っている。人懐っこいが、なかなか心開けない子であることを教えてくれた。保護者は、先生の言葉を泣きながら代弁してくれたこともある。そのことでさきさんの本音に触れたこともある。トラブルの時、片方が我慢することはある。いじめてしまっている子にも何かがある。そこに寄り添うことも大事だ。何があったのか、時間はかかるが、聞いていく。まわりの子たちに本心を橋渡しすることで、まわりの子との関係も変わっていく。それも関係づくりにつながるのではないかと。

協力者 粘り強くかかわっていくことで、つながりが見えたり、橋渡しをしながらいじめに立ち向かったりすることもできるのではないかと。

奈良 香川の報告に関して、さきさんの言動は、保護者の子どもへの言動も関係するのではないかと。あるいは、母親の母親が、差別の厳しかった中で、子育てに使われてきた言葉なのではないか。そこにこそ、差別の現実を感じなければならないのではないかと。また、教師が3人教室に入るのは、恵まれている。自分も、まわりの子に聞ける力を育てたいと思っている。今、学校では、ペア学習として、学びあうことを進めている。これからは大事なことはないかと。

福岡 地区懇談会は、貴重な話を聞ける場所だと思っている。うまくいかないときに、隣保館に向いて、子どもの育ちを聞いていく、そんな営みが引き継がれていないのではないかと。今の子どもにことだけに目が向いている、育ちを全部見ようとするのが大切ではないかと。地区懇談会を学校の中で、大事にしてほしいと思った。

協力者 全国学力学習状況調査が強力に席卷している。学力向上でなく、学力保障について、どうか。

大阪 かつては、本校にある村の状況も厳しかった。青少年会館で学習会に取り組んでいたが、行政に打ち切られた。その後、子ども会で夏休みに行っていた学習会を学校で引き取った。家庭環境、学習状況が厳しい子もいる。帰宅後の学習習慣がつきにくいことがデータで出ていた。10年間の「学ぼうデー」の取組後、宿題をやる子が58%から70%まで増えた。子どもの力をつけて、親の協力を得ていこうとしている。学力だけでなく、生活習慣のチェックも粘り強く行っている。

協力者 法が切れて、地域でのありようが変わってきつつある。部落差別解消推進法までの空白の期間に、いろいろ変っていった。その間の苦労も伝わってきた。実践を振り返る中で、差別をなくしていくことにつながっているかという視点を検証していきたい。何のための取組かを振り返ることが重要だ。

まとめ

協力者 鳥取Aさんを中心にした、周りを育てる取組と香川のさきさんへの取組に共通していることとして、「部落問題、障害者問題、いじめの問題等は誰の問題か」という視点がある。そのため、思いを聞いた教職員は、差別を見抜いて許さ

ない取組を進める。支えとなるのは、仲間づくりだ。分からないことを分からないと言える仲間づくりを進めることだ。しっかりした解放のための学力をつけることも、この2本の報告から学んだ。

—報告3—⑫

関わり、つながることの大切さ～Aさんの夢に向き合って～
(徳島県人教)

—主な質疑と意見—

三重 Aさんの姿について、特に気になることや悩み、つらさについてもう少し詳しく知りたい。一方で、職場体験での丁寧な仕事ぶりという姿がつながりにくいので、聞かせてほしい。

報告者 幼いころから、家庭内暴力を受けており、5年生で児童相談所に一時保護された。それでも、父親が大好きだ。父親が好きだが、暴力もふるわれる。母親も暴力を受け、ふるうこともある。経済的な厳しさもある。しかし、しっかりと夢を持っている。その裏には、学校は楽しいところだという思いがあると捉えている。また、職場体験は、1日限りの活動で、希望通りのところではなかったが、生き物への興味もあるので、養蜂場を望んだようだ。教科の学習は苦手だが、仕事ぶりをほめてもらい、その場で蜜を飲ませてもらう等して認められ、より一層がんばったようだ。

三重 Aさんはどんなしんどい思いを語り、まわりの子はどう受け止めたのか。

奈良 常日頃から仲間づくりのために取り組んでこられたことを聞きたい。

報告者 Aさんのしんどさは、入学時から学校も受け止めていた。Aさんの記録はしっかり引き継がれてきた。近所の級友は、Aさんのつらさに気づいていて、担任である報告者に話してくることがあった。それは、何とかしてという訴えだったと受け止めた。うちの学校では、問題行動があった時、その後どうしないといけないかという視点で話し合う教師集団のよさがある。そのよさは子どもたちにも伝えていきたい。また、取組が点にならないように、ウェビングマップのようにつながることを意識して取り組んできた。養蜂場に一緒に行った子は、あまり仲よい子ではなかった。同じ体験をすることで分かり合える。職場体験の後、子どもたちが本当にいい顔で帰ってきた。なすことによって学ぶと考える。自然と、お互いが

してきたことを語り合っていた。例えば、ハンセン病についての学習の後、学んだことに対して、あなたはどう思うのかということを開き直していった。ハンセン病について無知からの差別があったが、部落差別についてはどうなのかとつなげること等を繰り返していった。

三重 AさんやAさんの家庭に対して、地域の方が見ていこうとする姿がある。たまたまなのか、学校として地域とつながる工夫等があったのか。

報告者 民生委員さん個人の力も大きい。農業が基幹産業の街の中で、横のつながり強い。報告者自身は食のつながりを大事にして、地域に出かけて関係を作っている。学校の敷居を下げて、困っていることをぶつけていくことで地域の方が返してくださることもある。地域性も大きい。

徳島 Aさんだけでなく、中学校にも関わってくれる地域の方がいる。学校としても民生委員さんや退職された教員、教育委員さん等に集まってもらい、地域のことを聞く機会を大事にしている。

神奈川 ウェビングマップの中の歴史学習について聞きたい。渋染一揆等の実践の広がりはあるか、報告者の状況を教えてほしい。また、小中連携について具体的にはどんなことがあるか。

報告者 徳島県では、歴史学習は年間計画にすべて入っている。社会の中でたくましく生き、人権を獲得したことから学ぶことは大きい。そして他の学習と結び付けていくことで、実体験と知的な学びとが結びつく。より強い思いを育てることができると思う。小中連携については、関わっていた子が学校に行けなくなる等、うまくいかないこともある。学校の雰囲気も違う。その差を埋めるために、工夫がいる。地域の力も借りる。綿密な情報交換や、中学校からの出前授業も行ってもらっている。文化祭に小学生も参加したり、中学生が職場体験に来たり、保護者と6年生の体験入学もある。結びつきを強固にしていきたいと思う。

—報告4—⑬

自尊感情を高め、差別をなくしていくために～子どもと共に学び、考える～
(神奈川県人教)

—主な質疑と意見—

三重 気になる子を一人設定し、1年間見続けるという取組が報告されたが、どうやってその子を設定しているのか。新しく赴任した職員に取組に

ついてどう説明しているか。

報告者 部落につながるのある子がクラスにいれば、その子を設定することに決めている。ただ、地域の実態として、出入りが非常に激しい。学級に1人もいないこともある。現状としては、配慮を要することという状況になっていることもある。

三重 Tさんの暴力、学校をつまらなく感じている等、Tさんにそうさせているものは何か。背景を大切にしていることが報告されたが、保護者とのやり取り含めて、どう捉えているか。

報告者 家庭での母親との関係が気になっている。朝早く出て、子どもより遅く帰ってくる生活。学校に併設されているキッズクラブがあるが、途中から活用しなくなっており、さみしさを感じているようだ。それが行動に出ている。しかし、本人にその自覚があるかわからない。母親とは電話連絡するが、着信を残しても連絡が取れないことが多い。学校で話して理解してもらえた感じたことでも、家庭で実践している様子はない。子どものことから目をそむけているように感じられることがあった。

三重 Tさんの居場所づくりのための3つの約束について、先生とTさんの関係の変化は伝わったが、他の子どもたちとの関係は、どうなったのか。

報告者 約束については、他の子には話していない。児童指導専任教員や管理職も関わっている。学年担任制をとっている。報告者とTさんだけの関係ではない。いろんな先生が、チームとして関わっている。他の子との関係は、あまり変らなかった。夜遊びをしているといううわさや暴力、暴言があったからではないかと思う。つけたしだが、うわさが広がったことによって、Tさんの母を支えたいという他の保護者も現れてきた。Tさんを家に招いて夜ご飯を食べさせる等されていた。いじめに関する劇等もしてきたが、教室の日常生活の中では、なかなか子ども同士のつながりは変わらなかった。

三重 まず、性は多様だということを前提として、子どものことを彼とか彼女とか、決めつけての呼び方をしているのは気になるということを伝えたい。Tさんのことに関しての論議で、子どもの

話が出てこない。子どもの課題を学級の中で共有しないということが理解できないのだが、どうか。

報告者 Tさんが学校に来なかった時があり、家庭訪問すると、友だちと喧嘩したことを引きずっている様子だった。Tさんからすれば、仲良しだと思っていた子が相手だった。そこで、相手の子に尋ねると、Tさんの関わり方が一方的だという話があった。それをTさんにも伝えていったことはある。

三重 集団としての関わりのことを聞きたい。

報告者 集団の中で、Tさんの行動について、「それはだめだ」等と言う子どもが、非常に少ない。他の子は、ちょっと引いている感じだ。

三重 Tさんにとっては、ゲームセンターが居心地のいい居場所だったのではないか。6時までには帰るという約束は、葛藤があったのではないか。Tさん自身が望んだ姿だったのか。あるいは、保護者のためにも頑張ろうとしたのかと思うが、報告者はどう捉えているか。また、Tさんの家庭に関わる保護者が出てきたと言われた。その家庭の子とTさんのつながりについてはどうだったのか。Tさんのしんどさをクラスで共有することが難しかったのであれば、その理由はなにか。

徳島 子ども会の話に関連して、若い先生方に、同和教育の積み重ねをどうつなげていくのか。これまでの実践を知らない先生にどうつないでいくかということ聞かせてほしい。

報告者 まず、夜遊ぶことの危険についてじっくり話し、分かってもらった。そして、時間については話し合っただけで決めた。また、母の働きかけとして、母自身が中学生やゲームセンターに出向いて話をしていった。そうした中で、約束を決めていった。次に、夕飯を一緒に食べることになった友だちは、隣のクラスの友だちだった。学年担任制をとる中で、交流があり、仲が深まって、居場所になったと思う。しかし、学校での生活の変化にはつながっていないと思う。

報告者 同和教育の実践をどう伝えるかということに関しては、本校で務めた職員が管理職として戻ってくるケースが継続してある。また、校内の人権研修を進めてくれた職員が、異動しても毎年来てくれる。自分自身もそのことをテーマの一

つとして取り組んでいる。

奈良 気になる子を一人設定するということが、その子たちを職員全体で共有することなのか。そしてみんなで声かけする場面があるのか。また、まわりの子とどんなつながりができているのか。加えて、Tさん以外の子についても聞かせてほしい。

報告者 本校では、気になる子は、地域の子と決めている。年間を通じての研究授業でも、気になる子を位置づけ、その子にとってどんな意味があるのかを共有している。また、職員の情報共有の中で、子どもの状況や声かけのしかた等について話し合っている。

(午後の分散会を始めるにあたり、協力者団から、性の多様性に関する意見に対しての返しを行った。) 午前中の討議の中で、性の多様性についての意見があった。協力者団として、昼休みに協議した結果、性の多様性は人権問題の一つであるという認識を確認した。特に、当事者の方や、その差別をなくしていこうとする方々の感性には、非常に学ぶべきところがあり、そのことが人権問題を解決する一つの糸口になっていくという捉え方をしている。また、性の多様性の問題について、自己決定できるかということがキーワードと考える。「彼」「彼女」という呼び方がはたしてどうかという提案も心に留めながら、最終的に性の多様性が認められる世の中をつくっていく我々でありたいということを参加者の皆で共有し、職場や地域に帰った時に、そうしたことを話題にしてほしい。(上記の内容を伝えた上で、再度の日程確認を行い、報告5に入った。)

—報告5—⑭

「いつかは伝えたい」 (三重県人教)
—主な質疑と意見—

三重 Aが自分のところが差別されていることを最近知ったという場面があるが、報告者は、学級の子どもに部落問題をどのように伝えていたのか。

報告者 Aは、はじめ地区が差別されている原因を知りたがっていた。しかし、原因よりも、差別をなくそうとしているあつたかい地域でもあること、差別をなくしていく仲間もたくさんいることを伝えた。もちろん報告者も差別は許せないか

ら、クラスの中でみんなとつながって、なくしていく方向にしていきたいと話してきた。クラスの子には、部落差別ということでの話は直接的にはしていなかった。ただ、根拠ない差別だ。だからこそ、なくしていく側の人でいようと話した。差別をなくそうとしている人たちがたくさんいることを知ってほしいと話した。

三重 部落問題と真正面から向き合った取組ではないということか。

報告者 一青会からは、形ないものという話があった時、仲間とのつながりというふうに捉えた。しかし、実践を終えてみて、差別を許さないという怒りに焦点を当てるべきだったと思った。自分の中で、仲間という方向に意識が傾いていったように思う。

三重 疑問に思っているのは、なぜAは、差別されている場所だと思ったかということだ。町のことを悪く言う人がいるとすれば、それは、悪く言う人の問題だ。しかし、Aは、この町が差別されていると言っている。差別する人の課題だということに持っていけないといけなのではないか。

報告者 差別されている地域だという言い方をしたのではない。ただ、差別されているという現象がある。ある人が差別されていると言えば、それがもとになって差別が生まれる。それっておかしいと言える人でありたいし、そこにある差別性に気づける人でありたいという話をしてきた。根拠のないところで人が作り出す、だからこそ差別はなくしていけるものだという話は1年間してきた。

協力者 地域の方から伝えられた話をAがどう受け取ったかの問題があると思う。一方で、差別をなくすのは人であるということも同時並行で取り組んできた実践なのではないか。

三重 この実践は、部落問題学習を中心に据えた取組と思っている。核心の部分は、反差別の思いで子どもたちがつながっていていると思う。つづるということに対して、どんな思いで取り組んだかを聞きたい。そして、それが子どもたちにどう伝わっていったか。

報告者 何かに誰かがつまずいたら、誰かに伝え

よう。うまく伝えられない時は、まずは書いて、整理しようと投げかけた。抜粋の形にはなるが、学級通信等で投げ返し、そのことでまた話し合いをしていくことを大事にしながら進めてきた。

三重 AとCは卒業して、中学生になっている。中学校での様子を知りたい。

報告者 人権ネットワークという組織がある。そこで2人は活動している。Cは、「人権のことについて学習して、あったかい気持ちになる。劇を作ってもいじめはなくなるとはならないかもしれないけど、一緒に活動して幸せだ」と言っている。AもCが来ていることをうれしそうに話している。中学校でも活動が継続されていることを感じる。

三重 中学校の職員だ。鈴鹿市全体で取り組んでいる人権ネットワークに所属し、AやCも他校の生徒とともに活動している。それまでの自分たちのことを話し合いながら、劇を作り上げていっている。地域では、障害者差別をなくすためのフェスタにも実行委員として参加して、差別をなくす活動に主体的に取り組んでいる。しかし、「レリーフの会」をそのまま中学校で引き継いでいるかということは、課題に感じている。ただ、様々なつながりの中で、子どもたちが支えあっていることは感じている。

三重 「レリーフの会」の活動は主に休み時間ということだったが、どのくらいの頻度だったか。どんな話が語られたのか。

報告者 特に日を決めていない。人権学習をした後等に呼びかけて、話し合いたいと思う子がいれば、集まっていた。最初は、レリーフを作った人たちに関係している子たちに思いを語ってもらうことから始めた。その中で、中学校でいじめられたらどうしよう等とこぼす子がいたら、みんなで返した。また、ある子が、兄が学校に行けていないことを漏らすと、じゃあ、ちょっと声かけよう等と返したり、ある子が学校休んだら、声かけに行ったりした。中学校では、「レリーフの会」がなくなっても、あの先生に話したら何とかしてくれる等と頼ってくれたりする姿が見られた。

総括討議

協力者 前日からの討議の柱として4点「①差別の現実を明らかにして取り組んでいるか。」「②学力保障について」「③仲間づくりについて」「④取

組が差別につながる視点をもっていか」を確認した。さらに、本日の報告についての質疑からは、「仲間づくりについて」という柱で、特に被差別の立場の子について、周りの子どもたちがどう関わり、変容していったのかという視点で質疑がなされた。ただ、厳しい状況の中で取り組まれた報告もある。その中での課題もあった。総括では、自分の実践からという視点で発言してほしい。まずは、仲間づくりをどう進めるか。

三重 つづり方教育の実践を30年以上やってきた。同和教育の中でつづり方は大切にされてきたが、国語の教科書ではやりにくくなっている。1年生では「願い」を表現することは難しいが、つづったことを読み合う活動を大切にしている。それが仲間づくりにつながり、ひいては学力につながると思っている。

奈良 三重からの報告について、「つながり」「仲間」を大事にしていることが伝わってきた。こだわりをもちながらの取組であることが分かった。部落問題でも、障害者問題でも、女性問題でも、自分ごととしない中では伝わらない。午前中の質疑では、子どもの思いを集団にどう返しているか、集団とどうつながっているかが問われたと思う。つながるには、時間も大事。教育委員会の中で、就学指導委員会を担っている。進路に関わって悩んでおられる方とも接する。アセスメントシート等を重ねていって、中学校につないでいくことも柱に関することだと思う。

協力者 核となる子と集団をどうつないでいくか。

三重 伊賀市の取組を紹介する。先日、伊賀市「部落問題を考える小学生の集い」があった。市内全小学校6年生から3名ずつ集まって、部落問題について語り合う会だ。どの分散会にも、地区の子、地区学習をしている子が入る。その子らは、地区で差別をなくすためにがんばっていることを発信する。では、それを受けた子はどう返すのか。それはだめだと思うと返す子が多い中、地区の子は話すことによってどう思われるかという不安の中で話してくれたことに気づかせる。そして、それに見合う自分の話を返していくということを確認していく。まわりの子は、差別をなくす仲

間になるために、自分につながることを見つけて、それを提示する。小学生でも、自分にとって何が問題かを考えることができる。例えば兄弟のことを捉え直し、このことこそ自分の問題だということを出し合う。そうした話を出し合う関係が、自分ごとにするということであり、そうした話を出し合える関係性が仲間である。さらに、自分を見つめるうえで、大切なのが、つづり方ではないか。教師と「思い出し直し」をする中で、自分につながることを見つめなおすことができる。

神奈川 仲間づくり、子どもをつなぐことの大事さを学び、自分の取組を見直す必要があると感じた。定時制校で4年間関わっている子がいる。中国から来て、母と弟の3人暮らし。昨年くらいから母親の精神的な病気の状態がよくないが、医者には全くかかっていない。厳しい家庭状況だ。先日弟の中学校の教員と会うことができた際に気づいたのは、母親から聞く弟の様子と、中学校の教員から聞く弟の様子が大きく違うことだった。そこで、親子の関係がうまくいっていないのではないかという課題が見えてきた。教員として、もっとやるべきことがあると思った。まずは、弟と母のつながり直しが課題。中学校と私たちがつながることも大切だと思う。また、兄については、根底に日本に来たくて来たのではないという気持ちがある。本校は、4割近くが外国につながる子。親の都合で日本に来たという子は不満がある。そんな気持ちをつないで、仲間づくりをするような取組ができていなかった。また、例に挙げた家庭も、地域から孤立している。なんとか風穴を開けられないかと、見直す機会になった。仲間づくり、保護者と地域等、いろいろなところとつなぐ必要を感じた。

協力者 厳しい環境にいる子にとって、いろいろな関係者とつなぐことも大切だ。報告の中には、部落問題学習をどう創造したか、生活を見つめ、関わっていく中で見えてきた取組等もあった。

三重 地域の大先輩から教わったのは、子どもは子どもの中で育つということだった。しかし、それが難しい状況になっているように感じる。宿題をしてこない子もいる。その子が、「なぜしてこないのか」とみんなから責められた。すると、「部屋

が散らかっていてできない」と言う。実は、その子の母親はトリプルワークをして、ローン組んで、家を建てた。母親は片づける暇もないということを、その子は、泣きながら話した。すると、「シングルの家で片づけられないのは、お前の問題だろ」と次々に子どもたちが返していった。先生と子どもの関係も大切だが、子どもは子どもの中で育つ。1年間学級担任していると、子どもの思いがどんどんつながることが度々ある。誰にも知られたくないことがある。でも、それは、一番伝えたいこと、わかってほしいことだ。無理やり伝えさせるのではない。言える集団を作っていくことが私たちの仕事だ。聞いて、自分として何を返すかという経験をくり返す。また、徳島からDVを受けている子の報告があったが、その子は、注目を集めたいからでなく、それで自分を癒しているのではないかと思う。性的なDVを受けている可能性も考えなくてはいけないのではないか。加えて、部落問題に関して、部落からしか語れないというのはどうか。むらでは部落問題についての学習会や語る会をしている人でも、他地域では部落問題に触れない人もいる。自分は、むらでないところでやってみようとしたら、部落差別がたくさん出てきた。旅行先で割引されている等といううわさを持ち出す人もいた。その時に、はじめて部落差別に出会ったという教員もいた。何も言えない人もいた。部落外でこそ、部落問題を語ることで差別をなくす力になるのではないかと思う。いろんな人権課題をやるが、部落問題は話が別という人もいる。しかし、部落問題から入っていくと、いろんな問題が見えてくる。部落でないところで部落問題を語ることを大切にしていきたい。

協力者 暮らしを差し出し合うことが、子ども同士につながる契機になる。子どもの捉え方について、本当に見えているのかという提起でもあった。全同教でも大きな柱である部落問題の解消に向けての考えを出してもらった。

三重 地区学習会の中で、自分の地区を差別する人がいるということを知った。中学校まではほぼ同じメンバーで過ごした子たちが高校に行くと、最初に出身中学校はどこかとい

う話題になると思う。その時に、自分の地区をどう言うかという不安を子どもが出してきた。保護者と担任とが話し合う中では、だからこそ地区で学習をしているのだ、何かあったら、仲間がいる場所に戻ってくれば良いということを共有した。しかし、その子はクラスの子たちにも聞いておいてほしいからと、クラスに伝えることもしていった。子どもに不安に思わせていたのは誰なのか子どもが気づいていく。差別は誰がするのかということに気づく。そして、自分たちには何ができるのかという取組につながっていった。また、地区の親とは子どもの育ちについて話をよくするが、地区外の親とは話す機会をなかなか持っていなかったことを反省する声が、教員からあがった。子どもの学びを家庭でどう返していくか、地区外の保護者の部落問題認識が問題になった。そこで、PTA人権同和問題懇談会を開くようになった。地区の内外関係なく保護者が集まって、話し合う場を作っている。これまでの学習の様子をおさえたうえで、話し合っている。

三重 地区出身の子が教員に対して不信感をもっているという報告を聞いた。人権のことで悩んでいる時に、打ち明けていいかと子どもに迷わせてしまうような教師でいたくないと感じた。自分自身に差別の現実から学ぶ姿勢があるのかを問われていると感じた。三重の報告者と一緒に取り組んでいく中で、自分の教師観が変わった。同推教員として何もできていない自分に奮起を促すためにも発言させてもらった。受け止められる器が教師にできて、はじめて子どもが語り合ったり、つながっていけたりするのではないかと思った。

三重 強敵が現れた。道徳教育だ。「橋の上のおおかみ」という話があるが、人権教育を基軸として実践に取り組んだ。もう一点は、教員自身が解放されていく方向に向かっているのかと疑問に思う。友引とか仏滅とか、なぜ言うんだろう。解放とはどういうことかと日々問うている。

協力者 今日は道徳について語り合うことできないが、これまでの人権同和教育の営みが伝わっていかないかもしれないという思いからの発言だったと思う。学ぶ中でいろいろなものが見えてくる。学びを深めていく中でわかってくるものが

ある。

大阪 多様性が認められることについて話が出た。「いまだんなきもち」をワークシートにして、対話を生み出す取組をしている。簡単なことでも取り入れていくことで、みんなちがうことを伝えたい。

三重 「差別ってなあ、人の命を奪うんやで」という言葉に触れた。生の言葉と出会うことで、頑張らないといけないと思う。学力保障の話題が出たが、分からない時に分からないと言える関係づくりの積み重ねが、差別と出会った時の力になると思う。また、子どもたちはやっぱりつなぎ合わないといけない。学年に一人しかいない地区の子を無理に取り出して学習することで、失敗したこともある。

香川 報告にあった、「さき」の父だ。発言にあったように、地区の人は、地区の中では差別をしない。そこで始まったのが、全校の懇談会だ。また、寸劇のことも報告にあったが、これは、実際に起こった差別のことを先生が聞き取って、作り上げたものだ。最後に、つながりの話があったが、正直に言って、「さき」が変われたのは、先生お一人の力だ。歩み寄ってくれた。他にも子どもがいるが、担任の先生を初めて家に入れた。それくらい信頼している先生だ。でも、6年生で変れたのは、遅い。もっと早く変わってほしかった。

三重 初めて参加した。無知だったことを痛感した。差別をなくしたいという思いでつながる、まわりを育てていく、子どもをつなぐことの大切さを感じた。自分が正しいことを知り、自分の目を見て、行動する。その姿を見せていくことで、子どもが大人になりたい社会を作っていきたい。

報告者から

鳥取 初めて参加した。たくさん学んだ。①差別の現実目を見て、子どもの言葉に耳を傾けていきたい。Aさんに「はずかしさ」を感じさせていた原因を考えていく視点を得た。②架け橋の役割を担いたい。子どもと子ども、地域、保護者、思いを受け止めてくれる人とのつなぎ役になりたい。③子どもを信じていく。まわりが変容してAさんが変わっていく姿に学んだ。

香川 初めて報告した。たくさん意見や質問から学んだ。6年生の子どもたちは、小規模から大

きな集団に進んでいく。その中で仲間を大事にすることを取り組んできた。中学校に進んでからも、支えていきたい。小学校でも学びあい学習を進めている。明日からの力にしたい。

徳島 昨年参加した学びを、Aさんを中心にした取組に生かしてきた。今回の学びの中で、さらに違った視点を得た。まわりの子どもをつなぐことや「自分ごと」にするということ等、伝えられることを伝えていきたい。

神奈川 人権教育について考え始めたのは、現任校に赴任してからだ。報告させてもらいながら学びになり、初めて知ったこともたくさんあった。仲間づくりとして、子ども同士のつながりをどうつくっていくかという視点を得た。どうやればいいのかは、まだ分からないが、学んでいきたい。Tさんとの関わりについて、一人では難しかった。全員で取り組む職員集団の雰囲気があった。また、昔の地域との関わりを聞いていく中で、今やっていることの意味を確認することができた。

三重 初めて報告させてもらった。差別を、部落差別をなくしたいと一所懸命やってきた。そこで見えなくなったこともあった。その時、地域の方の声に支えられた。職員の支えもあった。しかし、部落問題が中心になっていなかったのではないかという指摘について衝撃を受けた。地区がなくても、6年生でなくても、部落問題の解消の視点を中心に据えて、子どもたちをつなぐという取組を進めていきたい。

まとめ

協力者 差別の現実から深く学ぶことを大切に、暮らしを見つめ、地域や家庭の実態に学んできた。子どもたちは、いろいろなものをかばんに詰め込んで学校に来ている。育ちの歴史や思いをつかみ、暮らしの事実を土台として、そこから教育を作り出していくことが、差別の現実から深く学ぶことにつながると考えてきた。寄り添い、家庭を訪ね、言葉にならない思いを知ることから差別の現実が見えてくる。そこから見える様々な背景を構造的に捉えることで、差別の現実を深く捉えることができる。生活の上で、自分の暮らしを見つめ、しんどいことを出し合いながら、気持ちを重ね合わせ、仲間としてつながっていく営みを大切にしている。自分のきつい思いを語ったり、

聞いたりしていくことをいねいにしながら、仲間づくりを進めてきた。それが自尊感情にもつながる。また、ともに生きるとはどういうことかを様々な学習や活動とつなげて確かめてきた。目の前の子どもの姿に悩んだり、課題を感じたりした時、その根底にあるものを明らかにするために、生活背景やその子の置かれている状況から学ぶことを大切にしてきた。地域・家庭に出向き、くらしに触れる中で、差別の現実や解放への願いに出会ってきた。その中で、私たちは揺れ、戸惑い、自らの姿勢を問い始める。自らの生き方と向き合い、自分ごととして考え始めた時、見る目が変わっていく。また、子どもや地域、職場の仲間との出会いやつながりも、生き方や教育実践を変える大きな原動力になる。人権を確立する学校づくりには、こうした自己変革を通して取組の方向を共有する教師集団の確立が求められている。子どもたちは多くの人と活動を共有しながら、互に見つめ、語り、つながることで、気づきを態度や行動に移していくことができるようになる。社会と自分との結びつきを考えることができる、「生きる力」を育てていく。また、人との様々な営みを通して、人権が尊重される社会、自分の生き方を考える教育内容を作り出していくと思う。2日間のキーワードとして、「自分ごとにする」、「つづる」、「差別の問題は自分の問題」、「つなぐ」、「進路保障は同和教育の総和」「一番言いにくいことは、一番言いたいこと」等があった。大会報告集にも載っている。後からゆっくり読んでほしい。(P.26 や P.28、P.29 を紹介した。) 会場の運営スタッフにも全員で感謝して、分散会を終了した。

第1分科会

人権確立をめざす教育の創造

部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざす教育をどう創造しているか

④分散会

I. はじめに

本分散会では、地元協力者より地元開催に向け、「三重県総掛かり」で準備を進めてきたこと。開

催ができることへのお礼、その後、討議課題を確認した。真摯に自分の実践を問い直し、自らのありようを変革すること抜きに「差別の現実から深く学ぶ」ことはできないこと。すべての子ども・おとなが「そのまま生きていったらいいやん」と思える社会（まわり・なかま）をつくりたいという報告者の思いをもとに、熱心な討議、元気の出る交流をお願いし、報告や討論を始めた。

Ⅱ. 報告及び質疑討論の概要

一報告 1—①

「本気で学ぶなら応援したい」 (愛媛県人教)

—主な質疑と意見—

愛媛 ①伊予市の主任会に関して詳しく聞きたい。②夏のフィールドワークの実施について③

「部落問題を考えるフォーラム」の様子について

報告者 ①各小中学校の人権・同和教育主任が年6回研修を重ね、部落問題学習の内容の交流や現状、課題の解決に向けた話し合いをしている。②愛媛県の人権対策協議会主催で土曜講座の一環で、高知県へ研修を受けた。③700名の定員に学校から職員・子どもで32名参加した。同年代の子どもが壇上から報告する姿を受けて感銘を受けていた。

三重 ①地域の人からの言葉「薄い透明の膜を取り除いてほしい」や母親の「学習してもなくならない」等から差別の現実が見えてくる。取組を通してどんな「差別の現実」が報告者自身見えてきたのか。②ロールプレイングの授業から見えてきたものはなにか。

報告者 ①海里さんもバリアを相手に感じている、感じさせているかもしれないと気づき、ハッとしました。母親の「偽善者つくらなくていいですよ」という言葉ももらい、うわべだけでない本気の取組、実践をしなければならない、という使命感がわいてきた。②海里と同じ学級の生徒の思いがもっと高まる学びの創造をしたい。②語り合いの部分は家族と自分の差別心と向き合わせたくて提案して、取組を実施した。

三重 B ①生徒が自分自身で人権宣言をしているが、宣言ができた主な要因(周囲の雰囲気)を教えてほしい。②人権宣言の子どもたちからの言葉を報告者は、どのように受け止めたのか。

報告者 ①水平社宣言の原文学習から「多くの人

に考えてほしい」と伝えてくれた。それを「発信」という形で行いたいという思いから実現した。不登校傾向の子どもは教科学習では発言が苦手だが、人権に関する学びは、まわりが思いをしっかりと受け止めてくれるので、自信を持って意見が宣言できていた。②生徒(子ども)たちが、こんなにも、しっかりと宣言をしてくれたことに驚き、嬉しくなった。

三重 ③「差別はいけない」という知識的部分と自分を振り返って実生活と重ねて「実践したい」という部分まで考えて宣言できていたのか?

③2時間目の学習では、そこまで到達できていなかったと思う。その分、3時間目へのつなぎの部分で家族とのやりとりを実践させ、できる自分になってほしいと思っていた。

愛媛 子どもたちを通して保護者の意見を把握したと思うが、部落問題に関し、「不勉強、無関心」という結果は、これまでの学校教育の結果として受け止めていくべきであると思う。自分の学校での様子から…授業を行った後に若い先生が、涙を流す部分に関連して、自分が伝えきれない自分に腹が立つ、同じ思いを持って動いてくれない教職員集団がいる。①教職員が一丸となって取り組むための方法や手立て(研修も)を教えてほしい。

岡山 (関連して)報告に関して会場から答えることは礼儀。しっかり返したい。①部落問題学習を昔のことにせず、家族と話し合う活動を意図的に組むことで今ココの問題にできているのがよい。何をねらいとして水平社宣言の授業を組み込んだのか。②3年生までに、どんな学習プログラムを組んでいるのか?

報告者 教職員としての取組は丁寧に指導している。資料を渡したり、先行授業をしたり。若い教職員と一緒に学びを作っていくながら、悩みを共有し、日々よりよいものを作ろう、届けようと努力している。同じ校区内の教職員で研修を組んでいる。①命の尊さが原文からより伝わってくるので、使っている。差別を受けてきた人たちのためではなく、すべての人の幸せのために作られたものである。という思いを大切にしている。②1年で渋染一揆、2年で教科書無償運動、3年で水平社宣言について学んでいる。小学校の学び

については、先出の主任会で情報を得て、共有できている。

宮崎 差別的な用語を学ぶとそれを含んだ発言が出る危惧がある。そこは考えていたのか？

三重 この取組を通して、報告者自身どんな学びや得られるものがあったのか。

報告者 アンケートでは無関心な態度は危惧していたが、海里のような出会い方は、申し訳ないが、想定して取り組めていなかった。この取組を通して、「差別を許さない」「差別をなくしたい」という思いを持たせたい、そんな学びの創造をしたい、とより強く思いながら本気で取り組もうと思っている。差別的な用語について、事前に丁寧な説明をしてから授業に臨んでいる。

三重 部落差別の解消に向けた教育において、どんな知識が身につけられるのか、明確にする必要がある。①家庭へのアンケート、親への聞き取り等で「これは差別だ」と見抜く力をどう身につけてきたのか？報告者自身は、何を「差別」をどう捉えているのか？②海里の父親のことについて知りたい。

報告者 ①差別に気づける力を…（一旦時間をもらい、後ほどの討議で話してもらうことにした）②母親からの話では、父親方の家族から反対されたが、結婚している。海里に料理を作ったり作ってもらったりして、すごしている。直接お会いしたことはない。

—報告2—⑩

友だちのおかげで自分が変わることができた
(熊本県同教)

—主な質疑と意見—

愛媛 みさ子さんが話せない背景と報告者の水俣のことを重ねている。きついことを言わせていないまわりの何かしらの状況があるはず。それこそが課題である。その課題をどう捉えているのか、それを解決するための手立てを教えてください。

報告者 みさ子さんが「きついことを隠さず言えて自分を変えたい」と思わせていることが自分と重なり、課題である。(報告者自身のことと重ねて)言えない人が多くいることを変えないといけない。日々の人権学習を6年間積み上げたことでクラスのなかまが成長し、みさ子さんがこの人たちには言えるという状況が生まれたと思う。

石川 子どもは知ってもらいたいけど言えないということがある。みさ子さんがひろみさんの行動を見て自分のことを言おうと思った背景を詳しく知りたい。報告者自身の学級経営や学校全体での運営は、どうか。

三重 何を求めてなかまづくりをしていくのかという観点で話をすると…もっと自分のことを話したいというクラスをつくっていく上で、大切にしていること(意図的にどう仕組んだか)や子どもどうしの具体的なやりとりについて教えてほしい。

報告者 みさ子さんの思いは5月頃から感じていた。ノートいっぱい自分の思いを日記にして書いていた。大切な部分を見抜いた上で、話を子どもから聞いたり職員と共有したり、家庭訪問したりした。みさ子さんは言いたいけれど、受け止めてもらえなかった経験もあるので、言えずにいた。子どもたち自身で何度もことん話し合っていた。自分が若いときは経験が浅く、教師側で決めつけて解決しようとしてしまっていた。例えば支部の方からの話を自分と重なっている部分を考えながら聞くよう話している。

石川 若いときと比べて、どんな周囲からの支えで、今のような取組ができるようになったのか？

報告者 自分がもらった言葉の中に「自分の中の差別に気づかないと、子どもたちのつらさや本当に言いたいことは見えないよね？」がある。自分を語る職員研修などを通して自分を話せるようになった経緯がある。先輩方(支部の方や職員)から話を聞いてもらうことで自分を語れるようになっていった。1人では気づけなかったことを変えてもらったので、今の自分がある。支部とのつながりは大きい。

熊本(同僚) 学校全体で自分を語る職員研修を毎年、取り組んでいる。自分のことを語りたくなる状況がある。学校での課題や大切にしたいことを共有して年度をスタートさせている。帰りの会の時間を大切にしたり、綴った日記から子どものことをつかんだりしている。週に1回、子どものことを語る会を設けている。人権集会を年3回、行っている。学級、学年、全校と徐々に広げていく。報告者は、待つ姿勢を大切にしておられる。しっ

とりして、元気はいいが、そこに優しさがある。クラスが創られていったのは、6年までの担任や学校全体の職員がいたからである。

熊本 (元同僚) 1000人を超える規模の学校で教師が職場を休んだことに気づけない状況だった。まず子どもたちがつながる前に、職員がつながろうと職員研修を9年前から始めた。2年目からは支部の方にも入っていただき、職員どうしがつながることを大切に続けている。

熊本 (運動体の方) 報告者の学校には支部組織はないが、出身の子どもたちはいっぱいいると伝えている。「ならば、どの子が出身者か」という詮索だけはやめてくれ、それが差別になると教えている。しかし、隣保館に先生たちがくると出会う機会がある。そこで「この人は、うちの学校の保護者なんだ、じいちゃんばあちゃんなんだ」と出会っていく。出身者の子どもたち孫たちをご存知の方は多くいる。それを踏まえてクラスづくりをされる。ムラができて100年経たないくらいだが、落書きも出る。その落書きを先生たちに見てもらって、勉強に部落問題を入れてくださいとお願いしている。

宮崎 水俣に生まれ、水俣をいろんな思いで見つめてきて故郷と思っている報告者が家族と水俣のことどう捉え、どんなことを家族と話しているのか。

岡山 重ねて、「水俣の今」について教えてほしい。

報告者 父のことは今になって誇りに思えるようになったが、父も今の自分の年齢くらいまでは自分が患者であることをどうしようかと隠し続ける側にいた。葛藤があった。父の気持ちがわかるから「正直に生きる」と言われたとき、それを後押ししたいと思った。父から今回の大会で話すことを言うと、嘘は言わんとありのままに言ったら、わかってくれる人がいる。言う前から言わないのはそれが差別だからと言われた。(水俣の今について) 水俣が好きです。水俣に暮らしている以上、加害者被害者どちらも関係している人がいる。水俣についての誤解が今も多くある。今も迷いながら授業をしている。水俣病を(教える)ではなく水俣病から自分はどの位置に立っているのか。部落差別と水俣の問題はわたしの生き方の

中で重なる部分多い。水俣への誤解も多く、そういう人には言い返せない自分がいた。言い返せない自分を卑下しなくていい、自分が悪いと思わないでいいと支部の方から励まされた。ムラに生まれた人が悪いのではなく、周りが変わらんといかんと、すごく水俣のことと重なった。

三重 みさ子さんに二人の子が返した、その言葉あったからこそ語れた。その返した言葉は？その言葉についての周りの子どもの捉えは？

報告者 この二人やったら言える子たち。「自分のこと話してくれてありがとう」「わたしたちがここまでがまんさせてたんだね。言ってくれてありがとう」と返した。クラスでは日記を綴ったことをもとに語らせる中で(子どもたちが)「自分がそういうつらい思いをさせてなかったかな」から「ほかにもきつい思いをさせている子いたのに自分ばかりだったのじゃないかな」と問い直していく子もいた。

1日目の総括討論

福岡 一番しんどい気持ちこそ一番話したい気持ちである。それを安心して話せる仲間をつくる。海里さん以外にもムラの子は、たくさんいると思う。マイノリティの立場に置かれた子の支援を学んでいけたらと思う。

協力者 (前半の積み残しで)「愛媛報告者は何を差別とちらえているのか？」について答えを。

報告者 指摘いただき考えた。自分自身の中で浅かった。子どもたちが無関心、不勉強さ、差別語を使ったりすること等々を想定せずにアンケートを持ち帰らせてしまった。「知らない」と答えた場合は想定していた。返事が出せない子については教育相談等をするつもりだった。事前に、ちゃんとしたものさしをわたしの方で伝えてからアンケートすべきだった。まだまだ未熟な部分があった。

愛媛 (報告者の元同僚) 部落問題について家庭に持ち帰らせて話をすることには親の差別心に出会わせてしまうことに躊躇があった。親に差別心があると…見抜く力が育てなければ流されてしまう、染まってしまう。何が差別か、基準となるのは被差別の立場にたって考えることがいかにできるかが鍵。そこを繰り返すことで正しいものさしが持てるのではないか。水面下で差別がある

のになく見えるのは、見えてないだけ。勇気を出してやることで見えてくる。見つけられなくなりしていける。そういう覚悟をもって取り組んでいる。

宮崎（部落問題学習の後に内容を祖母に話したことで差別心と出会うことが実際にあったという話の後で）どう差別を見抜くか、それにどう対応していくのか考えるのが大事。差別の仕方を教えてしまうことがあるという緊張感がある。部落問題学習で立ち上がった子もいる。その中で結婚差別もあるかも。ムラの間がが一番きついのは門前払いをされること。学習してきたことを発揮する機会を奪う。（差別と闘う、なくすために）それを支えるのは同和教育しかない。学校でしか同和教育に出会わない子も多い。教師がそういう現実をとらえ、差別と向き合いながら差別をなくす取組をやっていきましょう。

報告者 子どもたちで立場を知らないおばあちゃんからの話で結婚差別のことや門前払いされたこと、なかなかお母さんが出てきてくれないと、なかなかお母さんが出てきてくれないと、そのことをぼつりぼつりと話してくださる。そのことを思い出して伝えられる人になりたい。

大阪 親の差別心とか差別的なことは日常的にテレビや動画サイト等で刷り込まれている。子どもたちが矢面に立つのは先だが、先にできることはやっておきたい。（緒方さんの話から）ちゃんと言ったらわかってくれる人は、わかってくれる。言わないことは差別。わかってくれないかも知れないから言うのやめよう、そういう自分って多いと思う。丁寧に取組を積み上げ、つながることが大切。

愛媛（隣保館の方）若い先生たちの研修は？人権問題に関する意識調査。その中から課題が2つ挙がった。若年層の意識低下、寝た子を起すな論への対応がある。新規採用教員若年教員を対象に部落差別の起こりという学習を始めた。他の学校に行っても正しい同和教育をできるという報告をもらった。若い先生たちのベテラン教員へも広がっているということをお聞きした。湯浅先生たちの本気度が子どもたちに伝わらないわけではないと思う。本気度が同和教育の出発点ではなかろうか。

— 1日めのまとめとして—

2本の報告を通して、愛媛県人教の報告は、差別を許さない差別をなくす、仲間を増やしたいという思いから水平社を通して全クラスの生徒と教師集団が強いきずながうまれていったという報告であった。海里の出身を打ち明けたことに対して一緒に勉強していこうと語り報告者は寄り添い続けた。熊本県水俣で生まれた報告者自身が人とつながるためには自分自身を解放していくことと言い、みさ子さんが影響されて自分を解放していく。子どもたち同士がつながっていく姿、みさ子さんの成長を母に伝えたときの言葉もあたたかい。きついこと、しんどいことを言える仲間づくりの必要性、どの学校でも取り組む必要があるということ。教師集団こそ生徒の仲間づくりのモデルになる。被差別の立場に寄り添いながら授業を真剣に組み立てていく。あたたかく熱い思いに包まれた会場からたくさんの思いを明日への報告につなげていくことを確認して、1日めを終了した。

— 報告3 —⑩

先生、いつ家庭訪問来てくれんの？

（大阪府人連）

— 主な質疑と意見—

奈良 ①Aへのかかわりを悩んでいたときBがクラスの中でどういう立ち位置になり、どういう子なのか。②人権総合学習における反差別の学習（部落問題学習）について

報告者 ①自分の中ではキーマンとしてクラスの中でみてきた児童である。なかなか周りに、とけこめず暴れたりとかもあった。Bに対してもクラスでいろんなことをしてきたってこともあった。いろんな子と誰とでも自分の素を出せる。Aとも一緒に遊んだり、ひっぱっていく力も感じていた。この子と一緒にクラスを引っ張っていけると感じた。②牛のことを学んだ。地域を英語で紹介する学習で地域の魅力を発見して伝える学習をした。

三重 ①牛のことを学ぶ授業をもっと詳しく知りたい。②Aの保護者（父親）について、父との関係は、どうなっているのか？③クラスに部落出身の子どもは何人くらいいるのか④この地域を好きになった理由を知りたい。

報告者 ①地域の祭りから太鼓、だんじりについて知る。太鼓の皮から牛につなげていく学習をしている。②昔は父への接し方が強かったが、最近では気軽に話せる関係になっている。③割合は10数%程度。ルーツがある子も含めて10名程度いる。④地域の太鼓に出会い、地域の方と出会えたことが大きかった。

大阪 Aが休むことを事前にクラスでどのように話したのか？

報告者 クラスには「今は体調が悪いから長いこと休む」体調が悪いので、ということだけを伝えた。

三重 地域が好きになったと言うが報告者が持っていたイメージが地域とかかわることで、その前にもっていたイメージとどう変わったか？

報告者 赴任した地域に被差別部落があるという認識がなかった。そこで出会ったある方と密に話して知ることになった。以前はプラスマイナスどちらでもなかった。自分が地域に入るとあたたかく迎え入れてもらえ、地域の方も自分を好きになってくれた。

三重 祖母の思いとAが学校にくるようになったことにつながりが分かりにくい。そうなら、最初からクラスで手紙を書いたら登校できたのではないか。家庭訪問していいが、つながりがわからなくなった。

報告者 母と話して、それまでにも祖母が休んでいるときにAが風邪ひくとか母とも話している。中学校で不満あるわけでもなく、祖母が引っ越ししてというところがぼくの中で思いがいっぱいすぎて、クラスの子どもたちを動かして（力を借りて）、まだそこがぼくの中で、その方法をとってというのが自分の中でない選択だった。考えたのは考えたが、Bに相談して手紙書くという話が出てきたときにAがだいぶ家庭の中で落ち着いてきて、という話を母や祖母から聞いていて、今やったらクラスの子どもの思いが届くんじゃないかと思った。それまでは聞く耳をもってなかったというのが感覚である。

三重 ①くらしを見つめ、Aの保護者につながりと書いてあるが、どのように具体的に信頼関係築いたのか。②Aの情報や家庭訪問でのことを学校

でどう共有をしているのか。

報告者 ①4年生始まるまでは学校が楽しいという話は3学期にはたくさんした。「来年も（報告者）がいいと言ってます」の言葉で信頼関係を築けたのかなと思った。それまでは本心聞けてなかった。②祖母の思いは学校の職員会議の前に担任が話す時間にする。クラスであったことできごとを共有する時間が設定されていて、そこで共有した。ぼくが祖母とつながったことや祖母にも学校に来てもらったことで生い立ちを話してもらおうという機会もあった。そこで共有できているかなと思った。

三重 家庭訪問の文化が学校としてあるか。

報告者 差別の現実を聴かせてもらうこともある。部落差別のこともある。貧困や子育ての悩みや深刻なものも聴く。学校に持ち帰りチームとして対応。電話ではなく家に行こうというのが基本にある。

大阪（フロア同僚の方から補足）部落問題学習について本校、隣接校もしていたが温度差があったのは事実。統合をよい契機とし、小中9年間で育てるというカリキュラムで取り組んでいる。6年生までの学びを中学校へつなげていくというスタンス。中学校にも小学校の先生が行くというのもある。

大阪 母親のことが少し気になった。欠席の決定権が祖母にある。母の困り感は何かキャッチされたのか。

報告者 母親とのかかわり方のこと、段階があり、初めは「祖母が言うから」と母も言っていた。「おばあちゃん言うんで」と言われてそこから先は行けなかった。Aが「休みたい」と話したら、「母はどう思ってるの？じゃあ一緒に行きましょう」という感じで。母の考えを大事にしながら、ちょっとずつ母の悩みを直接言ってくれるようになった。家庭訪問が一番重要だと思った。スモールステップを大事にした。

三重 ①不登校の子にかかわる家庭の状況やいろいろある。子どもたちを取り巻く状況いろいろある。悩んでいる部分もある。先生の実践の中に5年生になって元気に。そのきっかけになっているものがあれば教えてほしい。A自身どう整理し

ているのかがあれば教えてほしい。②地域の課題は、なんだと思うか？

報告者 ①Aの登校のきっかけはカレーの話をしたときに喜んだことが印象に残っている。その日はカレーだったので給食まで居れた。授業に参加して、特に休み時間にクラスで流行っていた遊びを知って、楽しそうにしていた。②地域の課題として低学力状況がある。そこには部落差別に起因するものがある。言語環境が厳しい。それを地域ぐるみでなんとかしていきたいという思いで、子どもたちの現実をなんとかしていきたい。そこに部落差別の原因があるから中学校区の取組をずっと続けている。

—報告4—⑩

目の前の子どもから (京都市人教)
—主な質疑と意見—

三重 Aが作文に書くまでいろいろあったのでは。その間の関わりを教えてほしい。

大阪 Aの実態についてもっと詳しく知りたい。手紙(作文)を書いたことをまわりは知っているのか？

報告者 Aは自分を表現するのが苦手。自分の思いを友だちに伝えるのが苦手。なかなか伝えられない。感情を表に出すような子でない。リアクションが小さかったりする。本校で大事にしているのは相談できる学級経営を心掛けている。この人やったら話せるかなという。それは授業で取り組んだ当事者を講師として呼んだねらいでもある。日直のカードハートいっぱいカードを埋めつくしたこともあった。ただ、作文は公表していない。(補足でAの実態について)現在のA児の実態。着替え等配慮してっていうのは本人も希望してない。宿泊学習等でも男の子と一緒に風呂も入っている。担任はいつでも相談できる体制をとれる形をとるようにしている。漢字を通してコミュニケーションとったりして、子どもたち同士をつなげていくという形で取り組んでいく。

協力者 保護者に話す機会は？

報告者 すでに知っておられた。そうかなと思う部分があったということで、作文を書いたときに知っておられたので、驚くというより「そこからどうしましょうか」というところに話が進んでいった。

奈良 Aが作文を書いたのはカミングアウトでは？何かすごく葛藤して悩みながら心開いたかもしれない。葛藤があれば教えてほしい。そこまで自分のことを開示したというのは作文の取組にも優れたものがあったのでは。作文について教えてほしい。

三重 表現できないAがいた。解放された表現するようになったということがあったのかどうか。表現できないAというのをAのせいにするのではなく、させていないまわりではないか。この取組を通して、どうまわりが変わったのか知りたい。

報告者 迷いがあったのかわからない。申し訳ないが。日直のカードのハートや担任には「○○かしら」という言葉でしゃべる。徐々に表現できるようになったと捉えている。ぽつぽつ学校でも表せられるようになって作文が書けるようになった。現在は担任に女性の言葉を使う。でも友だちにはできない。話し方が変わる。LGBTの授業やったからかわるもんでもないと思う。今後積み重ねていくかわりの中で、この先生やったらいつか打ち明けようかなと思うかどうかだと授業をやって思った。まわりの変容は、うすうすBは子どもたちが学んだので気づいた子もいると思う。それを本人に聞いて…はない。(講師から)「それは多様性を受け入れてね」というメッセージがあった。「探さないでね」それも傷つけてしまうので。

現在の担任 4月から本校に赴任。関係が築けていなかった当初はコミュニケーションを拒まれていた。授業中も反応がないか、首を振るだけだった。徐々にAから話しかけるようになった。口調も「ぼくは、こう思ってます」から「わたしはこう思ってるのよ」に変化した。変に探らず、ありのままの姿勢を認めて関わっていくことが大事だと思っている。将来の夢を聞いたが、はぐらかされた。引き続き関係を築いていきたい。保護者とも細かく情報をやりとりしたい。

大阪 (ご自身の経験から)当時6年生の子が修学旅行前にみんなとお風呂が嫌となり、思い切って話聞いてみた。その子が堰を切ったように一気に話が広がって保護者とも話できた。マイノリティの人の気持ちを考えたときに誰かが聞いて受け

止めてほしい。つっこんでほしいという気持ち絶対あると思う。「大事に大事に」っていうのもわかるが、思い切ってふみこむのも大事だと思う。中学校とも連携して制服も変わった。部落問題とも通じることがあって、マイノリティとつきあっていくときに大事にしたい。

福岡 先生方が研修について、どんな風に学んでどう伝えたのかが気になった。学びをどのように子どもたちに返していったのか。

報告者 (講師の話から) 友だちができず、いじめられることもあったし自殺も考えた。でも今踏みとどまり、ある日、友だちに打ち明けた。まわりの友だちはすごく受け入れてくれた。そこから前向きになれて、発信していく側になりたいと思うようになった。決めつけないこととか、多様な生き方があっていいことを学んだ。子どもたちにもそういうお話をしてもらった。

奈良 すぐ地元の町、当事者に話をしてもらおうという話があった。自分が子どものころどんな気持ちだったのか、どんなつらいことがあったのか、当事者の方からの話をきいてとてもいい研修になった。その研修を受けて何か学校を変えていこうとした。呼称を変えた。(「くん・さん」づけから「さん」づけにする) 入学式で変えていく。徐々に変えていっている。当事者は絶対いるはずだ。制服があり、学校で見直していくところがある。学校全体として、取り組んだこととか変わったこととか、あるか？

報告者 「さん」づけは本校でもやっている。教職員も徹底してやっている。それ以外の取組は総合の学習6年生がいたからしたわけではない。毎年5年生が総合の時間にLGBT学習をする。図書室に関する本を用意して数も増えてきているが、校長が朝会で読み聞かせをすることもある。

—報告5—⑳

部落差別にぶちあたったら、だれにも相談せんと涙流すかもしれない。(三重県人教)

—主な質疑と意見—

三重 ①地域の人からの言葉で報告者は、どう立ち直ったのか②Aのお母さんが「今も差別があることを実感した」についてより詳しく知りたい。③部落問題を考える会について教えてほしい。

報告者 ①被差別の人の思いを聞こう聞こうと

して、怒りをもってやっていくことが大事で正しいと思ってやってきた。それを全否定された気がした。でも、立ち止まって…自分の思いを聞いてもらって、加差別の立場に自分がいることがわかった。まわりが差別をつくっていることによく気づけた。②地区懇談会でおじさんがSNS上で差別されていることを知って実感した。③加差別に立っているかもしれない自分に気づく学習をしている。

三重 ①「じぶんたんけん」の学習をどうして部落問題学習として位置づけているのか？②学校での系統立てた部落問題学習について③「Aが立場を知っているのか」「どう伝えていくのか」

報告者 ①自分の生い立ちを学ぶこと大切。事実を事実として受け止めていくことが大切だから位置づけている。②学校全体としても家族、地域、部落問題学習 事実を事実として見ていく力をはぐくむため学ぶ。③A自身は立場を知らないが、まわりを育てたい(加差別の側に立たせない)

フロア ①「おれはうまれかわった」今なら、どんな声をかける。なんでそういったの？どこでそう感じたのか②「先生自身が差別していたと気づけた点」③「信頼できる人に、どんなことを話したのか？(話せる範囲で)そして、今解放されているのかどうか」

報告者 ①「どこの部分で、生まれ変わったと感じたのか？」Aの成長部分にだけ目を向けていた反省②地区のある学校に赴任して家族から地区のことを聞いた。(過去の話と思っていた。高架下をくぐったら何かあるのかという恐怖心があった) だけど、自分は差別していないと思い込もうと自分で家庭訪問を繰り返していた。③自分の感情や気持ちを出さずにきた。人とのつながりを感じられないけど、本当は、つながりたい。自分をつくってきた。解放されているどうかは…1月以降、生い立ちをふり返る中で自分は、そのままでもいい、隠していたことを1つずつ出せるようになってきた。それが解放かどうかは、わからないが。

兵庫 先生方は正義感があって、子どもたちに力をつけていかないかん…じゃなくて、ともに力をつけていかないかん。という言葉が心に残っている。「地域の方にその言葉」を言わせた自分自身の

行動や言動を教えてほしい。

報告者 行動面は評価してもらったが、外の立場に立って、本当はまわりがつくっていることに気づけていなかった。

三重 (補足で地区の方) 地区の中に差別をなくす方法はないので、向く方向を地区外に向けるべき、と伝えた。

福岡 自分自身に向き合える姿勢、すばらしさに感銘 教育に関わる丁寧さ感じた。「じぶんたんけん」学習についてやろうとした思いとやった感想を。

報告者 午前中にもあったように「一番しんどいことが、一番わかってほしいこと」だから、そこが肝。この学習だけで完結するわけではないが、生い立ちを出すことで、わかる。ここにこだわっているのは、自分はできなかったから、突き進んでいった。もしかして、傷ついてしまう可能性もあるかもしれない。去年までは、いろいろと出させすぎようとしていたが、気をつけたい。

三重 (報告者の同僚) 自分たんけんの取組について…滑舌の悪い子に対して担任が言い正そうとしたら、周りの子にやさしく、いさめられた。(別の子で) 夫婦けんかしながら、子どものため家族のことを出すことを了承してくれた。C児…今のままでいい、と思っている。

三重 Aの行く末が心配。今後は、お家の人の思いも大切にしながら、学びを届けてきた。

本人に、どう伝えていくべきなのか？

報告者 神前に来た時も、伝えることが大事、すべてだと思っていたが、Aの母親も親戚もいる。伝えないわけではない。(補足) 過去は出身宣言もしていた(いまはしていない) 6年生に向けて集会所にて学ぶ機会、その場にいる子もいるが、伝えたくない親もいて、きていない子もいる。子どもだけでなく、おとなになって知る、学ぶ→それにこたえる環境(まわりの力やサポート)が必要だと思う。

Ⅲ 総括討論およびまとめ

2日間で5本のレポート報告があり、その報告から見えてきたものを、自分の実践を差し出しながら交流し合うことを確認し、総括討論を始めた。「若い教職員への継承」や「職員研修、地域での研修の充実」、「自分事」や「自己の解放」という

キーワードが見えてくる中で、子どもたちの様子や変容、おとな自らの実践やさまざまな人々と向き合う姿勢をふり返っていった。

(地区出身であること、立場を伝えることについて)

三重 地区出身であるということを学校側が伝えるというわけではなく親から教えてもらうのがいいと思う。今というタイミング、今だと思ったとき伝える準備が必要だ。子どもにとったら立場を自覚するのは必要なことと考えている。知らないまま行ったときに地区出身であることをつきつけられた時、なんで家の人は伝えてくれないんやろうと思うんやと思う。その準備はしっかり大事なんと思う。立場を自覚させるために、あんたは部落に生まれたというのを言うんちゃう。

香川 部落問題の立場を伝えるかどうか、いったい何を伝えることなのか、まわりが問題。加差別の体験、ずれてるような感じがした。いろんなしんどいことを聴き取りしてきたと言われたように探り出しても自分のまわりに加差別の現実があることにこそ目を背けたらあかん。その現実にあるということを言ったときに差別の現実の社会があるんだということを伝えることが大事だと思う。方法論じゃなく何をめざしたのか。子どもたちが気づいていく実践をしていこう。教え子が同和教育に巣立っていくすばらしさ。報告者と協力者のような関係をつなぐバイパスのような存在の人がいたのか？

報告者 立場について…取り組んでいく中で迷いがあった。正直わからなくなっている自分がある。立場の自覚については、これからも、しっかりと学んでいきたい。バイパスの存在…地域の方のあたたかさ、子どもたちの姿や保護者、自分の思いを受け止めてくれる同僚の存在が大きい。

三重 (大阪府報告者へ) 家庭訪問で地域の方が温かく迎え入れてくれた。なんでそんなに温かく迎え入れてくれたかを考えたことあるかな。先生に期待してるから。想像だが、部落に行ったらきつい人こわいとか、イメージを払しょくさせたいのでは。部落に来たらあつたかいという風にして、そういう思いを受け止めて子どもたちに返してもらいたい。あたたかくてよかったではなく地域や親御さんたちの思いをきちんと返してほしい。

不登校の子どもが学校に来た。なかまづくりがきちんとできていった。単発的ではなく、自分のしんどさをクラスの子にわかってもらって、それを共感して受け止める。自分もまわりも大事にする。教育の基本やと思う。そのこともきちんと受け止めてほしい。(三重報告者へ) 熱い思い。すごい。なんかひしひしと感じた。先生一生懸命。題名に、この言葉に震えました。わたしやん、若いときの。わたしは乗り越えたが、差別受けてきたものがある。いろんな差別がある。乗り越えてはきたけど、子どもには弱い。いたたまれなくなる。

(質問者自身の子どものさんのことで立場を伝えることについて) 当時の先生に相談し、引き出してもらった。親の会もつくろうと支援してくれた。一緒に泣いたり笑ったりして先生にひっぱってもらった。こうやって話している過去のわたしでは考えられなかった。その時の先生の力って大事、ありがたい。まわりの先生に、まわりの問題やって、まわりが差別する。もちろんそうだが、部落出身者はがんばらなあかんとときがある。まわりもがんばらなあかんと。子どもにそんな力をつけてほしい。先生とともに差別をはねかえす力つくってほしい。なかまつくる方法を親と一緒にやってほしい。

報告者(大阪) 自分が言えてなかった、伝えきれなかったことを思った。最初は話してもらえなくて右往左往していた。太鼓の練習や演奏を通してようやくなかまに入れてもらえた気がする。自分ができることは何か考え、クラスでの取組やクラブ活動で太鼓を取り入れるようにした。まだまだ足りていない。

報告者(三重) お話を聞いて、改めて地域や保護者の方と一緒に・・・という思いになった。加差別の立場にある自分に気づけたからこそ、立場についてこれからも子どもたちへ伝えていきたい。

三重 2つの柱で話したい。「教職員研修の課題」と「なくすことへの道筋・手立て」若手の研修が課題と言われるが、ベテランもがんばるべき。努力すべき。難しいことを難しいと正直に白状しよう。その上で一緒にやっていきましょう。研修の課題について、自分の差別性を白状しろということ。線をひいてしまう。分けてしまう。

(過去にやってきた太鼓を使った学習や活動) ムラの中でやってきた文化的な価値のあるもの。歴史の中でやってきた値打ちのあるものやれば差別なくせるんじゃないか。叩ききったときの満足感、達成感みんな味わえることを中心にやってきた。立場のことどう話せば、いいかと相談もかけられた。どう説明できるか過去の全同教の大会で質問したが、答えてくれる方も(自分の立場を)教えてもらってなかった。これは改めて難しいんやと思った。教員として勤める中で、自分でどんな風に部落差別のこと考えとるんやろう、と問うた。被差別の立場の自分とそうじゃない自分でわけて考えてる。被差別の立場にいる自分って言うのも線を自分で引いてる。同和地区に行くって線引いてるのは自分。線を作っていたのは自分やったどっちもないはずやろう。自分の捉え方、押さえ方、わけてしまうものが入って来ること。

(なくすことへの手立てとして) 例えば、〇〇さん在日常しいぞって聞いて本人に「なあ在日常なんて」聞いたら・・・乱暴、その子もひいていく。もしちゃんと勉強しとけば、「在日常って聞いたけど、おれとお前の関係変わらんで」って言わんと差別する側に回ってしまう。どんな差別がまわりに実際あるのって、出し合って、これっておかしいって見えてきて、差別をなくすことが始まる。返していく。あらがう抵抗する。逃げる。方法は違ってもいいから手立てを学んでいく。探していこうっていうのを子どもたちとつくっていくのが大事。(質問者本人が) 残された時間の中で学習をみんなで行っていいと思う。

三重 前任校は同和教育が盛んだった。同和教育出会ったいっぱい教えてもらい、そこから地元の熊野に帰って行って実践して同和教育の「ど」の字もなく、できること考えていかないと、あらためて聴いていっぱいこれからと思うところもあったと思う。渡部さんが一生懸命話されているのがいいなと思った。

(性の多様性について質問者が) 自分はどうかっというときに、男らしい男の人だったところには入らない。女の人と結婚、4人子どもがいる。男の人らしい男ではない。女の子っぽい。女の子きょうだいの中で育った? いぶかしんでしまっ

た。変わった男の人っていう感じ。「気持ち悪い」っていう反応をされるやろうなという感覚がぼくの中であって、ぼく育ってきた中でずっとタブーにしてきた部分それって別にそう、タブーにすることじゃない、そうやって自分の中でタブーにしていた。他の人にもそう見とったことに気づいた。性的少数の人がおるとかその人たちを男女と多数の人たちがいかに受け入れていくかという話でなく自分がどう変わっていくかということじゃなく、今の学校で来れてない子がいて来られるようになった。

(担任した子どもとの会話から) あなたはあなたあの子はあの子っていう話に納得してくれたと思って、カテゴリーにわけていくことを学んでいくことじゃない。そういうところで抱えている人の思いを受け止めるのも大事やけども。

(SSW から聞いた話からリスクについて) 性の多様性について、やってほしいんやけどやり方を考えてほしい。発達に課題をかかえているその話を聞くことによって、勘違いするかも、おれ(わたし)ってもしかして同性愛者とかかもって思うこともある。医者に行って診断名がついて薬出してもらったら終わりになるかもしれない。

質問・・・午前中当事者の方に来てもらって学ばせてもらったとか、勉強しているとかって中身ってどういうものやったんやろうって思った。研修の中身を知りたい。

報告者 LGBT の話を講師の方は同じことを大人にも子どもたちにもされた。言葉の意味も話された。それは正しいことを知るために伝え、性への捉え方はさまざまあることに授業を受けながら学んでいった。サッカーをしているくまさんの絵とかを見ながら男性だと思うか女性だと思うかどっちだと思うかという。見た目で決めつけていう。そういった中で進めていった中で友だちと交流していく中で男の人が男の人を好きになるなんてっていうそれが実態を知り、疑問がいっぱいあった中で授業してもらった。それはあかんこれはあかんって言う問題ではないんじゃないってことにたどりついていった。受け入れていくっていうことが、多様性を受け入れられるような子どもたちになってほしいっていうねらいで、

ゴールはそこ。1回で育つほど甘くないと思う。人と出会ったときにどう対応できるか、子どもたちとやっていきたいゴールには多様性を受け入れるお互いを理解する力をつけてほしいという意味で入れた。そういったところをLGBTの単語を学んだというわけじゃなくて差別がなくなっていくわけじゃなく、子どもたちがエリーの方の話聞いた時に質問していいと言われてエリーという団体が100年後も残ってほしいと思う？という質問にみねやまさんはなくなってほしいと答えた。

三重 報告者の先生は、どうやってこのことは自分事にされたのか？少数派の人をあたたく受け入れられる時なのかなど思ったりして、みんながオープンに自分の性ってこうやって話せるようになったときかなって、ぼくがすべてそう思ってるわけじゃない。その問題をどう自分事にされていったのか、同和問題を自分事にしていくのと重なる。自分の問題をどうしていくかっていうのを聴かせてもらいたい。

(報告者が考えている間に)

大阪 自分事としてとらえることというのがどういうことか。立場を自覚するとか、そういったことを言われていた。ちょっと自分が受けた研修。最近考えたことと重なる。今の話と重ねて話したい。障がい者問題の研修を受けた。健常者ってどういうことですかという問いをされた。例えば障がいのある人は自問自答しますと。LGBTの方も自問自答しますと。被差別の立場にある人は自問自答すると。健常者の人は自問自答したことあるか。外から見てたことに気づいた。報告の中にもあったが、自分自身が外から見てたということに気づかされたことを考えた。自分事にするっていう時に、性的マイノリティの人たちを考えると、性的マジョリティについてどれだけ考えるの。女性差別考えるときに男性でそちらの側にたっているとか、いろんな問題でもしてきてるのかといろいろ考えた。自分事にするって、最後の報告の方の自分自身に気づかされた話と共感したが、自分自身が教職員、保護者、子どもであろうと、どんな立場であろうと自分自身を見つめていくことかなと思った。それがなかまをつくっていく中で、本音語る中で自分を見つめるっていうこ

とをお互いがしていく。自分を見つめたときに嫌な自分も出てくるかも、すきな自分も。それでいいよという雰囲気。互いが互いの自分を見つめてそれを出し合っていくということ。自分を見つめるのが大切だと思う。もう1回、基本に戻って自分はこの仕事を選んだのという、自分は何でこの仕事に興味もつことができるとんやろうと、自分が振り返ることが大事だとあらためて感じている。

三重 部落問題もLGBTに関わることもすべて自分事として考えることが大事。本気で差別をなくしたいんか、というところに尽きると思う。(質問者の過去の取組の報告の話から)自分が何も考えてなかったことを突きつけられた後に自分の家に帰ると部落差別の現実そのものがあつた。覆すためにまだ道半ば。くらしの中で人間関係を生かすことが人権課題を学ぶために必要な1つではないか。なくしていくおとなの生き方を子どもに見せる。それが自分事にする、ということではないか。

2日間のまとめ

・差別の現実を明らかにする点において、薄い透明な膜を取り除いてほしい、何かバリアがあるんじゃないか、結婚差別の話門前払いに会った話。被差別の体験を聞いてきたことで踏み込む。しっかりやらないといけない。これもひとつの方法。アンケートをとることで部落問題の学習を家で伝えることで親が差別的な返しをしたときはどうするか、しっかりと判断できる手立てをしっかりとつくっているのかそういう教育をすることによって、差別に出会わず可能性もある。しかしSNSやインターネットでは差別の現状に触れる機会ができていく。必ず教育をしていかなければならない。ムラの子だってしっかり地域で学ぶ子ども。学ばずにいく子もいるだろう。どこで教育するのか教えるのかそれは学校現場ではないか。そこで教えることは上辺の学習ではあかん本気じゃないとあかん、そういうことが言われる。子どもが本気ならいいわけじゃない。教職員(学校)がしっかり本気でやらないあかんのっちゃうかと思う。寝た子はしっかり起こさなければいけない。

・子どもたちの集団づくりに関して、日記や子どもの様子を知る。ていねいに気になることを聞き

取る。前の担任であつたり地域の人であつたり集団づくりの手立てを取り入れる。なんでも子どもの受け入れる集団をつくることで子どもたちがやってくる。多様性の受け入れ、そういう学習も取り入れる中で知っていくこともある。LGBTの研修などはそういうものがある。

・集団づくりをする中で当事者は自分のクラスに必ずいるという思いで進めているか、いるのにいないふりはしていないかという意見もあつた。そういう風ななかまづくりをすることできつことはわかってほしい、嫌なこともしんどいことも言う集団、集団の力で教職員が気づかされる部分があつた。

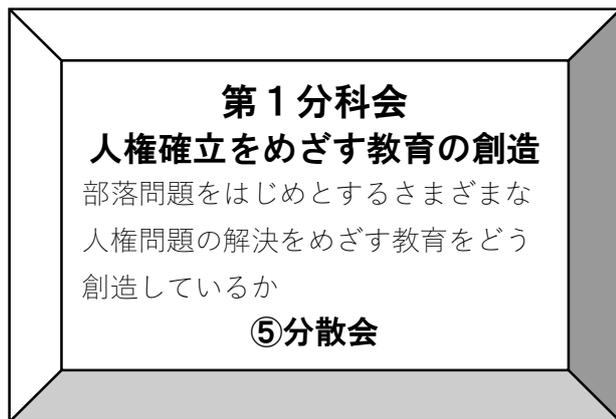
・立場を自覚するという話もあつた。いろいろな捉え方がある。子どもに知ってほしい。親の会もつくったり一緒になって泣いたり怒ったりしてくれた。ころある先生のおかげで一緒に受け止める、一緒に教育する教職員がいたから助かつたという意見があつた。その中で出身者もがんばらないかん。反差別の集団をつくってほしい。集団づくりの話も出ていたと思う。

・不登校の子に関しても親が学校に行かせない。困っているのは誰か。理由や背景に困りがあるんじゃないかそういうのも出てきたと思う。このような話をしている中で私自身も加差別の立場にあることに気づく。加差別にいる自分に気づかされる瞬間があつた。自分はそんな気持ちじゃなかつたが、そういうところで気づかされるのだと思つた。報告者の様子を見ながら自分はどうだつただろうかと振り返る2日間だつたと思う。

・若い教職員へ、どのようにつないでいくのか若い方たくさんいる。明日からつながる。ベテランの方たくさんいる。わたしもベテランの年だと思つけど、つながらないのは若手のせいではない。中堅のわたしたちのせいである。中堅が若手の問題を言っていたが、それは若手に好かれないあなたの問題。そのことに一緒にやらない、あなたであり、わたしの問題である。

・どんな学びがあつたのか、ひとりひとりの子にどんなことが言えるか、どう見えるかが変わると思う。変えていかないといけない。その学びをいろいろな人につなげていかななくてはいけない

と思った。ここで学んだことを明日から大きなうねりにして同和教育運動となるようなものができたらいいなと思う。



I はじめに

基調提案は、分科会「討議課題」をもとに提案され、開催地である三重県の現状と課題もとり上げて説明し、すべての人が部落問題をはじめとする人権問題を「自分事」として捉えて解決に向けたとりくみをすすめていくことを確認した。

II 報告及び質疑討論の概要

一報告1-②

Aさんの笑顔を見たい (徳島県人教)
一主な質疑と意見一

宮崎 Aさんのことについて小学校から中学校への引継ぎはどのような形で行われたのか。心のよりどころになるBさんとはどのような関わりで心の友になっているのか。

報告者 中学校に入る前に小学校の先生と担当者が会ってAさんのことを聞いている。Bさんは小学1年生から友だちで、AさんからするとBさんはスーパーヒーローで、自分ができないことをやってくれたり、がんばれと勇気づけたりしてくれる大切な存在。

大阪 中学2年であれば、高校との連携は上手くできるようになっているのか。進学に向けて今から動き出していることはあるのか。

徳島(校長) 県内のいくつかの地域ごとに中学校と高校の先生が一堂に会して情報交換をして子どもの育ちを共有している。また、高校によっては特別な支援が必要な子どもについてそれぞれの中学校の先生から話を聞くようにしている。

徳島 陸上部のことで、養護教諭はAさんのサインに気づいたのだと思う。Aさんが発したサインはどのようなものだったのか。Aさんにとって陸上部の3か月間は大きかったのでは。どうだったの

か。

報告者 Aさんは走るのがとくいと聞いていた。Bさんと同じというだけでなく、中学校で変わりたいという気持ちで陸上部に入ったと思う。

サインは、Aさんは調子や雰囲気、態度がおかしかったが、最後まで続けるのが正解だと自分は思っていた。養護教諭から言われてハッとした。大会で1500メートルを走って終わり本人は決めていたようで、「やめたい?」と聞くと笑顔で「はい。」と返事した。

徳島(校長) Aさんにとって養護教諭は担任とともに部活動や学級経営にも関わる心強い存在。

徳島(養護教諭) Aさんを心配しながら見ていた。毎朝練習をする姿、大会で最後まで走ってゴールする姿を見て感動した。Aさんは「もうやめようかと思ったけど、どうせやめるなら最後まで走りぬこうと思った」と言った。Aさんの中で納得できたということ、大きな充実感を得たと思った。

三重 この子の生活背景、この子自身が本当にしんどいと思っている実態は何か。

子どもの実態をどうとらえて、どういったとりくみをされていたのか。

報告者 Aさんは3人兄妹で下の兄が場面緘黙、上の兄が障害があって特別支援学校に通っている。その兄が家庭で暴力をふるっていた。お母さんにも暴力をふるっても止めることができず、Aさんは「強くなりたい」「世の中は不公平」と作文に書いていた。不公平というのは自分の家族構成のことだった。SCや養護教諭といっしょに話を聞いた。

大阪 私たち教職員は不登校の子どものことを考える時に何が要因かを探ろうとするが、実際にはわからないことが多い。自分の子どもが中学校のとりくみに対して違和感をもって不登校になった。高校でも不登校が始まった。子どもと話をしていくと、「学校って何でいつもめあてを立てさせるのか。行事や部活で少し高めの目標を決めて乗り越えさせようとする。自信をつけさせようとする。自信なんて自分でつけるもの。」と言った。学校文化とか教職員の価値観を考え直さないと違和感を感じている子どもは少なからずいるの

ではないか。

一報告2-②⑤

「ぼく、みんなの前で言ったんやで！」

(三重県人教)

一主な質疑と意見一

神奈川 Aの学習面全体についての様子はどうだったのか。読み書きの苦手さは何に起因していたのか。

福岡 Aの力をつけるための取組をおしえてほしい。読みの力をつけるために補助具など使っているのか。

報告者 Aは、単純な暗記は割と得意だが、思考することは苦手。指先が器用でなく音楽も苦手、運動も苦手である。詳しい原因は発達検査等を行っていないためわかっていない。Aの力をつけるために放課後に補充学習として作文や漢字、計算など時間をかけて行った。通級指導教室に週に1、2回通うようになって支援を受けていた。

大阪 Aは母親に対しどんな思いを持っているのか。母親とAとはどのような関わりなのか。両親と先生とのつながりをAはどう思っているのか。

三重 周りの子はAをどのように見るように変わったのか。A、Bはクラスの子をどのように見ているのか。

報告者 Aはつらい生い立ちの中で過ごしてきて、母親を大切に思っている。その反面恥ずかしさのため母親にきつく当たることもある。両親と担任のつながりについては、家庭訪問をしたときにAも一緒に話すなどよく思っていてくれたと思う。Aが最も変わったのは、けんかがなくなったこと。きつい言葉やめごともなくなった。AはBと仲よく関わりたいけれどなかなかうまく関われない。けんかになるとなんで自分ばかり責められるのかと他の子へ対して否定的な見方をしていた。

兵庫 周りの子の見方を変えるためにどんなとりくみがあったのか。今現在のAの様子は？

三重 参観日を欠席した理由、周りの子たちの反応、その後のとりくみはどうだったのか。

報告者 「聞く、書く、話す」を中心にとりくんだ。自分の思いを書く、話す、作文を交流することでクラスづくりをしていった。また、Aのいい

ところを周りの子たちに伝えるようにした。今のAは、欠席が多くなることもあるが、授業や行事で頑張る姿を見ている。授業参観を欠席した理由は、家庭環境が大きな理由だと思っている。周りの子どもたちの反応は、Bをはじめすごく残念がっている様子だった。しかし、その後の行事にはすべて参加できた。

大阪 一緒に音読をする子どもがいることで、Aは読みやすくなっている。これは合理的配慮。国語以外の教科で隣の子がサポートすることがあるのか。

報告者 算数で同じ班の子がAと一緒に考えている姿があった。他の子どもの力も借り、担任もサポートをした。

徳島 学級での取組を他のクラスや学校で共有していたのか。通級指導教室でのAの様子は？

三重 1月の授業参観を欠席したAの気持ちを聞き取ったのか。学級で子どもと話し合うなどして、Aにアプローチしたのか。

報告者 その時点では共有できていなかった。報告書をつくるにあたって学校全体で共有するようになった。今年度はできている。通級指導では、平仮名や漢字、計算などをしていった。宿題もしていた。授業参観に来るのが自分のゴールなっていて、Aに強く聞いてしまった。家庭訪問して自分のつらいことから逃げてはいけないと話をした。次の日にクラスの子たちにAを明るく迎えようと言った。

徳島 子どもを問い詰めるのはいいが、逃げととらえないでほしい。適応指導教室をしていた時、不登校の子が識字学級の話聞いて通ってきた。そこでおじいちゃん、おばあちゃんと出会って関わる中で変わっていった。人間が人間を一言で変えることができる。

神奈川 Aはディスレクシアではないか。文字の読み書きに障害を抱えている可能性を感じる。検査をして必要な支援をしてほしい。授業参観には来たかったのに来られなかったのは逃げではなかったと思う。乗り越えきれないことと見取ってほしい。

一総括討議一

三重 小中連携の中で小学校の取組から学ぶことが多い。綴ることは発表がゴールでなく整理を

つける力を育てることと教えてもらった。報告者がAさんとやり取りして綴ったことを発表をゴールにしていないことが集団づくりとして大事なこと。

三重 Aと周りの子どもと交流する機会を多く持たれていた。「聞く」ということを大事にしていた。相手の話を聞くということが相手を大事にすること。学年でチームとして進んでいくことも大事にしたい。

三重 自分の気持ちを聞いてもらうことがここまで子どもを変化させることを学んだ。周りの子どもたちが聞いてくれるんだと思ったことがAの翌日からの変化になった。

家庭の中に切り込んで、しんどいところを話していくことが大事。家庭のことが聞けなかったことをふり返ると、自分の偏見であったりこうでなければならぬと思っていたりすることがわかった。

宮崎 5年生の子どもが文字の読み書きに対し拒否反応がある。できないことがつらい。教師がため息をつくのがつらいと言っていた。教師の受け留め方が子どもの人生を左右する。教師が良かれと思ってすることが本当にその子にとって良いことなのかを考えないといけない。

三重 子ども、保護者の顔をしっかりと見て、思いを聞き取らなければならない。その子の背景をひくくめて周りの人と話をしないといけない。そこにある差別を見抜かなければならない。その子にできていることやその子のすばらしさを見抜かないといけない。差別に共に立ち向かっていかなければならないと思った。

奈良 4年生の担任で、不登校傾向の子どもとどう関わったらよいか悩んでいる。日々の実践の中で、これでOKと決めつけていないかを反省した。その子のペースを大切にすることを学んだ。こちら側がゴールを決めないで、その子がいけない理由を見つめないといけない。子どもの成長を見れる教師でいたい。子どもの頑張りを大切にしていきたい。

東京 教師がしんどくなる時がある。報告からチームでやることが伝わり、集団の力を感じた。

—報告3—④

当たり前は当たり前じゃない～中国からやってきたリョウが私に教えてくれたこと～

(大阪市人教)

—主な質疑と意見—

高知 「リョウ」という名前で表現されているのはどういう考えからか。これまでの実践の中で、子どもや保護者の思いを敏感に感じ取ったことがあったら教えてほしい。

報告者 仮名については、支持があったから。

大阪 仮名の方が伝わりやすいから大阪市人教ではそのようにしている。

大阪(元校長) 外国人の母親に説明したことが、母親は頷いているのに伝わってなかったことがあった。また、子どもと母親がけんかする中で「私が日本語がわからないと思ってバカにしているでしょう!」と言った。その母親の気持ちを教師がどのように敏感に感じ取るかが大事なこと。

大阪 リョウのその後はどうなっているのか。

報告者 母親が再婚して卒業間際になって不安定になった。市外へ転校して、現在の様子はわからないが、中学への引継ぎだけは行っている。

石川 リョウに文化の違いもある中で、先生との距離がどのように変化したのか。子どもたちとの関係はどう変わってきたのか。

大阪 リョウが自分の文化やアイデンティティを大事にするためにどのような取組をしたのか。周りの子どもはどう受け止めて、集団づくりの中でどう生かされているのか。

報告者 担任という認識はあったが恐さもあったのか学校では他の先生に甘えることはあった。学校全体が居場所になっている感じだった。アイデンティティについては、日本語教室の先生が、「中国デイ」「ワールドデイ」などの時間を月に1回設定して中国の遊びなどを行っていた。6年生の社会科では自分のルーツのある国について調べるようなことをしていた。ESDの取組で、今自分が住んでいる地域を調べることもアイデンティティにつながると思う。

報告者 周りの子どもたちは最初どう接していかかわらず戸惑っていたが、リョウの活躍を見たり関わりが増えたりするにつれ、リョウを受け入れサポートできるようになっていった。

大阪 リョウはその時の感情を言葉として表現できる状態にあるのか。リョウに対して言葉を使うというサポートをしてきたのか。

宮崎 言葉にできずにかんしゃくを起こしたのは、日本語が表現できないからか、表現することが言葉にできなかったのか。

三重 なぜ運営委員に立候補したのか。「ESD」について説明してほしい。

大阪 中国語弁論大会に出た経緯は？

報告者 自分の思いを言葉で表現することは難しい。中国語であっても難しかったのだと思う。かんしゃくについては、中国にいた時から自分の思いを出すのは難しかったと聞いている。運営委員の立候補は、がんばる気持ちがリョウは強かったと思う。「ESD」は、ユネスコが提唱している「持続可能な開発のための教育」。本校では外国にルーツのある子どもが多く、国際理解教育と地域を知る学習に取り組んだ。中国語弁論大会については、リョウは自分が選んだ詩を暗唱した。

—報告4—⑳

小規模校の中で～一人ひとりにあった児童の成長を見守る～ (高知県人教)

—主な質疑と意見—

宮崎 小規模校による固定的な人間関係がなかったのか。高齢者福祉施設には障害のある方ということだが、遠くから来ている方もいるのか。

報告者 固定的な人間関係はある。それを崩していくのが自分たちの仕事で、その子のいいところを見つけていく取組をしている。視覚障害、聴覚障害の方は県内外から来られている。

石川 人権作文でAは自分の内面を伝えている。普段から自分の思いを表現する場があるのか。Aはすんなり納得できたのか。

報告者 作文ができるまでには何回も文章を書き直している。自分の思いを開示するのはなかなか難しく、殴り書きで思いつくままに書かせたり、担任がどういうことか聞き取ったりしながら書かせた。自分自身が転校してきた理由を書きたいと言った。

奈良 小中の連携について。

京都 中学校に進むにあたって友だち関係にどういう自信を持たせたいと考えているのか。

報告者 「連携日高の会」という組織がある。17

年ほど前、中学校 53 人中 10 人が受験に失敗し、4 人の子が卒業式の時に進路が決まっていなかったことがあった。中学校だけの責任ではなく、それまでの保育、小学校も責任を負うべきという話になり、「0 歳から 15 歳までの育ちを見守る連携日高の会」ができた。初めのうちは小中の仲は悪かったが、現在は互いに話がしやすくなっている。

A が以前いじめを受けたことから、こういうことはしたくないと自分の考えに自信を持つようになっていたので、背中を押したい。1 人で行くことに不安もあるので、中学の先輩との連携、先生とのパイプを生かしていこうと思っている。

三重 入口の話で、A さんの心の傷に対して受け入れる先生方がどのような準備。態度で接していたのか。

報告者 いじめを受けた前の学校からの引継ぎはなかった。両親から何とかしたいという話を聞いた。心の傷に対する準備はできておらず、はじめはうまくいかないことがあった。子どもたちがフォローをしていた。

高知 地域のおじちゃんの立場。A だけでなく、父母もこの地域で安心して過ごせる場所ができた。地域では子どもは宝で、必ず子どもに声をかけている。地域活性化会議では子どものアイデアを取り入れながら地域づくりをしている。

大阪 教師と子どもの関係性は濃密と思うが、友だちとのつながりはどうか。

報告者 初め関係がよくなかった B とも次第に打ち解けていったり、下の学年の子と家族ぐるみでつき合ったりするなどがある。

大阪 もう一つの小学校の連携は？

京都 普段いっしょにいない人と一緒になったときの A さんの様子はどうか。

報告者 もう一つの学校から話を聞かせてほしいと言われたが、親は望んでいなかった。

もう一つの学校と交流したときに同じ学年の子どもと遊ぶことができなかった。まだ交流の機会があるので状況を見て焦らずに取り組んでいきたい。

—報告5—②

「すぐそこに 戦争があった」～社会科を中心に
して他の教科や地域とのつながりを関連させた
平和学習～

(宮崎県同教)

—主な質疑と意見—

大阪 戦争について今の日本の状況も含めて「いつ」ということを子どもたちに語ったのか。

報告者 従軍慰安婦や徴用工問題、憲法改正問題について授業の中で子どもたちに語ってきた。戦争を起ささない当事者になることを伝えている。

奈良 「知覧特攻平和会館」見学で、特攻隊は賛美されたりもする中で、子どもたちにどういうふうに話していったのか。

報告者 明日自分が命を落とすとわかっている人の気持ち、写真に写っている一人一人は何を考えて飛行機に乗ったのかを考えながら見てほしいと言った。自分たちと同じような年の人が命を落とす悲しさを感じ取っていた。

兵庫 広島の平和資料館はリニューアルされた。見て感じたことを日々の生活に生かしていかなければならない。女の子たちの関係は、学習を進める中でどう変わっていったのか。

報告者 命の大切さを考えたと思う。劇の取組を通して一人ひとりが頑張っていることを認め合うことができるようになった。

高知 部落問題でも子どもたちの発言は地域に対して力を持っている。この劇をどのような形で発表されたのか。地域への発信はあったのか。

報告者 学習発表会で発表し、保護者や地域の人たちに見てもらった。地区の人権・同和教育研究大会でも発表した。

大阪 次の世代にどうつなげていこうかということに悩んでいる。この取組はいつごろからやっていて、今後どのようにつないでいくのか。

報告者 自分が持った6年生で取り組んできた。学校としての取組になっていないので、子どもたちに広げてほしいと思っている。

高知 今、急速に教育の世代交代が進んでいる。人権・同和教育への取組も学校によって格差がある。若い世代の教職員の姿を見かけない。若い世代へのバトンタッチをがんばらなくては。

兵庫 子どもの頃に受けた平和学習が今も心に残っている。どうやって広げていくか。人権参観

をなぜするのかを語り継ぐ研修会が学校で開かれた。先輩の思いを感じることができ、その思いをつないでいく気持ちを持つことができた。

大阪 戦争・平和に関する資料館や博物館が各地にある。遊就館では、子どもがゼロ戦の模型をほしがる姿などが見られる。施設をどう魂を入れて使うかが大事。終戦間近、病弱の祖父が部落の人間なのに志願しないのは非国民と言われ出兵した。戦争が始まると差別が横行する。そういう時代にはいけないと子どもたちに伝えていかななくては。

大阪 どうやってつなげていくのか。広島への修学旅行を続けていくために、それを教育課程に位置づけ、事前と事後の学習を充実させていくことを大事にした。学校文化の中に位置づくように、全体を通してカリキュラムマネジメントをしていった。特攻は命を奪う目的で突っ込んでいく。原爆は被害がクローズアップされるが、日本が戦争をする加害の視点をどう教えたのか。

大阪 フィリピンで「今度は何を奪いに来た」と言われた。加害の側面を教える必要がある。「幸せなら手をたたこう」の歌が生まれた経緯を話す。現在地球上のあちこちで起こっている戦争についてふれたのか。

大阪 小学校の修学旅行で知覧に行き涙を流したが、それは命を落とした人の被害に対するものだった。教師になり広島への修学旅行で毒ガスを作っていたことを知って、子どもたちがその加害性に衝撃を受けていた。戦争の加害をどのように学習したのか。

報告者 南京大虐殺など交え、写真なども見せながら加害の事実を話した。現在の世界の状況について、生まれてから灰色の建物しか見たことがない子どももいることを話した。子どものつぶやきから自分の国が被害だけ受けたのではないということを実感しているようだった。

Ⅲ 総括討論

大阪 「戦争・平和学習がなぜ人権学習かわからなかった」という若い世代の声があった。今、大阪は平和学習がやりにくい状況があるが、工夫した取組により「できた」という声で元気をもらっている。

高知 「加害」と「被害」について部落差別と同

じ状況がある。加害者はそれほどのことでないと思ひ、被害者は深く傷ついている。言葉の問題で、日本では「終戦」と言い「敗戦」とは言わないが、近隣諸国は「勝戦」という。そこに意識の差がある。その辺りを深く考えて、日本がしたこと、された事実を認めることから始めていかななくてはならない。人権・同和教育が深まったことで多くの子ども、保護者が救われた。これからの未来につないでいきたい。

大阪 子どもにとって居場所があることが大事だとわかった。そこに行けば信頼できる大人がいる、気の許せる仲間がいるということ。学校の中だけでなく地域との連携によって居場所をつくっていく必要がある。人権教育・平和教育を続けていくために、授業にどう位置づけるか、カリキュラムマネジメントが必要。また、エネルギーが最も必要で、それは出会いによって生まれる。たくさん地域の人や子どもとの出会いによってエネルギーをもらった。

大阪 継承のことで悩んでいる。研修会で「明日すぐに使える情報が欲しい」という若い世代がいる。どのように伝えていったらいいか。

報告者 「やりたい」という気持ちがある。勉強したい若手もいる。どうやったらいいのか教えてほしい。

大阪 採用されて先生が真っ先にすべきは学級経営。子どもや保護者、地域に何を学ぶか。そのことによって教員は大きく成長していくきっかけを得る。新採研で先生が学校から離れて研修を受け、大事な時にその感性を削がれる。学びたいことがあったら待っていてはだめ。情報を得て外に出て学ぶ。ずうずうしくこれを教えてくれと積極的な行動をとってほしい。

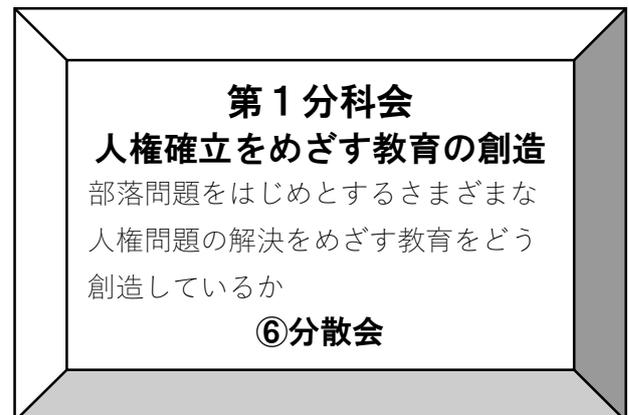
大阪 明日すぐ使えるものは、しばらくすると使えなくなる。いつまでも使えるものは自分でしか獲得できない。自分が見れないところに出かけていき、いろんな人と出会いを作ると必ず自分の財産になる。

大阪 いろいろな先輩の背中を見てきた。今はとにかくもらったものを渡さなくてはならないと思っている。教職員は繋がらなくてはならない。繋がったらいい成果が出る。

奈良 成功体験から自信をつけるのはそれだけでは危険だと思う。躓いた時などに維持できなくなる。失敗してもがんばれる、自分は大事、大切な存在、居てもいい…というのが本当の自尊感情ではないか。力をつけるとか自立させるというのは何でも1人でできるというのではなく、困ったときに頼れる力をつけること。集団づくりは繋がりを生きる力にしていくということ。外国にルーツのある子について、集団の中で繋がるためには、先生自身の在り方が大事。子どもが変わっていくのは成功体験でなくいろんな人が関わって安心安全の居場所を提供したからだと思った。

宮崎 子どもたちがどこで生まれどこで育つかという環境格差を感じる。子どもたちの悩みをゆったり聞ける人が少ない。環境づくりをしていかななくてはならない。

報告者 成功体験を自信につなげることが危険という意見があったが、同じ成功体験ばかりでなく、いろいろな成功体験いろいろな自信を持つことが子どもの見方、裾野を広げることになる。



I はじめに

分散会基調に先立ち、協力者団より昨年度担任して出会った子どもと保護者との関わりについて報告があった。

討議の柱を確認した後、報告・討議に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

ー報告1ー②⑥

それはだめです～綴ること、読み合うことにとりくんで～
(鹿児島県同教)

ー主な質疑と意見ー

京都 ①自分の思いを綴り共有することは素晴らしいことだが、そこに至るまでにどのように子どもたちに投げかけて、それを共有する授業になったのかについて②愛花さんにもう一度話をするようになったいきさつについて。

報告者 このクラスは、去年学級崩壊をしている。一人一人がバラバラで、孤独感を抱いていた。何とかしたいとみんなが感じていた。みんなに分かって欲しいこと。先生に分かって欲しいこと。を綴ってみないかと投げかけた。そこから一枚文集を作っている。それを許可をもらって、みんなで読み合うようにしている。それにみんなの感想をもらい、さらに学級通信に載せ、保護者に伝えるようにしている。それでも最初の内は本音を語るようなことはなかった。2学期になって少しずつ本音を語るようになってきていた。2つ目の質問については、「先生、私あきらめました。」という発言のあと、卒業まで残りが無い。もうやるしかないと思い、賭けと言えば賭けなんだけど、とにかく私の思いをぶつけてみた。

滋賀 子どものことは二の次で、実践をまとめることが大事とはどういうことか。また、子どもの前では語ってこなかったと言っていたが、何故なのか。

三重 愛花さんの日記から1回目に何も変わらなかった。(あきらめている状態)にもかわらず、再び愛花さんに関わっていった。1回目の時の周りの反応を教えてください。

報告者 子どもと関わっているうちに計算している自分がいた。ここでこういう仕掛けをしていけば、子どもがこう変わるのではないかと、教育の力で子どもを変えようと、ずっと思っていた。だけど、自分が変わらないと人は変わらない。人を変えようなんて、すごく傲慢な話であって、まずは自分が変わることだと気づいた。本当にあきらめていたら(私の)家に来ない。(家に来てくれたのは)もしかしたら、心の中で助けを求めているのではないかと感じた。だから、愛花さんの日記をクラスで読み合うことにした。愛花さんと同じ思いをしている子がクラスの中にいる。きっと愛花さんの思いを受け止めてくれると信じていた。9月になって最近、愛花さんに「学校はどう？」と聞いてみると「先生、学校が楽しいです。」と答えてくれた。「何で？」と聞くと、「先生には教えません。」と言った。しかし、次の日の日記に「バトンプスの練習が楽しい」「応援団に入ってみんなを応援したい」と綴っていた。この日記からも

愛花さんがクラスみんなと関わり合っていて楽しく生活できつつあると思う。

三重 私自身も綴る・語るという活動をしている。実際に子どもたちが書いてきたものをクラスに開いていく時に、私自身は保護者の方に知らせる。先生は、どういう形でやっているのか。

三重 愛花さんの苦手感・困り感をマラスの子は知っているのか。(共有できているのか)

報告者 家庭とのつなぎ方は、許可をとる。子どもの誕生日にバースデーカードを送っている。その時、保護者の方に名前の由来とか、これまでの生い立ちとか、書ける範囲で構わないので、保護者からのメッセージをお願いしている。この日だけは、その子のことをみんなで励ます日にしたいと伝えている。1年生の時からなぜ支援学級できているのかということ語られずにきている。それは学校としての特別支援教育について支援体制ができていないという現状がある。今年支援学級の担任となった人と愛花さんのことについてみんなに語っていきこうと取組を続けてきた。改めて愛花さんの困り感等をみんなに話してほしいと言ったら、わかりました。と話をしてくれた。運動など手足が上手くコントロールできないところがある。そんな時は、みんなでサポートしていつている。

京都 愛花さんに対して、学校としてできることはなかったのか。愛花さんの困り感を、先生自信がまずどうとらえているのか。また、先生自身の障害観はどうなのか。

報告者 障害のある人、障害をもった人、…生きづらいこと…身の回りに生きづらい障害があるからその人は苦しんでいる。だから周りが変わっていかなければならない。と話している。それ以上は、まだ言えていない。また教えてください。

—報告2—⑩

先生、あのさあ…知つとると思うけど…

(三重県人教)

—主な質疑と意見—

奈良 Aの人権作文は、みんなに公表したのか。Dは、疎外されていると書いてあったが、Dと他の子どもたちとの繋がり、どうなっているのか。

京都 なぜAには踏み込めなかったのに、Bには踏み込めたのか。子どもたちに踏み込むために、

日頃から意識していることは何か。

三重 Aの家庭環境が複雑とある。それが友だち関係に影響を及ぼしていたとあるが、どのような影響を及ぼしていたのか。周りからどのように見られていたのか。

報告者 後日、クラス全体で読み合った。子どもたちからも感想を寄せてもらった。Dと周りの子どもたちとの関係は、まだまだ弱く、しっかりとしたものにはなっていないが、Dを疎外していた中心がBであったが、B、D、私の3人で話をした。Aがクラスの前で言えたのは、Bが自分の言いにくいことを語っていたのをみて、自分のことも聞いてほしいと思った。日頃意識していることは、今もがいている。Aの本音って何だろうと思いつながら、意識しながら関わっている。(まわりが) Aに対して本音をぶつけると、Aの叔父さんがやって来ていろいろ言われる。このようなことが何度もあり、Aとは深く関わらないようにしていこうとする意識はあった。まだまだつかみきれていないこともたくさんあるので、これからも取り組んでいきたい。Bの思いはしっかりと掴むことができた。だからBに踏み込むことができた。Aに対しては、なかなか本音に迫ることができなかった。だからAには踏み込むことができなかった。

大阪 Aの"もやもや"、"体を傷つけてしまう""親には言わんとって"というAの気持ちを、先生やクラスのみんなは共有しているのか。

報告者 今はDさんと支え合っている関係になっている。私ももっと深く聞いていきたい。

滋賀 子どもを一人ずつつないでいくということは本当にその通りだと思う。報告者は、子どもたちにどんな自己開示をしてきたのか。

報告者 私の小学校から今までの様子を作文に綴ったものを子どもたちに話した。

滋賀 自分は踏み込んでいたつもりでも踏み込めていなかった。自分の自己満足で踏み込んでいたつもりでいた。"踏み込む"とは、どういうものなのか。教師は、どこまで踏み込んでいけるものなのか、一体たれのためにしているのか(子どものため?自分のため?)、といつも突きつけられている課題と思っている。

三重 先生自身が語る。教師が語るタイミングが

大事だと思う。(報告者が)この2年間、こんなことを聞いたら子どもや保護者が嫌な思いをするのではないかと思ひ、なかなか踏み出せなかったとあるが、なぜ踏み出すことができたのか。この子どもに迫っていこうとか、この子のことを知りたいと思えたのか教えてほしい。

報告者 踏み出せなかったのは、自分自身の中にある「聞いたらあかん」というマイナス的に思っている部分があった。間違いなくそれが私の差別心だったと思う。ここ2年間、たくさんの人に教えていただく中で、行く(踏み込む)ことで分かっていくことがある。行くことで子どものことが分かった時の私自身のうれしさ、そういったことがまた、次に聞いてみたいと思うようになった。

—報告3—⑦

なんでわたしにありがとうって言うが

(高知県人教)

—主な質疑と意見—

滋賀 ①あったか教育推進協議についてもう少し分かる範囲で教えてほしい。②「認められたい」「褒められたい」と言う言葉が何回も出てくるが、その中で先生はいつも「ありがとう」と返している。「ありがとう」というのは、褒める言葉と感じられているのかな。私の感覚で言うと褒めるというのは上から目線のような気がしている。その点どう考えているのか。③お父さんと叔父さんの話はよく出てきているが、お母さんの姿が見えないので、その点も教えてほしい。④グループエンカウンターについて教えてほしい。Aさんはたくさんもらえたんだけど、13人の子どもの中には、ちょっとしかもらえないかもしれない。その点はどいう風にクリアできているのか。

大分 Aさんと、周りのクラスの子もたちとの関わりはどうだったのか。

報告者 あったか教育推進協議については、21年前に設立された当時は、子どもたちの生活も落ち着きがなく、荒れていた。子どもたちに未来を託していけるためには、ただ学校が、保育園が…と言うのではなく、保護者・地域が一つになってすべての子どもたちに関わっていくことが大切だという思いから、地域全体の心の繋がりを大切にしている。活動内容に関しては、地域の清掃活動をしたり、人権作文の発表をしたり、学習発表会

という形を取っている。また、あったか子育て学習隊で、地域も学校も園も一緒になって子どもたちを見るという思いで活動している。大阪でのCCPの活動と関連もしている。「認める」「褒める」ということについては、子どもに対して上から目線のようにも感じるが、つつい教師が使いそうな言葉で、私の認識の甘さを痛感している。「ありがとう」と言う言葉を使った自分の考えとしては、目の前にあなたがいるというという気持ちを伝えたいという思いで「ありがとう」という言葉を声に出している。お母さんは専業主婦。だんだん様子が変わってきた。よそよそしくなってきた。お母さんも働きに出るようになってきている。Aさんとの身体接触も減ってきた。お母さんがAさんとの関わりの中でしんどくなってきている。Aさん以外の子どもたちにも、良いところが入るように配慮している。全員の子どもにカードが入るまで考えるようにしている。自分なりの配慮をしているつもりである。Aさんとの周りにも取り組もうとしたきっかけは、4月よりさかのぼる。2年生の3学期に下駄箱に画鋲を入れるなどという事が女の子同士であった。Aさん自身は画鋲を入れられたとか、入れたということではないが、それを静観していた上に、怒られていた子どもの様子を見て、上手な過ごし方を身につけていた。トイレにみんなを誘っていくというようなことをしていた。また、Aさんが自分（教師）の目の前以外のところで動いているのではないかと思っていた。何か裏で友だちを動かすような雰囲気もあり、そのことで、友だちがAさんに飽き飽きとしている雰囲気もあり、休み時間等には一人である事が多くなっていた。そのことがAさんとの関わりを深めていこうとしたきっかけとなった。

三重 Aさんだけでなくクラスの子どもたちに気持ちを引き出す取組をしていけば教えてほしい。

三重 お母さんのしんどい状況をどう掴んだのか。

報告者 朝の会などに自分の失敗談などを話しながら語っている。書くことが苦手な子には絵でも構わない。何でも良いから伝えてと言っている。Aさん以外にも家に帰りたくないと感じる子ど

もがいる。子どもたちの居場所を少しでも確保したいと考えている。Aさんのお母さんの情報については、地域の方からの情報である。学校からの情報はできる限り家庭訪問して伝えている。お母さんとは直接話をするようにしている。

三重 8月以降にAに対して取り組んでいる様子を聞かせてほしい。

報告者 9月、Aはふさぎ込んでいた。2学期になり「自分の就きたい仕事」について話し合っていた時、Aさんは「お店屋さん？」という子どもたちの発言に対して、Aさんは「違うし」と強い口調で否定した。その後、周りの子どもたちとも関わろうとしないAがいた。周りの子もAを傷つけてしまったという思いがあった。でもどうして良いのか分からない状態が続いていた。毎日交代でAと関わっていかうとする取組を続けていた。Aを勇気づけられる様な取組を模索している。

—報告4—⁽²⁹⁾

今まで見逃してきたかもしれない…

(滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

大阪 Aのかしこい人になりたいとか、ばかにされたくない。という思いというのは、周りの見方であるとか、されたことから影響されていると思う。できないことをあかんという雰囲気になっていっていると思う。報告の中にもあつが、日々の中の授業づくりであるとか、集団づくりの中で、先生が大切にしていることを教えてほしい。「できない」「分からない」ということを、ばかにしないような…というような周りの子どもたちの変化とか教えておしえてほしい。

報告者 それ以降担任をしていないので詳しく言えないが、授業に関しては、若い教師と話をする中で、教師がしゃべりすぎないように気をつけている。学習面での失敗とか間違いを、間違えてもいい、失敗してもいい。それが許されるということが根底になければいけない。そうしないと、子どもたちが学習に意欲的に参加できない。結局、学級経営とか、子どもとの関わりではないか。そこと授業というのは両立していかなければいけないのではないかと思う。大事なことは、子どもの前では教師でいるのだけど、教師でいる前に人間でなければならない。担任が失敗しないような、

失敗とか、ミスを見せない、ミスを隠すような、そんな人間が前に立っていて、どう指導するののかと思っている。Aを含めた周りの子との関わりだが、それぞれが生きづらさとか、しんどさとかを抱えていて、それは私の中でそれぞれ重要であるとか、緊急性があるとか、判断していたと思う。子ども一人ずつとの関わりは、「おれ、しんどいねん」と、まず自分ではき出せるというか、そんな雰囲気を作り出さなければならないと思う。でも、全員の子どもたちと信頼関係を築けたかという、そうはできていない。子どもたちどうしてしゃべって困り感をはきだせられる雰囲気を作ってきた。だから、私自身もできる限り自分を語ってきた。

奈良 周りの子とつなぐために、取組があれば教えてほしい。

東京 ①Aの家庭環境とか、背景を簡単に教えてほしい。②Aが変わったのは分かるのだけどAを差別していた周りの子たちがいた、避けていたとか…、その周りの子たちは自分がしていたことの差別性とかに気づいて変わっていったのか。③「さらけ出す」という言葉の危険性について、さらけ出すという言葉はどうとらえているのか。

東京 私が気になったことは、報告の中にもありました。「踏み込んでもらえていない」という言葉。「踏み込む」とは具体的にどういうことなのか。報告者はどう踏み込んでいるのか。踏み込むことの危なさというのか、上手く言えないが、その所をどうとらえているのか。子どもから聞いた言葉なのか、報告者が、子どもから聞かなくても感じ取って思っているだけなのか教えてほしい。

三重 10月3日の日記について具体的に教えてほしい。

報告者 周りの子とつなげる取組は、子どもたちの思いとか、家に帰ってからの生活の状況とかをつなぐという意味では、毎日日記を書いて学級通信に載せて、1年間みんなで見合っている。その関連で10月3日の日記がある。この日記に関して意見を求めることはしていないが、子どもたちから返事が返ってくることもある。Aの家庭背景については、お父さんもお母さんも、いらっしやる中で、Aに対して困っていると言えば困って

いるが、どうしたら良いという具体的な取組は浮かばない。確かにAは勉強が苦しいけど、同じような学力でお兄ちゃんもずっと学校に行けたこともあり、特に困っていなかった。Aの周りとの関係だが、私は子どもたちの前でそれは差別だと言ったことはない。また、それについてどうこうということはない。しかし、これまでのAに対する偏った見方から、だんだんと、子どもたち同士の自然な関わりになっていった。「さらけ出す」とか「踏み込む」ということについては、私はしんどい部分とか、自分の中で一番引っかかっている部分とかを知ってほしいこともあれば、知らせたくない部分もある。この人には言えるけど、この人には言えないということもある。自分が根底にもやもやしたものがある、自分の中でもっているものがある、それを知ってほしいことを出せたり、しゃべったりできる相手がいると、すごく楽になるんじゃないかと感じている。「踏み込む」とは、そういう部分に迫っていくというのを自分（私）の中では踏み込むととらえている。確かに危ないと思うが、一人の子どもの人生の中である期間でも何らかの形で大人として関わったことを大切にしている。その意味からも子どもに対してある種の覚悟をもって、子どもたちに向き合っていくべきだと思う。今村にならしゃべっても良いなという関係性を作る意味からも大切な取組と思っている。

京都 これまでの具体的な実践の中から子どもたちにどう伝えたのかということが聞きたいのだが、1つはいろいろな姿から、それを子どもたちにどうつたえたのか。その時の反応は。2つめは、授業の時の「失敗してもいいんやで」という雰囲気を作っていることで、子どもが無条件でみんなと遊べるという雰囲気をどう作っているのか教えてほしい。

報告者 このレポートはAを中心に書いている。もっと他にもやんちゃする子もいっぱいいた。1年間でAに対する比重が重かったかというところではない。できるだけいろいろな子たちのいろいろな姿を伝えていきたいと思っている。子どもたちからの日記をもとに学級通信は毎日出すということは心がけていた。できるだけたくさん

子どもたちに伝えようとしていた。少なくとも子どもが安心して学級にいられないと、自分を出せないというか、居場所もないだろうし、自分らしさもなく、のびのびと暮らせないのではないか。安心というものが学級にないといけないのではないか。自分を傷つけられるような所では安心して暮らせない。意見の対立はあったとしても思ったことが言えるとかそういうところを大事にしてきた。

—報告5—⑳

育ちをつなぐリレーのバトン (大阪府人連)

—主な質疑と意見—

三重 ①Aの手話であったり、他の子の特技であったりを広めていっていると思う。手話や特技を学校でどのように広めているのか。②子どもに語らせたり、クラスミーティングのところでBが自分の思いを語った。どうしてBが自分を語ることができたのか。どういう風に後押ししたのかを詳しく教えてほしい。

報告者 ①Aの手話をどう学校に広めていったのかについては、反省点の1つではあるが、Aにとって手話は当たり前のこと。その事を私自身が気づいていなかった。Aにとっては素敵なことなのに、もっと私自身が認めていかなければならないことであった。Aが富田小学校に来てくれてみんなが手話を学ぶきっかけを作ってくれた。また、富田小学校にとって、誰もが安心して学べる学校づくりをしていこうとAが卒業した後も、手話を続けることにつながっている。富田小学校に障がいの子どもが入学しても「この学校なら私も生き生きと生活していける」と思ってくれる学校にしていきたいので、Aが卒業しても富田小学校の伝統として続けていきたい。②「語っても良いかな」と思える仲間づくりが根底にあるのではないかと思う。その時も、まず第一に安心ルールをみんなと確認した。自分が語ったら誰かが聞いてくれる。誰かが受け止めてくれるという安心感のもと、Bは語ることができたのではないかと思う。その安心感を生み出すものは、子どもたちの前に立つ私自身であったなと思っているので、私の姿がもっと安心できる存在になっていかなければならないと思っている。

京都 人権学習は、その後の態度に表れる。授業

が上手くいければOKではなく、その後の行動がどうなるかが人権学習では大切である。クラスミーティングをしてクラスの態度が変わっていったことが報告から伝わってくる。普段どのように子どもたちに言葉かけをしているのか、どのような意識づけをしているのか、教えてほしい。

大阪 クラスミーティングをするにしても、先生が普段から心がけていることはなにか。

報告者 私自身も教師になって経験も少ないのだけど、日々学びだなと思って取り組んでいる。何を大事にしてきたかと言われた時に、毎年毎年出会う子たちを見て、去年の集団を見て、冷え切った関係が見えてきた。そこにクラスのしんどさがあるのではないかと思った。でも、そんな関わり方をさせてしまったのは、3年生の時に担任していた私なのかなと、私の姿がそう子どもたちに伝わってしまったのかなと、本当に子どもたち一人一人のことを見ようとしていたのかなと、見ようとする覚悟があったのかなと、自分自身の反省を生かして4年生の担任として子どもたちと関わってきた。今年は1年生の担任をさせてもらっているが、「本当にあなたのことが好きやねん」とまるとみんなのことが好きだと伝えながら関わっている。言葉だけでは安心できないので、私自身の姿を子どもに見せるように心がけている。「この先生は、私を見てくれているんだ」「この先生とならやっていってもいいかな」と思える安心感を子どもたちと共有している。

滋賀 一人の子のために始めた手話が学校全体に広がっていくことはすごく素敵なことだと思う。一人のためじゃなくて、みんなのためになる。そのことが集団づくりにもつながっている。そのことをもう少し教えてほしい。

報告者 私自身もまだまだ学んでいる途中だけど、今学校ではつらぬく連携会議というものがあって、「つながり」「ぬくもり」のつらぬくである。0歳から18歳までの子どもたちを見ている学校であったり、保育所であったり、地域で見られている教育機関の方が集まって、子どもたちのことを中心において話す時間を取らせてもらっている。日々の授業もあるので毎回毎回というわけにはいかないが、学校から地域担当の者が参加し

て、そこから得た学びを、学校に返している。地域ではこういう看取りがあるんだとか、保育所からの情報もあり、とても役立っている。

滋賀 一人の子を核として仲間づくりをしていく過程がよくわかる。インクルーシブの視点からも参考になることが多かった。一番印象に残ったのは、保護者の願いで、「地元の友だちをつくってこの町で生きてほしい」という言葉。「助けてもらってばかりだとできなくなるから」という言葉。「これからの社会を生き抜く力」をどう作っていくのか。子どもたちにどんな社会を作っていくのか。先生の考えを聞かせてほしい。

報告者 学校では、いろいろな取組を重ねているが、「これからの社会を生き抜く力を育てる」と言う言葉に集約されている。なんでしんどい思いをしている子が声を上げないと分からないまわりなんておかしい。そうでなく、しんどい思いをしている子に気づける子どもに育ててほしい。だれもがホッとできる社会をみんなで作っていくことが大切だと思う。

—総括討議—

協力者 1本目の鹿児島島の田中さん、3本目の高知の尾木さんのレポートからは、子どもを正しく看取るとはどういうことか、また、教師が自分自身と常に向き合っているか、について話し合いがもたれた。さらに、子どもが生活を綴る、語る、つなげる活動を通して、家庭とのつなぎ方についても、話し合いがもたれた。2本目の三重の殿納屋さん、4本目の今村さん、5本目の吉田さんのレポートからは、子どもが安心して自分を出し合える学級づくりについて報告があった。子どもの居場所づくりと一人一人の子どもをつなげていく取組についても話し合われた。共通していることは、一人一人の子どもとつながるためにどこまで子どもに踏み込めていけるのかということであった。自分をさらけ出し、互いに共感し合えた時に、子どもはこの人、この学級なら自分の思いを受け止めてくれる安心感や信頼感が生まれるのだということが確認された。自分をさらけ出すこと、困っていることや悩んでいることを打ち明けられる仲間づくりができることは、自分だけでなく、仲間の存在を認められる自らの成長にもつながる大きな成長だと思う。仲間とつながるスキ

ルを身につけた子どもこそ、本当の自尊感情が育っているといえるのではないか。将来、部落差別をはじめとするあらゆる差別に出会った時、相手の気持ちに寄り添い、一緒に反差別の側に立って行動できる人間に育ってくれるものと確信している。さらに真の自立とは、全てこなせることができるのではなく、できないことや悩んでいること、困っていること等を打ち明け、互いに手を取り合って課題を解決していくことができる力を身につけていくことである。そんな仲間集団を作っていくことである。総括討議では、みなさんから出された「これからどんな社会を作っていくとするのか」ということについて討議していきたいと思う。

滋賀 今まで沢山の子どもたちを担当してきたが、今村さんのレポートを聞いて、自分は今まで何十人の子どもたちを見逃してきたかを考えるとぞっとした。目立つ子に関わるということを利用して、サボっていたと思う。自己開示、踏み込むという言葉がでてきたが、それは教師の自己満足のためにしている、安易な取組をしてしまっているのではないかと反省している。自己開示をさせてしまうことは、その子の人生の一部にも関わっていることを教師自身が自覚することが必要だ。自己開示ができる力をつけることが生きていく力をつけることになると思う。

東京 自分はどうしても「さらけ出す」ということが気になっていた。友だちが信頼できるのであれば、必要なことかなとも思うのだけど、学習のことをさらけ出したことで、その子を下に見る子がいるのではないかと少し思った。そのことで新たな差別が生まれるのではないかと考えた。教えてあげるとい言葉も、上から目線で、ちょっと違うのではないかと考えた。それは部落問題についても同じだと思う。また、周りの子もAに対してしていたことに気づかせることも大事なことだと思った。

三重 コンプレックスな部分をさらけ出すことによっていじめに繋がるのではないかとということだけど、勉強ができないことはいじめられるので、それを隠すということは、部落出身だからそれを隠すのと一緒なのかなと思った。そうではな

くて、自分のコンプレックスな部分を友だちに話せることができることは、素晴らしいことじゃないのかな。自分のできないことを友だちにさらけ出して、友だちに助けてもらうということは素晴らしいことだと思った。

三重 私、ちょっと分からないんですが、先ほどの発言で、部落の子と遊んでやっていたら、同じように見られる…とか、私、むっとしたんですけど、別に遊んでもらわなくてもいいです。その考え方が部落を下に見ているのではないか。私が腹が立ったということは、そう受け止められたんです。踏み込むとかいうけど、本気でこの子に関わろうと思ったら、人間必死になりませんか。その気持ちでしょ。本気で部落差別をなくそうと思ったら、何回も何回も家庭訪問して、親の気持ちをきちんと読み取ってするのが教師の仕事と違いますか。みんなで人を育てるのでしょ。うちでは子どものことを宝だと思っている。そんな子を先生に託しているんです。

三重 私も「さらけ出す」ということを実践していく上で大事にしている。子どもたちには、まず、自分の生い立ちから語ろうとしている。コンプレックスを広げるのではなく、つらい時期があったけど、自分ががんばれたのはここだとか、周りの力があつたとか、自分の経験を暗いまま紹介すると、ネガティブに周りに広がっていくのではないかと思う。つらいこともあるけど、こんなところをがんばっているよと言い合える仲間をつくっていくことが大切なのではないかと思う。コンプレックスを語ることで周りから何か言われるのではないかと不安になる事もあるけど、そこをからかいとか、いじめにならないように 教師が責任をもって、覚悟して取り組んでいかなければいけないと思う。

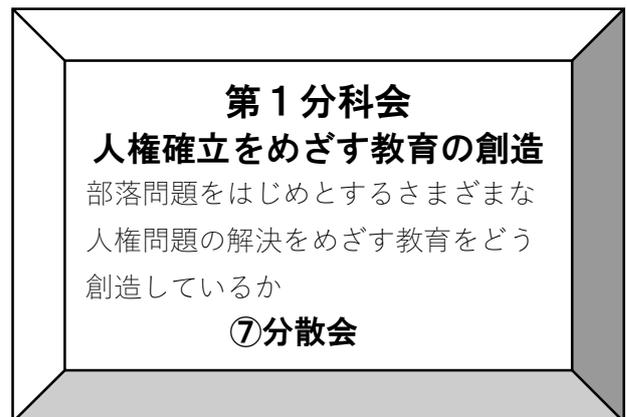
三重 勉強ができないことを伝えたのではなく、先生が伝えたのは、その事で悩んでいるということ。それが辛いんだということ。その気持ちをみんなで共有するというでなかったか。何かができない事って誰にでもあって、これが不安な原因だとか、辛いんだということをみんなに言えたら、すごく幸せなんじゃないかなと思う。何かを悩んでいることを差別することは、無いような気が

がするので、周りが困っていることを聞けるような仲間（人に）したいと思う。

滋賀 今、自分は就学前で働いている。7・8 回家庭訪問してやっと話ができるようになった。今も学校に行けていない状況は続いている。「さらけ出す」「踏み込む」ことは難しいことだけど、お母さんの話をきかなければどうにもならないこともある。私たち大人が見えない部分とか、心の中に秘めていることを探さないと、真正面からぶつかっていかないと、何も変わっていかないとと思う。

2 日間の総括

60 年前の状況を比較しながら今の教育の現状を語る。仲間づくりとは、仲良し集団を作るものではない。苦しい状況や互いの悩みを打ち明けられる集団を作ることである。子どもの課題は学校で見つける。その課題は子どもだけの問題ではない。話し合いを重ねることで、家庭との連携の中でその課題を解決していくものだ。さらに広島で実施されている家庭進出 12 箇条を例に挙げこれからの人権教育の在り方について語った。



I はじめに（基調提案より）

「自分が自分でいられること」誰にとっても安心できる状態を学校教育の現場をはじめとする教育環境に創出することがすべての教育活動の根底にあるべきであり、その地道な営みが差別の解消につながると信じるのが日々の行動の指針です。差別がいけないというスローガンだけでは、私たち、自らが差別を残してしまっている社会の一員であることを自覚し、自分がどう生きるのか、何ができるのか、私から考え行動することが大切だと考えています。このような自覚のもと、社会を形成し子どもたちを育てていくことにこだわり続けることが肝要であることを確認しました。

—報告1—③

12カ国の子どもたちと ともにたのしんで
(大阪府人連)

—主な質疑と意見—

三重 ワールドクラスの頻度、各ホームの取組は同じか、別か。

香川 ほかの子のワールドクラスへの認識はどうか。外国にルールのある子への理解はどうか。

報告者 月に一回木曜日の7時間目、時間は15:40~16:30までやっています。活動内容は、資料に載っているようにすべての子どもが同じことをやっています。進めるのは日本語でやっています。2017年にワールドクラスが開校するとき、校長先生が全校集会で話してくれました。「自分につながるルーツや外国について学ぶクラスです。」という内容を話しました。各クラスでも担任の先生から内容について話をしているので子どもたちは知っています。

東京 台湾と日本にルーツのある人間です。①朝鮮「民族学級に行きたくない」という子はワールドクラスの中では、どうなっているのか。どのようにアプローチするのか。②朝鮮にルーツのあることは根っこが深いと思います。言わなければ隠せてしまいます。ワールドクラスでの各国の違いをどうしているのか。③差別のある社会の中で当事者だけがルーツを大切にしているだけではないかと思っています。ワールドクラスに行っていない子への教育内容はどのようなものか。

報告者 ①参加者は減っている。親が行かせたくない、というのもある。在日の子は来ていない。渡日の子は来ています。毎年引き継ぎの中で伝え、保護者へ話をしているが、もう6年生になっている子もいる。②小さい学年のころから違って当たり前という雰囲気を作っている。各国のあいさつなどの言葉のカードを使って違いを考えさせたりしている。子どもたちの価値観を揺さぶる内容を考えている。

大阪 低学年から高学年になるにつれての本人の意識等はどうなっているのか。指導されているの苦労はあるのか聞かせてほしい。

報告者 低学年の児童は楽しく取り組んでいる。ほとんどの子は来ている。ルーツのことを話さない子もいる。気にかけている児童もいる。今まで

は「知る」ことが中心になっている。ナイジェリアの子は「隠せないから言う。」という子もいる。低学年と高学年で内容の工夫をしている。「する側」の問題である。

報告者 始めた当初はなくなりそうだった。しかし、先輩が「なくしたらあかん。」と言ってくれた。それまではなくなりそうだった。先輩の一言がよかった。今は、管理職、栄養教諭、事務、養護教諭も参加してくれている。

広島 中学校との連携、接続、見通しについてはどうか。

報告者 研修でも報告し、講師にも来てもらっている。中学校にも民族学級がある。しかし、ワールドクラスはない。他の小学校にもワールドクラスはない。

京都 日本人の子の参加はあるのか。

報告者 日本人の参加はない。目的が外国にルーツのある子なので、5,6年生に「地球クラブ」というのがある。守口市内には現在、小学校8校、中学校3校ワールドクラスがある。在日朝鮮人教育を中心にしてきた。原点を大切に忘れないよう現場を作っている。市外教としてぶれないところ「あなたを大事に思っているんだよ。」とやって続けることを大事にしている。中学生になると親の反対を押し切ってでもくる子もいる。「ワールドクラス」の開校と活動のなかで、小学3年生のAと出会います。フィリピン人の母親を持つAは、母親との関係に齟齬とずれがみられ、遠足の弁当を隠しながら食べるという状況であり、自らの母国に対して否定的なアイデンティティが大きくなっていました。当時何もできなかったことに後悔しつつ、開校に際して、「ルーツを大切に作る心の醸成と自分を大切にしてほしい」という思いを捨てずに準備を進めました。意見の食い違い、存亡の危機を乗り越え、存続と開校を迎えました。「ワールドクラス」が開校すると少しずつ子どもたち同士の交流が広がり、教職員の行動にも変化が起こります。教員間の情報交換が進み、子どもたちの現状や実態に必要な取組の構成を素早く進める行動化が顕著になりました。Aにも自国の文化について教室内でつぶやくことができる姿勢が芽生え、肯定的な姿勢が育っているこ

とがうかがえました。「ワールドクラス」の取組が進むなか、肯定的な変化がみられるものの、各学級でワールドクラスに参加する子どもたちが安心して自らのルーツの国について話せているのか、ワールドクラスがどの学級においても等しく認知されているのかは課題となります。さらに、ワールドクラスの前身となる「オリニマダン」の活動の意義を知る世代が減少する中で、「なぜ外国につながる子どもや保護者に寄り添うことが必要なのか」を認識し行動することが難しくなっていることは現実的な課題であるという提起を受けました。また報告者の幼少期からの自分自身の経験と重ね、自らのルーツとのはざまでせめぎ合う自身と周囲の大人たちの葛藤に苦しみつつ、子どもたちにルーツ（つながり）について考えていこうと促す取組と同じ価値観があるということに気づき、取組を推進する必要性があること、行動することの大切であるという学びがありました。

一報告2-⑳

「one」から「everyone」へ (香川県同教)
—主な質疑と意見—

京都 ①大雅さんって何者ですか。②合唱コンクールについてですが、インドネシア語の合唱コンクールはなかったのかな。

報告者 ①大雅はアンディと一緒に入学してきた子です。たまたま一緒のクラスになり仲良くしていた子です。大雅は心の優しい子です。困っている子がいればどの子に対してもすっと手を差し伸べてくれる、そんな子です。②インドネシア語の合唱コンクールは私の頭にはなくて、アンディ自身が日本語に興味を持っていたので、そのまま日本語の曲を選んでいきます。

香川 大雅さんの父について

報告者 教師不信でした。合唱前に髪を切ってきた大雅さんの姿を見てお父さんも変わってきた。父の変容も大きくあった。

三重 周りの子の理解はどうか。インドネシアについての理解はあるのか。お互いの異文化交流はどうか。

報告者 特別なことはしていない。社会科の地理の中でアンディの国について話してくれた。ただ、深いところまではできていません。

三重 ①学校での外国籍の子についてほかにもいるのか。②大雅さん以外の子はどうか。

報告者 ①バングラディッシュの生徒がいる。過去には中国籍の子もいました。その都度、環境についてできるだけ、配慮してきました。日本語指導の教員も配置しました。②1年生はあまり見られなかったですが、2年後半、アンディの日本語が上手になってきたこともあって子どもとの交流が進んできた。アンディの努力を見て、自分たちもがんばらなくては、と思っていた。

広島 討議課題にもあったが、子どもたちを取り巻く差別の現実とは何なのか。

報告者 特にはない。見られない。彼が外国からくるところに対して、周りの生徒は受け入れていた。三木町の人権教育の取組があったからだと思う。どの学校でも同じような取組があったからこそだと思う。

報告者 三木町で行われた結婚差別の授業の時。アンディ、大雅さんのいるクラスですが、温かいクラスだなと思いました。アンディさんが日本文化に慣れ親しもうという姿勢や日本語を習得しなければならないという思いと行動を目の当たりにするうちに、周囲の子どもたちとの交流も増加し深まります。アンディさんの考え方や感じ方にも変化が見られます。これまでは自分を中心とした考え方を表すことが多かったけれども、しだいに仲間意識の高まりをしめす表現が現れました。アンディさんの成長と変容の背景には、この地域が幼少中高・行政と地域がていねいな人権同和教育の取組を続けてきたことに関係していると指摘します。学校が、ひとりの生徒の悩みや要求に本質的に寄り添い、安心して対話のできる場所、仲間への安心と信頼を示し自分らしく生きていける場所、仲間とつながることで自らが変容しあらたなエネルギーを生み出すことを容認できる場所であることが大切でした。町が一丸となって人権・同和教育の取組を推進する基盤を整え、その場所の体現こそが、三木中学校がもつめる姿であると実感できたという学びがありました。

—1日目 討論より—

広島 9月のテレビ「目撃につぼん」という中で「地元では話しにくいという現実」と見た。「差別の現実」とは何なのか、どう切り込んでいったの

か。

東京 東日本は西日本から学ぶべき。日本語学級とは日本への同化政策だと思ふ。民族学級としてのルーツ、アイデンティティを大切にしたい。「差別がない」のではなく、「差別を見る目がない」のだ。アンディの変容のみならず、学校の変容はどうだったのかが大事なのではないか。

大阪 「系統的」とはどういうことか。どうすればできるのか。「同化」ではなく、「共生」の視点が大事ではないか。日本人になるのではなく、相手の国の言葉で取り組んでみるのが大事なのではないか。

報告者 (香川) 「友だちの作り方がわからない」とぼやいていたアンディ。

報告者 (大阪) 弁当を隠させてしまったこと、それこそが「差別の現実」だったのではないかと今日の議論を聞いていて気づいた。

京都 「困っている子を困っていない子が助ける」という構図をひっくり返したい。困っていることを体験することでやっと、困っていることが分かるのではないか。

まとめ 「差別がないのではない。差別を見る目が十分にない。」ということを実感していくことが大事だ。

—報告3—③④

「ちがいを認め、「豊かさ」ととらえられる集団を育む取組から
(奈良県人教)
—主な質疑と意見—

奈良 性的違和の子どもがいた。中学校に進学して不登校になってしまった。中学校との情報交換はどうか。

報告者 小中で情報交換をしている。更衣室等。

京都 Aさんは、男の子、それとも女の子？

報告者 女の子です。

大阪 質問者の意図は？

京都 「女の子です」と答えてもらってよかった。多様な性と言われると困る。特別な配慮をするのはおかしい。Aは女の子なのだ。ならば、それを大事にする。そのことで周りが困るのなら周りが困ればいい。考えるのは周り。

京都 LGBTを取り上げている学校はあるが、自分の学校の中に当事者がいると感じている職員はいない。その中で、①ハード面から変えていっ

た学校は難しいところもあると思う。そのあたりはどうか。②多様性を取り入れた具体を教えてほしい。③大人が介入すればするほど高まる差別意識にどう対応しているのか。

報告者 ①Aを含めた全校児童が過ごしやすい環境づくりに努めた。Aだけに焦点を当てずに全校児童に行った。②呼称を「さんづけ」にし、教師自身の意識改革を図った。③Aを弱い立場と思つて見たことはない。みんなと同じに見てきたし、接してきた。

東京 宿泊行事の対応に対して他の保護者に説明をしているか。

報告者 説明は行っていない。

三重 自分の不勉強なのだが、「人に裸を見られるのが嫌」は、差別の現実なのか、合理的配慮なのか。

報告者 Aは、心は女の子。女の子と一緒に着替えたい。それは合理的配慮。

島根 中3の女子が性的違和について言えずにいた。また、保護者が受け入れるのに時間がかかった。高校進学を機に、スカートをズボンにした。男子はズボン、女子はスカートという選択ではなく、どちらでも選べるようにした。

京都 基本的にだいじょうぶ。周りが困ればいい。トランスの子に焦点を当てるのはおかしい。どうして、トランスの子だけが困らされるのか疑問である。

大阪 姪っ子が3歳の時、「女の子だからピンクを着なきゃだめ。」と言われた。地域の中で言われた。男女混合名簿が当たり前なのに、水泳の時に分けると提案された。困ることがあれば、個別対応。

東京 この4月よりようやく混合名簿が導入された。差別の本質として言い出せないことがある。なぜ、言えないのか、そこを考えていく必要がある。

違いを認め合いながら共に生き生活する姿の広がり、隠れたカリキュラムに言及し意図的に仕掛け、自然な考え方と行動であるという価値観を共有することを進めたからであると実感しました。

また、男女混合、あるいは男女別というところ

から発想するのではなく、固定的で、古典的な観念を超えることも想定しておく必要があること、差別の実態は、自らの状況を本音として語りだせないことにハードルがあることを解消することを意図していく必然があると学びました。

一報告4-③①

6年1組 淡水魚水族館 (福岡県同教)

—主な質疑と報告—

広島 ①施設との連携はどのようにしているのか。②施設について、学級の中の他の子への理解はどうなっているのか。③Aは施設にいる自分をどのように思っているのか。

報告者 ①職員を連れて行って研修を行っているが、全体としては不十分。②特別にはしていない。担任任せである。③難しい。「もうすぐ帰れるかもしれない」と思っている。児童養護施設のことを「悪いことをしたら入るんよ」という心無い言葉を受け止めている子もいる。

滋賀 課題のある子に対して周りの見る目はどんな態度だったのか。

報告者 男性への不信感が強かった。引いていた。

三重 Aをつないできた淡水魚について

報告者 本物に出逢わせたい、という自分の思いがあった。

学級の中で自らを表現し語り合う取組の中で、自己肯定感の低さからか進路展望を明確に持てないまま刹那に語る A 児の姿を目の当たりにします。仲間とのつながりを大切にしながら、困りや課題を抱える仲間をいたわり、寄り添う A 児の姿は、仲間との関わりによって確かに変容し肯定的な考え方もできるようになっています。また、子どもたちの関係を構築していく過程にあっては、自治を求めるばかりではなく、まず教員としても、大人としてもいかに子どもたちとつながり、関係づくりをし、適正な距離を保ちつつも、子どもたちをつないでいくのかという意図をもって行動することが大切であることを学びました。

一報告5-③⑤

「市民館でおる方が楽。そのままの自分でおれるから」 (三重県人教)

—主な質疑と報告—

三重 部落問題学習をどのようにして周りは受け止めているのか。

報告者 「当事者を生きにくくさせているのは誰

なのか」ということを一貫して大事にしている。だんだん、学習を通して気づくようになってきた。「3月3日の風」を見て、西光万吉の言葉を通して考えるようになってきた。自分のおじいちゃん、おばあちゃんに「ここらあたりは通ったらいけんよ。」と言われたことを糾した生徒がいた。

三重 南光中に勤めて自分事にする事の大切さについて教えられた。自分の差別性について生徒に語ることを通して子どもに本音を言うことの大切さを感じさせているが、報告者はどうか。

報告者 どうして、当事者が苦しまなければならないのかと思っている。

協力者 学校として大切にしていることは何か。

報告者 正しく知ること。自分に引き寄せることを大切にしている。そのために、教師の思いを大切にし、何を語るのかを大切にしている。きれいごとではない本音を語るようにしている。常に今の自分がどうなのかを考えさせるようにしている。

協力者 市民館の様子について

市民館 地域学習活動では、保護者から話すことを大切にしている。部落問題は家族で話すことが大切である。中学生には、出会い学習を大切にしている。

京都 ①小・中の連携の姿はどのようなものか。

②市民館がなくなったらどうするのか。

報告者 ①小学校の先生に差別の現実をつかみに行ってほしい。そのためにも親と話をすることが大事だと伝えている。部落差別の現実を知ってどうして残っているのかを教師が語ることが大事である。そのことで部落差別が身近になる。②地域の願いを大切に市民館をなくさないように実行委員会形式をとっている。

三重 部落問題学習の基本の教材は目の前の先生。地区外の子どもの反応は？

報告者 「よりそう」具体を探るようにしている。市民会館での地域学習や活動に参加する中で、どの場面でも A が自分らしくいられることができる社会や集団を築くことを目指し、日々の取組を進めます。全校人権集会や学年の人権集会で仲間たちが自分のことを語る姿を見て、A は自分のことを伝えることの良さに気づきます。自らの生い

立ちや背景を語るまでには至ってはいないまでも、今のところの自分を表出するまでの距離に仲間との距離を近づけていると感じています。

中田さんは、これから A 自身が部落問題と向き合う姿と現実世界の背景に迫る取組を展開していくための覚悟を示します。なによりも自らを本音で語り、自身に向き合うことから、生徒たちに近づきます。A にとっても自分事として部落問題学習を学校で展開することはまだまだできていない現状にあるものの市民会館との連携によって自らを語るができるように取り組む必要を確信しています。

—総括討論—

広島 自分を語ることの大切さ。一番報告者の人が学んでいるはず。差別の現実とは何なのか、原点に戻り、再確認することが大切だ。

福岡 昔「市民館」、今は「地域交流センター」に勤めている。地域総出で子どもや親を見ている。誰が来てもいい場所。

三重 安心して学べる仲間づくり、自分づくり。自分の立場をまだまだ語れない現状、それは周りが作っているという認識でいる。

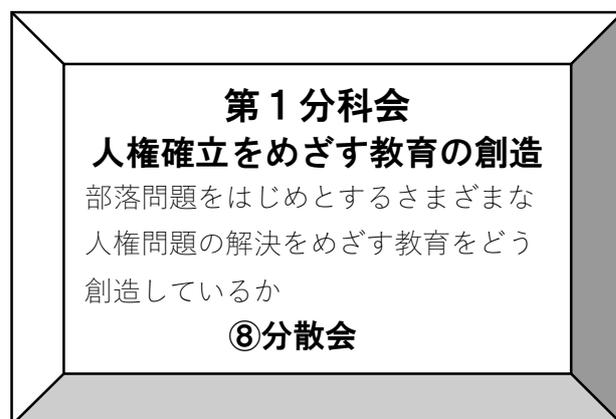
京都 当事者の思い、語ることなのか、今の社会状況の大変さを伝えているのか、語らすことが大事なのか、それよりも社会を作り出すことが大事なのではないか。生きる力、人間力、プロである教師だからこそ、大切なのではないか。在日チャングで部落の人との交流会で隣保館を見て「いいな」とつぶやいた。それは、そういう場所がないから。高校は小中とは違って一人でもやっていかななくてはならない。介入しすぎるとだめ。その仕方が大事。

まとめ

私たちは、この分散会のなかで、それぞれの課題の差別の現実から学ぶとは何かを追求することから、私たち自身の考えを展開しました。人権問題にかかる多様な取組に対して、本当に参加してほしい人が来てくれないのはなぜか。周囲に本音を伝えることができない、恐ろしいとまで感じさせるものは何か、本名を名乗り活動し、生きることがつらい道だと言わしめるものは何か、ことばの壁を超えることが異文化を理解したとは言えない、さらに深く共に生きる営みを求めること

ができるのか。

当たり前を疑う、固定観念から発想することを疑う姿勢の構築を考えることの必要性を問わなくてはならないのではないのでしょうか。見えにくくなっているもの、見ないようにしようとしている意識から、見ようとする、関わりとする行動力が問われました。学校で見せる姿と生活の中で見せる姿を意図的に変えなければならないのはなぜか。地域や学校の中で子どもたちの成長や変容が、個別の事象としてではなく、なかまとの交わりと生活する時間の中での肯定的な反応を仕掛けあるいは関わり、つながりを築き上げる営みであることを再考し学びました。隠れた（隠された）カリキュラムとしての条件ではなく、あえて隠されたものを顕在化し、積極的に育み、共有することを意図した日々の取組を深め推進することがあらためて大切であることに、私たちは思い至ったのではないのでしょうか。このことはかつて同和教育をはじめとする様々な人権問題を解決するために営まれてきた教育活動の基礎となるものでした。「仲間づくりに始まり、仲間づくりに終わる」これは時間が流れても変わることはないよりどころではないのでしょうか。だれもが自分らしくいることができる空間、社会は私たちおとなも含めて、ひとり一人の人権課題を共有し、語り合い、認め合い、ともに解決しようというベクトルをもつことで明日へとつながる力を持つのではないのでしょうか。



I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。特に「三 実践をとおして、保育者・教育者が何を学び、どのように変容していったのか、そしてそのことが子どもたちの変容にどうつながったのかを明らかにしよう」を中心の柱として討論し

ていくことを確認した。

Ⅱ 報告及び質疑討論の概要

一報告1-④

「自分を見つめて」～子どもたちとのかかわりで学んだこと～
(三重県人教)

一主な質疑と意見一

高知 差別事件はどのようなものだったのか。教育集会所はどういうところか。フォーラムとは何か。Aくんの変化は。

報告者 教育集会所には人権教育主事として勤務した。学校が終わった子どもたちと学習をしたりした。フォーラムはさまざまなことについてクラスで話し合う場面のこと。学級全体で話し合う前にも、グループで話し合っただけを話すかを決めたりする。現在、Aは欠席が減ってきた。友だちもそばにできるようになってきた。差別事件は封筒に入っている差別ビラが撒かれ、それを児童が拾ってきてわかった。見回りをしたところ 19 通あった。人権教育主事として関係者と見回りをした。

三重 地域では、差別ビラ事件が何回かあり、見回りを強化した。加害者を見つけ、なぜ、そういうことをしたのかを検証し、加害者の「被害者意識」もあぶりだされることとなった。

三重 「クラスの中で一番本音で話せていなかったのは自分」ということばに共感した。ほかにどのようなつづりが出てきているか。

報告者 自分がもやもやしていることを伝えるとそれに子どもたちが反応し、クラスでのテーマになっていく。「相手のふざけがこっちは嫌なんだ。それを言えないんだ」と返してきた子どももいる。教員との1対1の話し合いが少人数への話し合いへとひろがっていくようになっている。

大阪 Aの母の気持ちを知りたい。

報告者 家庭訪問で、母自身がいじめられた経験を話してくれた。Aと同じ思いをさせたくない。自分がしっかりと育ててもらえて来なかったのかAに対して自信をもって育てられていないかもしれないという不安を聞かせてもらった。

三重 部落問題と子どもたちの課題に対して躊躇していた報告者が変容していく様子が分かった。いっしょに考えていくことで変わっていきける。いっしょに考えるということの中身をもっと掘り下げてみることはできないか。

長野 躊躇してしまうこと自体の中に、子どもたちと同じ目線でつながっていきけるという見方もあるのではないか。いっしょに考えるということからさらに深めていきけるのではないか。

一報告2-⑦

受け身の人権教育から行動する人権教育へ

(徳島県人教)

一主な質疑と意見一

三重 「学校の文化に人権意識が根付いていくのを感じる」と書かれた理由はどのようなものか。

報告者 生徒とともに考える姿が広がってきている。

三重 どのように生徒に呼び掛けてとりくみを始めていったのか。どの時間に行うか、分量などを教えてほしい。

報告者 はじめに関心がありそうな生徒に声をかけ、そこから始めた。作文は、中学では総合学習、高校ではLHRの時間。分量は1400字。まず「作文の書き方」を配付して説明している。

奈良 評価項目に「人権侵害される人の視点に立つこと」とある。それは大切なことだが、差別に出会わないとその視点には立てないのではないか。差別をなくしていこうとする視点を報告者は持っているのか。この生徒にはこれを書かせたいという思いはあったのか。

報告者 経済的に豊かな子どもが多い。同和地区も近くにはなく接する機会はない。多くの生徒は知らない。そこで同和地区にフィールドワークに行った。一人ひとりにあった内容を教員側から投げかけてはおらず、テーマは生徒一人ひとりに任せ、生徒が思う通りに書いている。

高知 ①生徒が取り上げるテーマはどのようなものが多いのか。②目に見えない暴力とは何か。③アンケートでは「いじめが減った」とある。いじめにたいしてどんなとりくみをしているのか。④報告者自身にはどのような意識の変化があったのか。

報告者 ①いじめ問題、障害者、高齢者をテーマにしたものが多い。②社会によって違うが本校でいえば「ほかの生徒より良い点数を取りたいというノルマのようなもの」「自分だけ良ければいいという考え方」があるということ。③弁論大会の改善はほぼしつくした感がある。これからはクラ

スの中の問題となる。④最初は人権問題にかかわることに躊躇した。それは、かつて自分が世界の貧困問題や環境問題を考え、とりくもうとしたときに感じたものと同じ感情でもある。この大きな課題が自分に背負えるのかという思いだった。しかし、自分のこととしていまは考えられるようになってきている。

－ 1 日目の総括討論－

広島 25年前、教育集会所の主事をしていたことがある。そこで差別落書きがあった。差別事件が目の前にあることだけではなく、「先生、本気ですか」と突き付けられた三重の報告者にエールを送りたい。目指すところは、差別に対していまもこれからどう立ち向かっていくかだと思う。

奈良 地域教材の発掘は大切。歴史観の転換を生かした教材を。古文書のことばを正確にとらえ、歴史教育の中に生かしていく実践を。

三重 つづる、語る。三重には「一枚文集」のとりくみがある。つづること語るとは安心感を高める重要な実践。

三重 子どもたちが言いたいことを言えない。差別されたくないから緊張している。強い子を避けているということも差別ではないか。子どもは共感をもとめている。

大阪 親が裕福だからといって子どもがしっかり育っていくかどうかは分からない。だからこそ、弁論大会にとりくむ。人権教育をやってくれというニーズが明確に現れないなかで、一人で15年間とりくんできたことは貴重だ。

高知 見えない暴力が「成績による足の引っ張り合い」。そのことに対応するために人権弁論大会にとりくんできたことには意味がある。

徳島 徳島の報告者は、たえずいろいろなところを改善しようとしている。それが生徒の共感を呼んでいるはず。この先生なら、話せるという人間関係ができていないのではないか。

三重 「先生は仕事だから来ているんだろ」と私も言われ、ショックを受けたことがある。しかし、職場で「これはあなたの仕事でしょ」と言われた。「差別をなくしていくことが仕事」ということ。仕事ということばの意味を狭くとらえていた自分がいた。

報告者 深く自分を掘り下げて、自分の中にある

弱い部分をみておかないと子どもと話をしても伝わらないのだろう。しんどいことを話して受け止めてくれる人は、自分の中にある弱い部分をみている人なのだろう。

協力者 自分のこととして話す。これは大切なことだと感じた。いい討論ができた。

－ 報告 3－⑳

自分とつなげる、仲間とつながる人権学習をめざして
(鳥取県人教)

－ 主な質疑と意見－

高知 障がい当事者と児童とを出会わせる中では頑張っている姿に焦点を当てているが、頑張ることだけでよいのだろうか。カミングアウトすることは信頼関係がなければできないこと。カミングアウトについてどう考えているか。地域の方との出会い方についてどのように考えているか。

報告者 出会い学習の中で、障がいのある人と出会うと「かわいそう」という感想も出てくる。しかし、そこで頑張っている姿を見ることで子どもたちに響くこともある。

報告者 Aさんが発表を通してカミングアウトをするとは予想していなかったが、なかまたちの支えがあってAさんの発表につながったのだということがわかってきた。

報告者 地域のセンターの方との出会い学習は、差別をなくすためのとりくみについて話を聞くことにしている。

奈良 6年生の1学期には何をしているか。部落問題学習について詳しく聞きたい。

報告者 1学期にはSEL (Social Emotional Learning) にとりくんでいる。

鳥取 部落問題学習について。「差別された人びと」というと子どもたちは悲惨な人たちをイメージするが、そのイメージを覆していくような教材として、庭造り、解体新書などをとりあげ、水平社をつくった3青年の生き方などについても教材化し、討議もさせている。差別されている人を「かわいそうな人」としてとらえるのではなく、強く生きている人としてとらえようとするのが大切になってくる。

佐賀 年次進行でテーマを設定しているようだが、発達段階とテーマとの関連について説明してほしい。また、中学校との連携はどうなっている

か。

鳥取 家族、高齢者、障がいのある人。身近なところからスタートして、テーマは広がっていく。部落差別の問題は社会の構造についての深い理解が必要なので、高学年になっている。中学校との連携は課題であり、カリキュラムについて中学校と相談していくことは重要である。

—報告4—^{③⑥}

佐賀が佐賀であるために ～地域の人たちとの出会いを通して～ (高知県人教)

—主な質疑と意見—

奈良 「けがれ」について。中学生に穢れ概念を教えるのは難しい。どのような教材でどのように教えたのか。

報告者 ハレ、ケ、ケガレの概念で説明した。ケガレとは、わからないこと、こまること、不安なこと。病などに出会ったときに、10世紀、11世紀の人はこれで説明しようとしたようだ。沖浦和光、宮田登、網野善彦などを参考にして自主教材で提示した。

三重 出会い学習のなかで、子どもたちが自分のことを深く考える場面はあったのか。

三重 3年生になった彼らはどういふ変化を見せているのか。

報告者 3年生はハンセン病のことを学習しているが、「今年はハンセン病をとおして人権の学習をしました。ひどい差別政策への怒りもあるが、社会に広がっている無関心が許せない」という感想も出てきた。生徒会役員は「今の学校はどうなっているんだ。仲間を大切にしていないじゃないか」と提言をし、演劇を作り、生徒全体に問いかけるところにまできている。

徳島 解放まつりの成立プロセスについて聞きたい。

高知 被差別部落住民の差別をなくすための集まりが起点になった。行政や教員もあつまって解放まつりを内外に拡大させていった。人権のまちづくりのひとつの形となった。

報告者 私自身が劇づくりの取材で解放まつりの成立過程を知るようになった。

高知 自分と部落問題とのかかわりから始めようということで、行政での班別研修を企画し、それがまつりへとつながっている。行政職員の意欲

もあった。

高知 報告者はまじめにコツコツとやってきてくれた。「人間を大事に」はやはり大好きなことばである。母は運動にかかわるまでは差別者だった。運動にかかわるようになって母は変わった。母は人を大事にすると同時に、すぐ怒り、すぐ泣く。この思いが地域の運動を動かしていった。とはいえ、いつまで被差別当事者が発言をし、思いを語らなくてはならないのか。この問題は、差別をする側の人間が変わっていくべき問題のはずだ。

—報告5—^{③⑨}

子どもたちの成長とともに学ぶ ～民族学級を中心とした国際理解教育～ (大阪市人教)

—主な質疑と意見—

高知 人権三法もできたが、それを住民がどう使うかを考えている。中学校までは守られているが、その先は差別がある。卒業生はどんな状況にあるのか。

報告者 大阪の各地区で集いが行われているがその中で卒業生の部会がある。社会にはヘイトスピーチなどもあり、帰ってくる場所が必要。相談に乗ってもらえる場が必要なのが現状である。

奈良 実際にヘイトスピーチを耳にする子どもに対してどう働きかけているか。

報告者 3年生で、実際のヘイトスピーチの映像を見て学習する。民族学級でも学習をしている。ヘイトスピーチの筋の通らなさを事実をとおして理解できるようにとりくんでいる。

大阪 「日本人自らが、自らの民族としてのルーツや文化について考えを深め」という記述がある。この文の意図は何か。また、何をもちて日本人ととらえるのか。

報告者 日本人って何だろうといつも考えている。ある在日韓国・朝鮮人の講師から「常に私たちはルーツを考えている。日本人は考えることないでしょ？」と問われた。それから自分自身も考えはじめた。日本の民俗や文化は一つではない。日本人とは何か、生徒たちとともに勉強していきたい。

高知 民族学級は外国にルーツのある生徒だけで構成されているのか。私たちの解放子ども会は地区だけでなく地区外の学びたい意欲を持つ子どもも一緒に活動している。民族学級はどのような

か。日本人がいるとしたら保護者の声はどうか。
報告者 民族学級の成り立ちを考えたときに、ルーツのある子に受け継いでほしいという考え方がある。いま、新渡日の生徒も多くなってきており、母国語をしゃべりたいという思いの生徒もいる。Kポップが好きな生徒が興味を持っていたりして、「一緒に」という思いも私たちにはあるが、いまはまだ模索中。

—報告6—④

家にいんのが、しんどいねん～子どもの本音を自分の思いに～
(奈良県人教)

—主な質疑と意見—

高知 他の生徒の家庭訪問には行っているか。

報告者 全員の家に行っている。

滋賀 家庭訪問は同和教育の中心でもある。「ママ友のいなかった私が、家庭訪問をしてくれる先生とママ友になれた」ということばをもらったこともある。4月に全戸を回るのだが、家庭訪問が形骸化していないだろうか。同和教育の世代間継承を考えていかなければならないだろう。どうしたらいいか。

報告者 創造と継承というテーマで研究会を開いている。私の職場は平均年齢 31 歳。教員同士がそれぞれのやり方で子どもたちを大切にしている。それは隠れたカリキュラムとしての人権教育を機能させるということでもある。

大阪 Bの周囲の生徒たちが、報告者のBに対する接し方とおしてどのように変容したのだろうか。

報告者 Bに対するやり取りが変化した。たとえば、遅刻したBに「おまえ給食だけ食べに来たのか」ということばを発する生徒がいた。そのことばに、「Bだっているいろいろあるんだよ」と返す生徒がいる。そして、その場が落ち着いていく。

三重 日常的に子どもたちがお互いの生活について理解し合うような働きかけをしているのか。

報告者 すぐに思いをぶつけてしまう生徒たちが、いまなぜこの生徒がその姿を見せているのかを考えようとしていくように生徒を見守っていた。

奈良 家庭訪問は生徒に問題があるときに行うものだと思っていたが、そういうものではないと理解した。学級通信も手書きで生徒の名前を入れ

ながら書いているようだが、どのようなことを書いているのか。

報告者 生徒に取材をしながら、「ラブレター」のようなものと思って書いている。それは、「あなたを大切にしている」ということを生徒たちに伝えるということでもある。

—2日目の総括討論—

鳥取 生徒に寄り添いましょうと口では言えるが、何をすることが寄り添うことなのかについて考えた。自分の立ち位置をいま一度見直したい。

鳥取 「うちのムラは差別されているところだけど頑張ってる」と母に言われ、背中に重いものを背負って生きてきた。子どもたちも誰かと共有したいと思っている。受け止めてくれる子がいたらいいと思う。解放運動の中で自分は受け止めてもらい、共有してもらえた。まわりに受け止めてくれる仲間がいる学級、学校でありたい。カミングアウトが目的ではない。受け止めてつながっていける集団であることが大切。そして、多様性も大切。一緒に生活しながら力をもらおう。生徒をステレオタイプにつかむのではなく、いろんな生き方があっていいということを学んでいきたい。

奈良 部落史について。渋染一揆について、奈良では今は教材として使っていない。これは岡山のことであり、他の地域では同じような触書は出ていない。それぞれの地域の教材を掘り起こしていくことが大切。若い教員を育て、同和教育を伝承していきたい。今回の分科会は今までにない和やかさだった。もっとしっかりしろという言葉があってもいい。みんなで分かち合っていていけるような分科会にしたい。

奈良 「自分たちがいつまで頑張らなければならないのか」というマイノリティのことば。父も障がいを持っていた。かわいそうな存在ではなく、腹が立つときには反抗もした。障がいについても、社会モデルの考え方が大切。勤務校では交流学級ですべての時間を過ごしている。その子に障がいがあるからその学級で学ぶのが難しいのではなく、その学級が変わらなければならない。その子が困っていたらサポートもするが、当たり前のようにもめごとがあってもいい。ともに学習活動をし、教師ではなく子どもたちがサポートすることが大切。

三重 近隣の小中学校の教員から「家庭訪問に行くきっかけがない」という相談を受けた。私の職場では何もなくても家庭訪問に行っている。帰り道に子どもと一緒に話をしながら帰り、そして保護者と話をし、また、近くの家にも寄っていく。子どもと話をし、グループで話をし、学級全体で考えていくという流れ。そうした流れのなかで、自分のしんどい話もできるようになっていく。

三重 高1の生徒が差別発言を受けた。それが分かったのは、教育集会所での話し合いの中でのこと。大阪の報告にあった「相談ができる場が必要」という話に共感をもった。

大阪 1小1中でモデルに出会う機会がない児童生徒もいる。こんな生き方もあるという大人に出会わせたい。不安を出しながら考えてきた子どもたちもいる。ねらいを持って、出会い学習にとりくみたい。

大阪 民族学級を国際クラブに変えろという声もある。多文化学級などでのさまざまな取組もあるが、民族学級での実践があったからこそだという認識が重要。

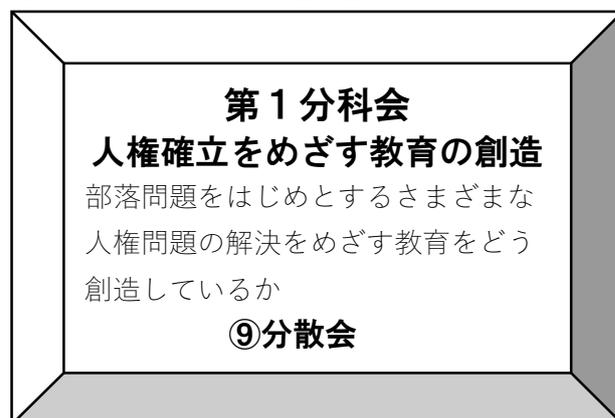
徳島 被差別の特性を持つ人の属性のカミングアウトについての話、ムラの子の話など、いろいろな課題があった。克服できているのだろうか。常にマイノリティがカミングアウトしたり、生き方を問われ続けている。このことも大切なのだが、マジョリティは何を問われて生きているのか。頑張っている姿と出会わせたいという話もあるが、被差別者がいつまで説明しつづけなければならぬのだろうかという思いもある。部落問題に対して躊躇するのはなぜか。そのことを聞きたい。

兵庫 大阪の報告の日本人の捉え方について。自分のルーツも外国にあり、マイナスのイメージを持たされてきた。同じように苦しんでいる子どもがいないか気がかりである。そのような思いをどれだけつかみ、自分は何ができるのかを考えたいと思った。

Ⅲ まとめ

2日間にはたくさんの学びがあった。子どもの変容、家庭訪問の実践、教師の変わり目などを確認することができた。今回の三重大会は「2年間をかけて若い先生方に実践を積んでもらった」との話聞いた。ほかの地域でも同じように学びを

深めていってほしいと思う。



I はじめに

基調報告では、討議課題をもとに提案され、多くの人の生き方から自分の立ち位置を確認し、何を大切にしようとしてどう生きていくのか、共に考える場になるよう、自ら語っていく方向性を確認した。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—⑫

この作文、他の先生にも読んでもらいたいです
(熊本県人教)

—主な質疑と意見—

三重 本音がいえるよう、これまで集団づくりでこだわったことはなにか。

報告者 部落問題学習が教えてくれる大事なことを子どもたちと学び語っていく。そして人の胸の痛みに気づけた。意識していることは、日常のおかしいことを言う。とりくむことになっている人権学習を自分と重ねることを大切にしている。

石川 語ることの重さをどのように子どもに伝えているか

大分 亜子さんのように、いろいろな環境の中にある子どもにどう関わっていったらいいかアドバイスをほしい。

報告者 まず自分が仲間になっていきたいと思った。一人で悩まないようにしたい。世の中にあるたくさんの偏見はすぐなくしていけないけど、一緒にたたかっていきたい。

—報告2—⑬

「くそばあ〜！今日も来てやったぞ！」〜ひとりひとりの居場所・子ども食堂〜(愛媛県人教)

—主な質疑と意見—

大分 どうしたら輪が広がるか。

報告者 チラシを配ってもよびかけても、みんな帰ってしまう。そんな中、口コミで広がるのは「自分がかかわっているんだ」というのと、だれかに評価されることがあると、そこから広がるのでは。

新潟 共に同和教育をやる仲間として、広げることが難しかったり、悩みもみんなあると思うが、がんばっていきましょう。

報告者 実際に子ども食堂に行き、仲間をつくっていくこと、自身の差別意識に気づかされ、自分が成長する場となっている。子ども食堂は、子どもたちにとって社会との接点となっている。

鳥取 子ども食堂がすごい勢いで増えている状況、ゆかさんの「父母がいてあたりまえ」と思わせている社会について考えなければならない。

—報告3—④⑦

鲁迅『藤野先生』を読んで (石川県同教)

神奈川 子どもたちの感想で、自分につながるものが出来たか。また外国にルーツのある子どもやそういった子どもたちが学習でどういう力をつけていったか。

報告者 外国にルーツのある子どもはいる。今回は特定の子どものたちに向けてという授業ではなかった。鲁迅や藤野先生の生き方にふれた感想はあったが、より深い感想はなかった。

石川 道徳的な読みではない、人権的な読みにこだわったとあるが、どういうことか。

報告者 当時の差別するのがあたりまえという風潮の中で、藤野先生が国は関係なく一人の人として鲁迅に関わったことを知ってほしかった。藤野先生や鲁迅の生き方から、自分の人生を考えるきっかけとして知ってほしかった。

—報告4—④⑤

“Say Cheese”～『明日も会えるかな?～群青3.11が結んだ絆の歌～』からクラス劇へ～

(大阪市人教)

—主な質疑と意見—

愛媛 津波の被害だけではない現状を伝えたということで、それは放射能汚染や福島風評被害のことなのか、内容を教えてほしい。

報告者 津波の被害で亡くなった人、そのあとの原発事故での避難。逃げた子どもや残っている子どものこと。避難した子どもたちが放射能のことのでいじめられて人間不信になって帰ってくることも伝えた。

大阪 避難している人は、本当に被害にあっている。周りは「風評被害」というが、「風評」というと、事実がないのに騒いでいるようになる。

三重 この劇をする中で、子どもたちはどう自分

とつなげたのか。

報告者 不協和音がおこり、お互いの意見をぶつけあった。そのことを乗り越えて、相手のことを知り、わかっていったところがあった。

—報告5—④④

「つながる」・「つなげる」力を育成するために
(徳島県人教)

—主な質疑と意見—

石川 先生と部落問題との出会いを聞かせてほしい

報告者 この学校にきて学び直した。この立場になって識字やワッペン運動に参加し、かつて「重い」と思っていたことが楽しい。識字では、ごはんをいただきながら、いつものメンバーと話す。生徒・教員をこえて仲間っていいなと感じた。きっかけをもらって行動することで、「あったかいし、楽しい」だからこそ続けられる。

三重 中高一貫校で、とても丁寧に高校で取り組んでいる。中学校ではどうか教えてほしい。

徳島 中学でもESD、ハンセン病問題にとりくんだりしている。中高生交流会に参加したり、高校生の姿を中学生がみて、教えてもらい、自分たちも成長している姿がある。

—報告6—④⑥

「自分のことを語りたい」 (三重県人教)

—主な質疑と意見—

石川 「関係ない」という言葉。善意から発する言葉であるが、互いの関係を分断していく。子どもからでたその言葉をどのような思いで聞いたのか。

報告者 Cが「何も思わん」と答えたのを知ったとき、その言葉に何があるのか聞いたが、そのときはCは言葉にできなかった。Cは本当は一緒に考えたいと思っているのに、なんでそう言ったか知りたかった。卒業してからAがプラザの仲間に伝えた時、Cは「何も思わんと言ったのは、Aが被差別部落出身だからとわかったからといって、急に関わり方を変えたりとかはおかしいと思ったからそう言った。でも、その言葉がAに葛藤させたり、不安にさせたりして、もっと自分は考えないといけなかったし、これからAと一緒に考えたい」と話せた。

石川 教師が自身の差別意識を見直すことが大切。高校時代の「関係ないやん」と言ってしまっ

たその後の話を教えてほしい。

報告者 今になって、自分の方が関係を切ってたんやとわかった。周りの先生にその後どうしたかと言われ、連絡をとってみた。今勉強していて向き合いたいことを伝えた。急に言われてもということだったが、今年中には会って話ができるかなという状態。

鳥取 報告で二人が自分をさしだしてくれた。

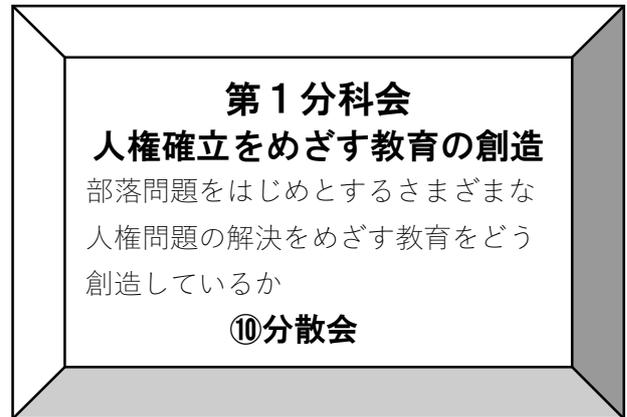
報告者 自分がさらけだせないのに、子どもに語れ…というのはちがう。自分の思いを受け止めてもらって、それで「語りたい」と子どもに思っしてほしい。

2. 総括討論およびまとめ

まず、「出会う」「知る」ことについて確認された。報告にあったように実際に福島、子ども食堂に行くことで出会い・正しく知ること。また親や子どもの本当の思いを知ること、子どもたちの背景や差別の現実を知ること。大阪市からは、福島といっても地域によって被害も様々なのに、ひとくくりに「風評被害」で終わらせるのは、「ないことにしてしまっている」ことになり、人権課題の1つとして考えていく必要性が言われた。

2つ目に、差別をなくしていく・共にたたかう「仲間になる」ということ。自分を見つめ、自分の葛藤もふくめて語ることで、人とつながる。人とつながり、ともに活動していくことで、事実や背景をみつめることができ、偏見や差別に気づき、自分も周りも豊かになっていける。人とつながり行動することが、人権尊重の社会をつくる力となる。それとともに仲間を増やしていくことの難しさも出された。また、しんどい立場にいる子どもたちにとって、青年会や子ども食堂など地域に居場所があることの意義も確認された。

3つ目に、「当事者とはなにか」。三重から人はいろんな場面で加差別・被差別の当事者になる。そのすべてをつなぐこと、仲間をつくること。それが立場の自覚ではないかという意見があった。また、徳島から立場宣言は「私はあらゆる差別をなくしていく」という宣言で、人に求めるものではなく、自分が変わろうとする宣言だという発言があった。まとめでも、実践報告協力者から「差別をなくす主体者であること」、「差別を乗り越える力をどう育てるか」が語られた。



I はじめに

分散会の基調では、出会いがつながることへの土台となり、自分を変える、なかまにつながるきっかけとなること、部落問題学習の学びを自分につなげていくことなどを確認した。さらに、明日からまたあの子に深く寄り添っていこう、かかわっていこうと思いを抱けるあたたかい分散会、みんなで創る分散会になるよう事実と実践をもとにした発言や交流をお願いし、討議課題を確認した後、報告・討論を開始した。

—報告1—⑩

すべての人の安心を目指して～Aを中心に考えたとりくみを通して～ (大阪府人連)

—主な質疑と意見—

大阪 AとCのぶつかりについて、具体的に教えてほしい。なぜAがCに謝ろうと考えたのか。その場面でAの変わりめを感じたのではないか。

報告者 今まではすぐに謝ろうとしなかったAの変化に気づいた。AのCに対する存在の大きさが伝わった。

三重 Aの母の思いはAに届いているのか。Aは自分の変容をどのように捉えているのか。

報告者 母に対する愛情とこわさを感じている。母が自分のために一生懸命になってくれている、働いてくれていることも自分のくらしと重ねてわかっている。Aの変容については、A自身がどう捉えているかはわからない、Aが変容を認識しているのかはわからない。ただ、まわりのおとな、全教職員から見てもAのまわりとのかかわりは大きく変わってきた。

三重 Aの思いを母はどう受け止めているのか。伝わっているのか。

報告者 Aの学校での姿をよく母と話をし、共有をしていた。

三重 Aの綴った自分の思いが学級の中でどの

ように広めたり、なかまづくりの視点でどのような具体的な取組があったのか。

報告者 班活動を軸にして、授業や行事などを通してなかまづくりを進めている。具体的には、班ノートを使いそれぞれのくらしを綴る取組をしていた。

三重 Aの書いた手紙を母に届けていたのか。

報告者 届けていない。母に伝えればよかったと思う。

三重 Aの厳しいくらしの現実、自分を語る取組を学級の中でもしたのか。

報告者 Aが自分の厳しい部分を学級の中で語る取組についてはできていない。

三重 教育実践という点では、思いを届けたり、自分を語るという取組が必要だと思う。

大阪 Bさんとの出会いについて。Bさんの学校、子どもとのかかわりについて。

三重 報告者自身が地域との出会いを通して「ステキなところだ」と心底感じた理由や報告者自身が変わったなということがあれば教えていただきたい。

報告者 今の学校に赴任するまでは、部落問題についての知識もない状態だった。いろいろな人の出会いや地域での学習会で、部落問題について学び直しができた。

大阪 報告者自身がAにこだわったきっかけやターニングポイントについて教えていただきたい。

報告者 2年生の時に、自分も部落問題について学び直しをするようになり、ある人の言葉「今もまだ差別はあるんです。」が胸に突き刺さった。その言葉とAとが重なり、Aを目の前にして、今もAは差別されるかもしれないことが心底いやに思った。Aもまわりの子どもにも差別する側には立たないでほしいという思いがターニングポイントになった。地域での学習やお祭りに参加し、誰ひとりとして差別されないまちづくりに取り組んでいる地域の人の思いや姿、生き方がステキだと思うようになってきた。

大阪 Aとの出会いで、報告者自身がほんとうのAの姿を知りたい、Aもほんとうの自分の姿に気づいてほしい、まわりの子どもにも気づいてほし

いと願っている中で、地域の中でもほんとうの姿で生きていこうとしているおとなの姿を出会いから気づかせていくことが報告者の願いだったのでないか。地域と出会い、地域のことを知り、差別はあるんだ、差別をなくしていきたい、差別のことをずっと考え続ける自分でありたいと思うようになり、Aにもその思いを重ねるようになった報告者だったと思う。Aだけでなく、まわりの子どもにもその思いを重ねることが大切で、ステキな報告だった。

大阪 (報告者の学校の元同担) 地域のことについての説明。

大分 Aの自覚について。あいまいなままで差別は見えてくるのか。

報告者 A自身が自覚をしているのか、母とも話をしたことはない。自覚しているかどうかについてまでは迫っていない。地域学習として、部落問題学習に取り組んでいるが、地区の特定はしていない。3小学校の中でも部落問題学習に取り組んでいる、取り組んでいないと複雑な状況である。中学校では、まずは地域のことを知る、ステキな街であると考えられる学習を積み重ねている。

大分 子ども自身が差別の現実や自覚についてどう考えているのかをつかんでおく必要はあるし、自覚の部分については、もっとつっこんでほしいと思った。

—報告2—⁽⁴⁹⁾

同和教育は、地域の大人のつながりから～鶴尾中学校の閉校に向けてわたちができること～
(香川県同教)

—主な質疑と意見—

福岡 「魅力ある校区をつくる会」について教えてほしい。

報告者 昨年度までは、各月に1回4時30分から約2時間程度、保・小・中・センターの管理職、人権担当の先生たちが集まり、人権学習についてと情報交換の場としていた。今年度からは周辺4中学校と幼稚園も加わった。主催は、文化センター(隣保児童館)である。

京都 「魅力ある校区をつくる会」を通しての子どもの変容や成果を詳しく聞きたい。

報告者 報告者自身がまわり、保・小・文化センターの職員の方に支えられている。成果として、

保育所や小学校との連携ができるようになった。小学校の先生とは、毎日電話などで情報交換したり、連携している。連携の土台となっている。

香川（連携している小学校の先生） 「魅力ある校区をつくる会」の追加説明。「15の春」をもとにそれぞれが目標に向かい連携を進めている。新転任の先生方への地域教材の説明、文化センターが中心となつての講演会、センターの文化祭への出展などの取組をしている。保・小・中のつなぎを大切に、中学校の先生に小学校の現状を見てもらい、顔つなぎをしている。小学校の教員は保育所を訪問したりすることで、中1ギャップなどつなぎをすることで、子どもが安心して次の就学を迎えられるようにしている。

三重 教育実践としての具体的な取組について、部落問題学習をどのように取り組んでいるのか。

報告者 部落問題学習を各学年1年に1回取り組んでいる。1年生では労働と文化について、2年生では就職差別の問題について、3年生では結婚差別の問題について7～8時間構成で取り組んでいる。小学校の時から人権学習を積み上げて生きている。優さん自身も差別の現実はどう立ち向かっていくのかを、クラスのなかまと共に考え、作文では母や家族の姿と重ね、自分も大切な家族をつくっていきたくと綴っている。教員も子どもたちと共に学んでいく姿勢でいる。部落問題学習を積み重ねることで、子どもと教職員がひとつの家族のように感じになっていく。

香川 学校運営協議会についての説明。

香川（報告者の学校の先生）組織についての説明。

香川 「魅力ある校区をつくる会」が鶴尾中学校の閉校後にどのように残っていくのか。形（会）があることが安心につながり、自分自身もつながっていたい。

報告者 文化センターを拠点にして、学習会を進め、人権学習・部落問題学習の大切さをつないでいきたい。周辺4校とも情報共有をしながらつながっていききたい。

香川（文化センター職員） 以前は地域あげでの部落問題学習に取り組んできたが、法の失効後は地域での教育は進められなくなっていった。学校では部落問題学習を進めてきたが、教員の入れ替

わりなどもあり、地域と学校との連携が希薄化していった。このままではいけないという思いから「魅力ある校区をつくる会」を立ち上げた。閉校するが同和教育がなくなるわけではない。同和教育にも温度差があり、部落問題学習をしない学校も増えてきている。部落差別解消法は大きなチャンスだと捉えている。周辺4中学校にも、部落問題学習に対する意識が高まり、拡がりを見せている。

三重 遅刻しがちだった優さんが登校できるようになり、まわりの生徒に対して、子どもたちへの働きかけはあったのか。

香川 報告者が毎日迎えに行っていたが、その姿を見て、報告者に「今日こそ連れてきてよ」という言葉をかけるようになったり、その姿からまわりの子どもたちが迎えに行ったり自然にできるようになり、変わっていった。

福岡 「魅力ある校区をつくる会」のような取組をしているが、時代の流れもあり、少しずつこれまで積み上げてきたものが継承されなくなってきた。危機感もあり、新たな動きを創り出そうとしているが組織的にはできていないので、「魅力ある校区をつくる会」の取組がヒントになった。

—報告3—④

差別の現実から学ぶ～私の学び直し～

（大分県人教）

—主な質疑と意見—

大阪 保護者と部落問題学習を進めていくためにどんな話をしたのか。学校内での報告者が学びをどのように広げていったのか。差別する側への対応や返しをどのように取り組んでいるのか。

報告者 子どもに話しをする前に保護者に報告者の思いを伝え、保護者の思いを聴いて取り組んでいる。先生に任せるとい話しをしたが、保護者会の中で、小学校の頃の部落問題学習、フィールドワークができなくなり、中途半端な人権学習をしている、中途半端なことをされてもという言葉をいただき、教職員の姿勢が問われたこともあった。校内での学びは、校内研修とともに、担任の先生と地域にいっしょに行き話しをしている。若い先生たちにどのようにつなげていくのか、報告者の学びを学校に伝え、保護者と担任をつないでいくことに取り組んでいる。まわりの子どもへ

の学習では、出された考えを学級のなかまとともに共有する場を大切にしている。保護者の考えを子どもへは返していない。報告者が保護者の思いを把握している。保護者の思いや願いをどのように返していくのかを考えていきたい。

三重 報告するにあたり、どういう思いなのか、どういう経緯なのか、どんなことを伝えたいのか。報告者にとって「揺らぎ」はどのような捉えをしているのか。

報告者 報告することは決まっていた。自分が気のついたこと、学んだことを伝えたいと考えている。多くの人に伝えていきたい。報告をすることで、またこの大会を通して、自分を見つめ直したいという思いがある。「揺らぎ」の中でのこわいという感覚は、自分の中の差別心をさらけ出されることがこわかったという捉えをしている。

三重 隠すこと、逃げることは恥ずかしいことではない、報告者の実践を若い先生にも伝え、重ねていくことが必要だと思う。教員が一人の人間としてどう生きていくのかを考えていくことが大切だ。

報告者 話しをすること、思いを伝え合うことが大切だ。「つながる」という言葉をよく学級でも使うが、自分自身が一番つながれていなかったと気づかされた。教職員がつながっていないのに、子どもをつなげることもできないことに気づかされた。

佐賀 差別事象から宣言ができたが、その宣言したことによる子どもたち、教職員の変容について教えてほしい。

報告者 95年の差別事象による宣言、はじめは学校をあげての犯人探しが始まった。当時の先生たちは、一枚岩になって、解放子ども会の子どもたちと取組を進めた。今、その時の熱い教職員の熱を突きつけられる現実がある。宣言、アピール文が出されたあとに、子どもの中から「ごめんなさい、苦しいです」という返事があった。今、私たち教職員は何をしているのか、当時の教職員の熱い思いや子どもたちの思いを現在も教訓として学び、研修の中で全教職員でこの宣言、アピール文から学んでいる。

大分 差別事象についての説明。子どもたちの中

から「何をやってもダメだ」という思いをもつ子どもも出てきた。奈良県の取組をヒントにしながら、まだできることがあるのではないかと子どもと教職員がつながり取組を進めていった。何のために部落問題学習をするのか、なぜ人権学習をするのか、自分が差別心を持たないためであり、常に子どもや教職員に問いかけている。

－報告4－㉞

自分が優しくなれた (三重県人教)
－主な質疑と意見－

福井 中学生が自分の弱さを表現するまでの積み重ね、日々の実践の中で、意識して取り組んでいることを教えていただきたい。

報告者 とにかく子どもと話しをたくさんすることにこだわっている。ノートを使ったり、直接話しをしたり、場合によっては小グループで話しをすることを意識している。正直に自分の思いを子どもに語ることを大切にしてきた。自分宣言の取組の前にも、報告者自身が自分のことを語り、子どもたちに伝えてきた。学校全体としての取組自体は弱かったことが課題であり、今は学校全体で子どもたちと話しをすることに力を入れて取り組んでいる。

大阪 差別を解消していくのはまわりの問題であるのに、なぜ差別される側が頑張らなければいけないのかということ突きつけられたことを思い出した。自分の思いを語ることで差別をされることがあるのではないかと思う。報告の中で、子どもが自分のことを語ることを、まわりのなかまはどう受け止めたのか。自分宣言をするだけではいけない、どうまわりのなかまたちへ返したのか。社会の中にある人権課題について、子どもたちは学んでいるのか。今後の学校としての、差別解消に向けた取り組み方について教えていただきたい。

報告者 それぞれが自分の生き方を宣言していく取組である。まわりの子どもも宣言を聴き、「すごいね」「がんばってね」という言葉をかけることも大切だが、社会に出て生き抜いていく力につながるの方が大切だ。大切なのは、自分宣言をした後の子どもたちの姿だと思う。自分宣言をすることで、周りとの関係が変わっていった。学校として人権課題についての学習、部落問題学習は、

カリキュラムはあるが進めていない、知識重視の現実がある。その現実から、卒業生が差別発言をしたこともあり、学校としてまずは目の前の子どもを大切にすることから始め取組を進めてきた。今後の展望としても、全校で取り組み、カリキュラムを見直して、自分自身を見つめていく作文を書き、フォーラムで交流する取組を進めている。

三重（報告者の学校）学校としての取組の補足説明

大阪 報告の中の「背景を知ることが大切だと思った」とあるが、なぜそこを見ることができたのか。特別支援学級である兄のことを知らなかったBにどのように伝えたのか。

三重 なぜこんなことをしてしまうんだらうという思いからスタートした。はじめは、表面的な生徒指導の部分しかできていなかった。背景を知ること気づけていなかった。いろんな先生にアドバイスしてもらいながら、背景を知ること近づいていった。兄のことについては直接Bに伝えた。

大阪 障がいがあるということをマイナスに伝えるかもしれないということを、教員としては慎重にしなければいけないのではないか。

三重 B自身が人を傷つける言葉を使っている現状があったので、Bには自分自身の言動を振り返る機会にしてほしかった。Bの課題である人とのかわりに向き合うためにも、兄のことも考えてほしいと思い伝えた。

香川 自分の実践について

大阪 中学校を卒業した後のつながりについて教えていただきたい。

報告者 書くことや話すことでつながることができる。その成長があって自立につながると思う。卒業に向けてではなく、もっと早くなかまづくりをする必要があると感じている。卒業後については取組をしたり、把握できていない。

大阪 「なかまづくり」について、なかまづくりをすればするほど、適応できない子どもたちも中には出てくる。社会に出ても適応できる「なかまづくり」が必要であり、中学校で一生懸命やったことが次の段階にどういきっていくのかを考え、悩んでいる。報告者の「なかまづくり」について考

えを聴きたい。

報告者 まだまだ目の前のことしか考えられていなかった。何のために取組を進めるのか、違う集団になっても生き抜いていく力をつけるためにどうすればいいのかが少しずつわかってきたところだ。ようやくなかまづくりのスタートに立てた。

大分 大分県の実践について

—報告5—㉮

なかなか前にすすめない自分に腹がたちました
～特別支援学校との交流を通して～

（奈良県人教）

—主な質疑と意見—

大阪 Aさんの友だちは交流をどのように感じていたのか。特別支援学校の課題、差別の現実をどのように捉えられているのか。

報告者 A 高等学校では特別支援学校とのかかわりは普段まったくない。過去に車椅子の生徒を受け入れ、卒業したが、支援やケアも必要な状況になった。現状はバリアフリーの設備等もない状況だった。

Aさん 友だちはなかなかコミュニケーションがとれない重度の障がいがある。顔見知りであることで、笑顔で迎えてくれた。友だちの母と話しをし、交流についてよろこんでおられた。

大阪 共生をどのように進めていこうと考えているのか。

報告者 A 共生というところまでには考えられていない。インクルーシブ教育の推進として、高等養護学校分教室が設置されており交流等が行われている。

大阪 現在、学校として交流をどのように意味づけているのか。交流を通して、自分事として捉えるためにどのような手立てがあるのか。保護者へも含めて。

報告者 A 様々な差別について考えるきっかけづくりとして意味づけている。保護者への発信はない。

報告者 B 教師主導の交流会ではなく、生徒が変わらなければ意味がない。生徒たちの顔が交流会を重ねることで笑顔になる。普段学校では見せない姿を見ることが出来る。担任の先生には、HR委員の生徒の様子を見てほしいと伝えている。口

には出せない変化が交流会にはある。

奈良 Aさんが差別の現実気づき、もっと勉強したいと変化した、自分の気持ちの変化について。まわりの友だちはどう感じていたのか。

Aさん 現在、社会に出て障害者施設で働いているが、障害者差別についてはイメージできていない。高校の中での学びで、現実を知ることの大切さを学ぶことができた。他の友だちとの熱量の差は当時感じていた。5回の交流を通して、自分の中での気持ちの変化はあった。もっとかかわっていききたい。まわりの友だちも巻き込んでいききたいという思いが生まれてきた。今は、個性と課題とのボーダーラインについて考えられるようになった。

大阪 障害のある子どもの進路をどうしていくのか。人権教育の中でどう捉えていくのか。

大阪 Aさんは純粹に小さな頃からの友だちに会いに行きたいなという思いから、交流会に参加してのではないかな。おとなが障害のある、なしで分けて考えているのではないかな。

Aさん 中学校で友だちと離れてしまい疎遠になっていた。ただその友だちに会いたかった。

報告者 B はじめはどう接していいのか分からない子どもたちが「いっしょやな」と話してくれる。同じ高校生なんだと気づいてくれることがこの交流会の意味があると感じる。

Ⅲ 総括討論およびまとめ

大阪 人権学習とは何か、部落問題学習とは何かを問い直している。新たな学びを得ることができた。地域と学ぶことを大切にしている。地域での子どもの姿を情報共有している。子どもたちのために何ができるのかを話し合っている。地域の方とともに部落問題学習に考えている。まちづくりをテーマとした地域学習に取り組んでいる。今年度は、防災を軸とした地域学習に取り組んだ。卒業生が自分の経験や思いを話してくれることやその姿に子どもが会うことが部落問題学習の一つの核になるのではないかと考えている。

三重 話をすることの大切さを学んだ。担任をはじめてして悩みを尽きないが、報告を読んでも自分の実践が薄っぺらいものだと感じている。これから人権作文を書くのだが、子どもたちがどんなことを書くのか想像できない。それがこれま

で自分がやってきたことの結果かなと思う。今も大切だが、3年間を見据えたかかわり、話しをすることが大切だと教えていただいた。教えていただいたことを問い続けながら、自分のやり方で実践していきたい。自分の学級の子どもたちがこの学級で良かったなと思える学級を作っていきたいと思う。

三重 特別支援学校への子どもが急増している。来たくなかったという思いの子どもがいる。厳しい状況にある。交流がない子どもたちにもいっしょに生活をする権利が奪われている状況にある。特別支援学校の中だけでは差別は見えにくいだが、一歩外に出ると差別に出会う。選挙権について教員が差別を生み出している現実もある。保護者も同じだ。

大阪 社会の中にある差別を子どもと共有して、ともに乗り越えていくなかまをどのようにつくっていくのか、ただ子どもとつながるだけではない。どういう方向で差別に気づいていくのか、保護者の捉えも多様な状況にある。さまざまな取組を通して、部落問題学習を通して、高校に行くまでに多くの子どもが自分の立場について気づいていく。その都度、地域や小学校、中学校と連携しながらつないでいる。いっしょに乗り越えていけるなかまを学校の中でどのように育てているのか、学校の中で当たり前前に部落問題を語れる日を再びつくるための取組が今回の報告を通して明らかになったと思う。

大阪 障害のある子どももいっしょに小学校から中学校へと来ている。その保護者からは毎日のようにノートに「明日もよろしくお願いします」や「学校に来させてもらっているだけでいいんです」と書かれている。そう言わせているのは何なのかを問い直すことをしている。社会の課題が保護者にそう書かせていると捉えている。小学校、中学校といっしょに育ってきた子どもが、いっしょに高校に進学するという取組が少しずつ行われている。子どもがおとなを変えるということがある。人権課題なんだということを常に問い直している。

奈良 障害とは何なのかを人権教育の中で語られなければならない。特別支援教育の位置づけは

どこなんだという思いがある。教員の人権感覚が問われている。どのように社会問題を見つめ、対峙していくのかをさらに考えていかなければならない。分離、分断されている状況があるのではないか。

香川 部落問題学習を通して、正しい知識を学ぶとともに、地域の方から生き方を学んでいる。子どもたちが自分の生き方と向き合い、前向きに生きていく、部落問題と向き合って闘っていく、解決に向かっていく力をつけさせている。教員は、現地研修を行い、聞き取りを行い、自作教材を作り、どうやって子どもたちに力をつけていくのかを教員同士で話し合っている。子どもたちはお互いの本音を語り合うなかまの集いの取組をしている。なかまの思いや自分の思いと向かう場をもっている。なかまの思いが支えとなり、寄り添う力となっている。

香川 人権学習を通して、折れない自分が大事だと思う。頼ってもらえる人になる、つながりをもつ、学校が第2の家となるように役割を担えるように日々取り組んでいる。

香川 センターに通うことで、部落差別の現実に無知だった自分に学び直しができ、出逢い直しができてよかった。

三重 将来を見据えた子どもの姿を想像して取組をしている。普段の生活の中で瞬時の判断が必要になる場面がある。もっと子どもたちに向き合うときに言葉ひとつにしても、瞬時の判断を意識してできるように取り組まないといけないと感じた。所内の先生と話しをすることで、自分の気づきや振り返りにもつながっていく。報告の中から思いがあるから取組があることを学んだ。また、保護者の思いも大切にすること、悩みや思いを聴き、受け止めることも大切であると思う。

三重 報告から熱意、時間、正義と勇気をいただいた。学校が居場所ではないという選択をしている人もいる。その人自身の気持ちがいちばん大切であり、その思いを受け止められる学級、なかまも大切だと思う。人にはいろんな気持ちがあり、環境があり、背景があるということを大事にしたい。ほっとくのではなく「あなたの気持ちを大切にしたい」ということを忘れないで大切にしたい

い。

大阪 部落問題学習、人権学習をするにあたって考えたいことがある。地域の子どもの言葉で「お前なんか俺らのことなんて分かんないのじゃ」、地域の保護者の言葉で「とにかくこの子が将来いろんなことに出会うかもしれん、その時に倒れない力をつけさせてほしい」がある。その力を私たちは考えなくてはいけない。いろんな取組を地域とともに試行錯誤しながら取り組んでいる。進路保障を念頭に置いて、5年後、10年後の姿、この子が笑顔でいられるようにと思って取組を進めている。問い直す毎日で見つめ直すためにはどうすればいいのか。それは卒業後の子どもの姿だと思う。今は分からないことも、その姿を見たときにあの時やってよかったなあと思ったりできる。卒業後の姿も追いかけていきたい。

まとめ

2日間の討議の中で、すべての報告やフロアからの意見の中に、「豊かな出会い」があった。仲間と出会う、おとなと出会う、地域と出会う、社会と出会うというつながりができることで子どもが変わる、そして教員が変わるという出会いの素晴らしさを学んだ。その出会いがつながりをつくること、人権・同和教育の中で大切にされてきたことが再確認でき、確かな学びとなった。そのつながりの中でも、何でつながるのかというソフトの部分は、それぞれの地域や学校、子どもたちの実態によって精選していかなければならないが、基盤である「差別を許さない」「差別をなくす」という基本に立ち返ることが大切である。その基盤がなかまづくりにもつながり、子どもたちから変わっていく、成長していく姿がそこにはある。

そして、部落問題を自分の問題として捉えさせるにはどうすればいいのか論議された。学校で、地域で、それぞれ実践される場所はちがえど、子どもたちに正しい出会いと正しい教育によって考えさせることが重要である。立場の自覚や把握も、本当に今、子どもや保護者とともに部落問題が語り合っているのか、子どもたちのくらしを見ようとしているのかが問われた。同和教育の歩みを振り返ると、いつの時代にも、保護者・家庭・地域とのつながりの中で実践が展開され、積み重ねられてきた。「つながる」こと、「連携」するこ

と、「出会う」ことは今の時代、今の学校・教職員にも求められ、人権教育を進める方法の1つの方法であるが、「差別の現実から深く学ぶ」ためには、その精神をもう一度問わなければいけない状況にあると感じる。大会のテーマである「差別の現実から深く学び、生活を高め、未来を保障する教育を確立しよう」という原点に立ち返り、学校の中だけでなく、外の社会とどうつながっていくのか、連携していくのか、同和教育の中で必然として取り組まれていた実践を、今私たちがもう一度「つながる」「連携する」とはどういうことなのかを考え、子どもの前に立つ必要があることを確認し、分散会のまとめとした。